COBALT-SERIES

星を堕(おと)すもの（前編）

ハイスクール・オーラバスター

Highschool Auraduster

若木未生



集英社

容赦なく照りつける陽光――七月。妖者方に工藤珈織という名の存在が得られた現在、無軌道な戦いはお互いに避けねばならなかった。空者総帥・斎伽忍自らが、妖者三忌将の首魁・勝呂との接触を図ろうとしている頃、伽羅王の近衛を務めるべきはずの道者四人衆が一堂に会し、里見十九郎の到着を待っていた。術者である彼を跪かせるべく……。ファン待望のオーラバスター第二期、ついに始動!!

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

星を堕(おと)すもの(前編)

若木未生

集英社

目次

星を堕すもの（前編）

序章　軌道……12
第一章　裁きうるもの……29
第二章　歴史に背くもの……86
第三章　濆されるもの……152
あとがき……203

それは永く無限に、はてなき螺旋のごとくに繰りかえされる戦いであった。

自らの内に〈神〉の識格を宿し、「斎伽」の血統を保つ赤子へ転生することにより世に顕れる、超越者――〈空の者〉。

人心にうまれる闇に憑き、鬼とも妖怪とも呼ばれながら歴史の影に潜んできた、魔性の存在――〈妖の者〉。

そして古に、〈天〉からさだめられし因縁。人を喰らうのが〈妖〉であれば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

空者方軍勢による妖者討伐のいきおいはすさまじく、妖者方の衰退は、時を経るうちに必至のことと思われた。

ひとりの〈空の者〉、九那妃が敵陣へと翻り、妖者総帥の座に君臨するまでは――。

前の大戦より九百年の時をこえ、現代に唯一、転生を果たした空者方総帥・伽羅王は妖者方に九那妃復活の兆しあるに対し、再びの

決戦にそなえ五名の能力者――〈術者〉を自らの陣として掌中におさめた。

妖者方、九那妃を奉じるは雷将勝呂、炎将剋司、幻将皓の三忌将。

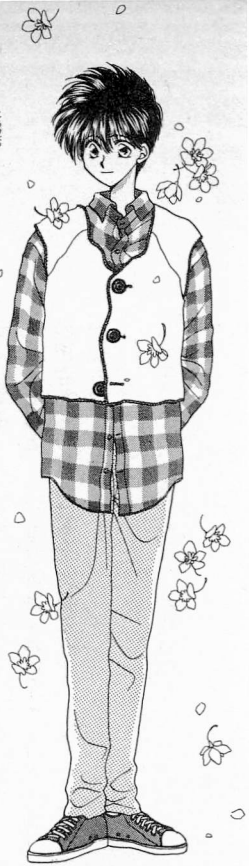
もはや純然たる斎伽の血は絶えるに等しく、あらたな同朋の転生するを待つもかなわぬ伽羅王は、ひとたび九那妃との相互封印をなすことにて大戦そのものを喪わせるかと見えたが、彼の擁する切り札「術力中和者」により封印は解かれ、両軍勢の対立はふりだしへと帰した。

斎伽の血脈を護る一族の若き長にして、空者伽羅王の莫大なる神力を身に宿す青年、斎伽忍に課せられた命題は重い。

しかし彼と、その私属の陣を構成する五名の術者たちの目的はすでに揺るがず、あきらかなものとなっている。

今年こその、偽りなき、大戦の終焉である。

人物紹介



崎谷亮介

私立高陵高校二年生。1月20日生まれの山羊座A型。唯一の中和能力者で術者側の切り札的存在だが、いまだにその力はコントロールが効かない。内向的でいささか優柔不断な性格も、諒たちとの出会いを経て、少しずつ強さを身につけてきている。



水沢諒

亮介の親友。高校二年生。8月1日生まれの獅子座A型。忍の命令で妖者退治のため全国の高校を渡り歩く炎の転校生。動の術力の持ち主で、光剣・朱雀を用いる。自分のせいで妹以外の家族を失うというつらい過去を持つが、いつも明るい前向きの姿勢を忘れない。

登場紹

和泉希沙良

新宿南高校二年生。11月29日生まれの射手座O型。動の術者で、力を集中させ手刀を使う。短気でわがままだが、正直な性格。空の者であった母の命と引き換えに生まれてきたため、家族と折り合いが悪く、その分従兄弟の十九郎母子に大事にされている。忍が名付け親。



里見十九郎

私立祥英高校三年生。9月26日生まれの天秤座A型。希沙良の従兄弟でフォロー役。静の術者で感覚が鋭く、結界防御を得意とする。沈着冷静な参謀型で人望も厚く、術者の中のリーダー的存在だが、自分に厳しすぎるところがあり、案外不器用な面を持つ。



人物紹介

私立高陵高校二年生。11月18日生まれの蠍座AB型。亮介の彼女。術者ではないが、事情に通じており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。普通の学校生活から離れていく亮介の身を案じている。諒とは亮介をはさんで好敵手の間柄。



神原亜衣（かんばらあい）



七瀬冴子（ななせさえこ）

高校二年生。1月21日生まれの水瓶座B型。強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ術者。忍の実の妹で、本家ではより濃い血を残すため婚約者として扱われている。忍を心から敬愛しているが、なぜか諒のゆく先々に出没することが多い。

登場人物紹介



牙（きば）

亮介たちが軽井沢で出会った男。実は空の者・伽羅王（きゃら）の側近〈使（つかい）〉である。伽羅王の携える天冥の剣〈羅王（らおう）〉や銀杖〈爪牙（そうが）〉にもなるなど、姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。時には絶世の美女となって、諒たちを戸惑わせるなど謎めいた〈？〉側面がある。



斎伽 忍（さいが しのぶ）

斎伽一族の若き総帥で、伽羅王が転生した現世ただひとりの空の者。5月2日生まれの牡牛座B型（または5月30日生まれの双子座）。〈天冥の剣〉事件で、九那妃（くなき）を封じるため一度は死を選ぶが、術者たちの働きにより復活。現在妖者側とは休戦状態にはいっている。

イラスト／杜　真琴

星を堕(おと)すもの（前編）

序章　軌道

灼ける陽光の落とす翳が、刻々と――激しく、濃厚になってゆく。
また、次の季節が巡ってくる。
（太陽は天球の涯をゆく）
あらたな定めをもたらさねばならぬときが来ているのだろう。
（月の沈黙は絶やされる）
窓のかたちに切断される光の白。壁と床とに刻まれる影の黒。絵画的なコントラストが生じる室内には、だが外気の高熱は伝わらない。
直接に射しこむ天然光を避ける位置に、今、その空間の主人のための台座は据えられている。
その、現実世界に造形されうるかぎりにおいて極限の美しさを得る存在が二枚のカードを足元に投げおとすのを、部屋の片隅に控える黒猫は無言の視界のなかにとらえた。

人が占札を手にするとき、そこにあるのは惑いであり望みであり憂いであり、未来の姿を求める心である。だが彼が求めるものはすでに彼自身の内にあり、カードの導く結果などその些細な表出にすぎぬことを、彼の〈使〉である牙も、そして斎伽忍も充分に知っている。黒い猫に変化した様相のまま――この形態がさまざまな局面で最も他者に違和感をあたえぬうえに実効的であることを、これまでのいくつかの経験で学んでいるのだ――斎伽忍の忠実かつ冷静な〈使〉は、いたずらに口をはさもうとはせず、先へとつづくものを待ちうけた。

（星を）

三枚めのカードをとった、瑕ひとつない彼の指がふと静止する。

驚愕の色は彼にはない。それは当然の、与えられるべくして与えられた暗示であるからだ。

だが……。

不意に――妖冶として。

斎伽忍はひとり微笑した。冷酷なほどに、はっきりと。

「つみびとか」

現在、必要とされているのは。

（墜星の罪を問われる者）

あきらかになった指針に蓋をすることも、現在の彼の仕事ではなかった。空者総帥伽羅王の霊力を宿し、また一族の血につらなるものすべてを束ねる長の座に、彼が斎伽忍の名をもって

未だ在りつづけている以上。

＊　＊　＊

「いかんな」

都内指折りの名門にして一流とうたわれる進学校である私立祥英高校の、特に神聖なる場所である職員室の前で掲示板を眺めながらぼそりとそう呟いたのは、元生徒会長の肩書きをもつ西城敦だった。

「容赦なく夏だな」

里見十九郎がその呟きを耳にしたのは、ちょうど彼が職員室を退出したところで西城が待ちかねたように口をひらいたためである。状況とタイミングとそして互いのこれまでのつきあいぶりから鑑みて、それは自分に向けられた言葉だとごく自然に十九郎は理解する。

「何の容赦がないんだって？」

「だって今はまぎれもなく七月だろう里見君」

「……それは確かにね」

「いかんよ、それは」

掲示板に貼りだされた順位表を見やりながら西城はそうくりかえす。

先日おこなわれたばかりの、大学入試を想定した模擬試験の結果が出ている。総合得点において校内学年トップを走るのは、相変わらず、そこにいる西城敦本人である。多彩な方面の才能に満ち溢れた西城が受験シーズンの到来に対して不安を抱くとは、あまり思えないが。もっとも、この友人の言動が額面どおりにうけとってはならぬものであることも、十九郎は以前からよく承知していた。

「あと半年以上も同じ地位をキープするだけだと思うと飽きるのかな？　西城君は」

「ふふふふふ。よくぞ言ってくれるな里見君は！　君のそういう非凡なところが好きなんだな、やはり俺は」

「俺はそう面白い人間ではないけれどね」

「謙遜しなくたってよかろう。少なくとも、里見君は充分にいやな奴だ。この西城が保証してしんぜよう」

西城敦は口元でにたりと笑うと、意味ありげな言い回しをしてみせる。十九郎は肩をすくめた。

頂点に立つ者がどんな言葉を欲しているか、正確に考えてしまえるから十九郎は一種、厄介な存在となるのだろう。

羨みの目に慣れねばならない立場の、特権者の精神を。

「ありがとう。俺も西城のそういう聡明なところは気に入っているよ」

「真顔で言うのはよしたまえ。照れる」
「他の顔で何を言えって？」
「そうだな。君はいつになったら京都行きをとりやめてくれるのかな？」
あっさりと話題を移した西城に、彼が初めからそれを訊くつもりでここに待っていたことを十九郎はようやく感じとった。
そうならそうと素直に言えばすむものなのだが……。あるいは、根本的に正直でない里見十九郎を陥落するための手順なのか。類が友を呼ぶとはまさにこのことかと十九郎はかすかに苦笑いした。
「まだ決めてないんだ。正式には」
「いかんよ。もはや七月だぞ、里見君」
「別に今すぐ願書を出すわけじゃないだろう」
「俺の心のはりあいというものがあるじゃーないか。今からでも遅くないぞ里見君、共に楽しく東京大学文科一類の星をめざしてみないかね」
「なら一緒に京都大学経済学部に行くつもりで勉強してくれても、俺のほうはかまわないんだよ」
「つもりか。今のところは」
西城は溜め息をつく。

「俺は君のことが必配だよ、里見君」
「どうしたのかな。いきなり」
「いや……心配だったんだが今はまあいいか。前におのれが確固たる理由もなく第一志望を京都にすると聞いたときは、ずいぶんと切羽詰まったようすだったものだから、これは里見、東京から逃げ出すつもりかと考えたものだった。俺の個人的な観察なのだが」
　逃避の策、か。
　この人物の理屈をこえた鋭さも、ひどく得難い、貴重なものだ。十九郎はそれをとても快く思うのだが、率直にそう伝えても皮肉らしくなるのがわかっていたのでやめた。
「一度は、いろいろなものから無理にでも遠ざかることが必要だと思えたんだよ。最初にはね。だけど今は……まだわからないとしか俺には言えないな」
「ばからしい。もともと、これ以上遠ざかりようがないところに里見君はおるのだよ」
　歯に衣きせずに西城が指摘する。十九郎はついに本気で笑いだしてしまう。
「やっぱり俺は京都に行くしかなさそうだな」
「おいおいおいおい」
「一応俺の志望校については、新学期までにはきちんと考えておくと、今、担任にも言ってきたばかりだよ」
「……まったく根回しの良い奴だ、我がにっくき友人は」

やむをえないという風情で、力なく両手をひろげつつ西城はそれ以上の追及をあきらめた。
「とにかく俺は里見がいつか、全力で俺と勝負してくれぬものかと待ちうけているだけなんだがね」
「それは誤解だろう。余力を残すほど俺は器用じゃない」
「嘘だね。絶対に嘘だね、悪いけど俺は知っている。まあ、他のことに力を向けるなとは他人の俺から言えはしないのだなあ……」
「……まあね」
自分で選んでやっていることだ。
すべて自らつよく望んでうけいれたものだ。多方向からの拘束も。物理的な負担の増大も。
結果として、西城敦の期待に安易にこたえることは、現在の自分にはおそらく不可能だろう。現時点でもすでに望みすぎているのだから……。
「わかった、わかった。里見君の今の顔を見たらなんだかわからんが俺はちょっと安心した」
「かえって気味が悪いな」
ひとつずつ順を追って、自分の身に何が起きているのかを説明できればいちばんいいのだろう。
だが西城には話せないのだ。斎伽の血にまつわる因縁は。
大きすぎる。

「夏だなあ」
西城敦が再びぽつりと呟く。
つまるところ、単に彼は淋しいのかと十九郎は納得する。
「ああ、夏休みの終わりごろに時間があったら軽くツーリングでもしようか、西城君?」
「よおしその言葉忘れてはならんぞ里見君!!　峠越えじゃ、我が愛しのダブルアール改で峠越えじゃあっ」
途端に勢いづいた西城は、職員室が間近だというのに不謹慎な盛りあがりを見せて、もはや用件はすんだとばかりにひきあげていく。
一秒後、ふと思いついたようにふりかえって、つけたした。
「しかしだな里見君、せめて身体だけは大事にしてくれたまえ。いくらなんでももう入院験ぎはいらんぞ」
「……どうもありがとう」
健康の重要さはよくわかっているつもりだと十九郎は答えたが、
「君の場合はずいぶん信用をなくしているから、まだまだ到底信じられたものではないな」
というのが、そのときの西城敦の、圧倒的な正しさに満ちたコメントだった。

＊＊＊

斎伽忍と、妖者三将軍の首魁にあたる〈雷将〉勝呂との会見は、いまだ正式なかたちでは実現していなかった。

妖者方に総帥・九那妃が――九堂珈織という名の女性が――得られた現在、これまでのように無軌道な戦いかたは、両陣営にとって決してのぞましいものではなかった。幾世紀の昔に妖者方へと九那妃が翻ったときから特に、その、戦の性質を規定しようとする意図は両者の間に浸透したように見える。元来、すべての空者のうちでも彼女ほど慈悲にあふれた女神はなかったであろう。ことさらに無辜の民を戦火から遠ざけるための、その頑なまでの正義心は……。

「では、よろしいのですね」

するりと形態を改めて人の姿を顕し、長身の背をまっすぐにのばしながら、無感情に響く声で牙はそう問いかけた。

「問題がないのでしたら、雷将と接触をとるように、私のほうで事を運びますが」

「さすがにもう、逃げ回っていられる時間は終わりだろう。――彼らも」

穏やかな調子で斎伽忍が答える。

「僕の疲れやすさにも、それはそれとして対処しなければならないということさ」



牙は沈黙する。

この孤独な王を補佐するために、せめてあとひとりでも空者が転生していればと考えることも牙にはある。

「私が、貴方の状態を慎重に、厳しく見守れば良いのだとはわかっています」

「それでいい」

本当に？

あまりに偉大な彼自身の力によって、再び斎伽忍の精神に空洞が生じるであろうことは、彼が伽羅王に相容れぬ部分をもちつづけていくかぎり必然の未来というほか、今はない。

（対処は、できる）

そうなったとき……いや、そうなると予測されたとき、択るべき策ならばある。

だがそのためには。

「不安なのか？　牙には」

忍が問いかける。

「いいえ」

迷わずに牙は首を横に振った。

不安、ではない。

「忍様の信じられたとおりになさるのが、今は、なにより必要であろうと思われます」

＊＊＊

その日の午後、自由ヶ丘の自宅に帰りついた十九郎が私室の扉をひらいたとき、簡潔に整えられた部屋の寝台の上には予定外の物体がころがっていた。

予定外とはいっても、居間のテーブルの横に放りだされた鞄の存在には、私室に入る前から十九郎は気づいている。それがつい先日、例の年下の従弟がどこかの女の子に貰って使いはじめたばかりのものであることも当然、十九郎の記憶のなかにはデータ入力済みだった。

他人から貰ったものは何であれ一度は使わないと礼儀に反する、というのが希沙良のポリシーなのだ。ただしあえてそれを使いつづけるとなると、また別の意味が発生してくる。

（新しい子が決まったのかな）

どうせまただめになると言いながら結局彼女たちとのつきあいから手を引いてしまえないのは、希沙良の誠実さのあらわれなのだろう。

詮索しようとは、もとより思いもしないが。

「遅い」

ベッドの上から不機嫌に希沙良が唸る。

「今日は午前中で終わりだろーがよ、そっちの学校は」

「そちらこそ授業が終わるには早すぎるな」
制服のままベッドカバーに身体をおしつけるようにして寝転がっている希沙良を見おろし、十九郎はかるく眉をひそめた。
右の掌をのばして希沙良の前髪の下にすべりこませてみる。
「……七度過ぎくらいかな」
「七度二分」
サイドボードに置かれた体温計を指さしながら、妙に偉そうな態度で希沙良が答えた。
「威張るほどの高熱じゃないんだけどな、希沙良」
「馬鹿にすんじゃねえよおまえ、もともと平熱低いんだよ俺はっ!!」
「知ってるよ」
だからといって、学校を病気早退した人間がわざわざ自分の家を通りこして自由ヶ丘にまで来ている理由にはまったくなっていない。
「夏風邪のひきはじめだろう、多分……。希沙良、一般常識として言っておくけど、そういうときはクーラーの効いた電車に余分に乗ったりしないで安静にしているべきなんだよ」
「だから来てんだろ、俺が安静にできるったらここだろ?」
「その前に俺を呼べばいいと言ってるんだ」
「……うるせえな、別に……ここに来れりゃいいと思ったんだよ」

対抗する言葉に若干つまったようすで、希沙良は反対側へ寝返りをうってしまう。
「あんまし甘やかすんじゃねえよ」
「……。笑おうか？」
「いいんだよ黙ってろよてめえはもう!!」
しかし、黙ってただ立っているのでは芸がなさすぎるというものだ。
「母君がいてくれたらよかったな」
七瀬冴子のような明確な特異能力とはやや異なる次元で、夏江の手は確かに子供たちの不調を癒すことができる。昔から。
それに倣うのはさすがに無理だろうが……。十九郎は希沙良の傍らに腰をおろすと、熱をもったその額にもう一度自分の右手を触れさせて、わずかでも彼の身に流れる〈気〉のバランスを正常へと傾けるようにした。添えられた十九郎の掌の下で希沙良はぼそぼそと何か不満めいた言葉をこぼしていたが、やがて、そこにはすぐに静寂が訪れた。
「希沙良？」
数分ほどそのまま待ってから、抑えた声で呼びかける。
落ちついた寝息がそれにこたえた。
心配はなさそうだ。
（このくらいの状態なら、一日眠れば治る）

祥英高校は本日をもってもはや夏期休暇に入ったも同然だが、希沙良の学校ではこれから学期末試験が始まるはずだ。妖者がらみの事件からかろうじて解放されている今、せめて万全なコンディションで学業に励んでほしいものだった。

（……いつまでだ？）

そんな穏やかな時期は、けっして永遠にはつづかない。

真の決戦に向けて、斎伽忍が始動の号令をくだすときがまもなく来る。それは必ず間近に、どうしても避けがたく、来るだろう。

（あの人はいつ、それを）

不意にインターホンのチャイムが室内いっぱいに鳴り響いたのは、ちょうどその瞬間だった。

「！」

感覚の先端にとらえられる、来訪者のもつ波動は、十九郎にとって未知のものではない。そしてその相手は、ここへ招き入れられることをあきらかに拒むであろう人物だった。

希沙良から静かに――彼を目覚めさせることのないように掌を退け、音をたてず十九郎は部屋を出る。インターホンで応える手間を省き、外につながる扉をひらくと彼は後ろ手にそれを閉ざした。

「ありがたいほどに慎重な人だな、君はやはり……」

硬い表情で、扉の前に立つ使者はぽつりと呟く。
彼もまだ、彼自身の通う名門校の制服をその身に纏ったままだった。服装を改める間もなく、ここへ遣わされてきたらしい。
その名を呼ぶことはせずに十九郎は無言で彼を迎えた。
道者四人衆の末座に就くもの。
遠野一真を、である。
「僕の用件はひとつだけだ。君への書状を預かってきた。内容については、僕から説明する筋合いは何もない。君の才覚によってきりぬけることをただ祈っている」
「了承した」
大仰な封緘の施された巻紙を、十九郎は彼から受けとる。
おおよそ、彼ら本家方の、特に気難しい方面からの、出頭命令……といったところだろうか。
遅すぎたくらいだ。
「御足労に感謝するよ、一真」
「僕はいつまでその感謝が続くものかと思っているんだよ、十九郎。……邪魔をしたね」
すげなく答えて、一真は踵を返した。
遠野一真にあくまで冷ややかな態度をとらせる原因は、十九郎自身にある。だが、それを悔

やむことも、現在の十九郎にはもはやゆるされていなかった。

（俺が選んでしまったことだからだよ）

一真の背を見送らずに、彼は扉の内へとひきかえす。

なにもかも。

すべて、最後には、自らの選んだとおりにしか運びはしないのだ。

第一章　裁きうるもの

1

目覚ましのベルは、ずいぶんと前に鳴っていた気がする。
窓にかかったカーテンの隙間から届く直射日光の刺激が瞼の真上まで到達したところで、やっと自分のおかれた状況がぼんやりとわかってくる。ここが布団のなかで、今が朝だということだ。光の加減からいっても、文句なしに太陽がのぼっているのは間違いない。
（ものすごく寝坊したかもしれない）
どうでもいいことのようにそう考えてから、そうじゃなくて、と亮介はがばと跳ね起きた。
「九時半っ!?」
一時間目は絶望だ。何をどうしたらこんな事態に、と頭を悩ませながらベッドをぬけだそうとして、足元に不可解な感触があたるのに亮介は気がついた。
（……なんでいるんだろう）
とりあえず、昨夜のうちに顔をあわせた記憶はない。

確かに窓の鍵はかけずにおいたし。
いつ侵入してきたかはともかくとすれば。
いいのだが、別に。
「諒？」
呼んではみたが、どうせ踏んでも蹴っても起きないのはわかっている。ベッドの下に、畳んだ座布団を枕がわりに、ジャケット一枚を上掛けのかわりにして器用に眠りこんでいる親友の姿に、亮介は感心と心配とが半々に混ざった溜め息をついた。なにもわざわざ、こんな、熟睡できそうにないような固い床で寝なくてもいいのに。
そういえば——きちんと学校に行かなければならなかったのは、昨日までの話だ。
「あああ、なんだ……」
期末試験が昨日で終わったのを忘れていた。どっと心の底から安堵してから、亮介はそれでも足音をしのばせつつ、顔を洗うために部屋を出た。
あとは、休み中に美術部の自由活動に参加するのと、八月の後半に夏期講習をうけにいくくらいだ。いわゆる、一般的な高校二年生としての役目は。
「おはよう……。父さんもう出かけてるの？」
「あたりまえでしょう、お休みの高校生とは違うんだから」
階段をおりた先の洗面所では、亮介に似て小柄な——とはいっても遺伝上での因果関係は逆

になるのだが――母、匡子が洗濯機の蓋をひらいている。
そもそも二階の勉強部屋に自由気儘に出没している水沢諒が、どうして一度もこの母親と遭遇せずにすんでいるのかは亮介にもよくわからない。そういった局面をかわすための動物的なアンテナが諒には最初からついているのだろう。
「時間合わないね、なかなか……」
呟いてから、亮介は冷たい水でざっと顔を洗った。
「でも一学期の成績なら、まあ合格点だろうってお父さんおっしゃってたわよ」
「だといいけど」
「お味噌汁あたためて食べてちょうだい」
「進路のこと、何も言ってなかった？」
「あら。だって。別に今、困るようなことはないんでしょう？」
きょとんとしたように問い返されてしまって、タオルで顔半分を覆ったまま亮介は視線をなんとなく泳がせた。
「ああ、うん……別に、いいんだ」

「あたしちょっと不満だな」

緑色に揺れるクリームソーダの泡のなかにスプーンの先を差し入れながら、神原亜衣は真顔でそんな言い方をした。

「崎谷君ってすごく性格のいい人だから実は企業人間もけっこう向いてるかもって思うけど。だけど本当にやりたいことがあって会社に入るんじゃなかったら、かえって周りの人にも良くないんじゃないかしら」

「でも、だいたい、俺の『やりたいこと』って漠然としてるんだよね……」

「それはほとんどの人がそうじゃない？」

「やっぱりそうなのかな」

「十六歳で将来が完璧に決まってたら、かえって大変でしょ。あたしが不満なのは、それなのに崎谷君が今から選択肢を捨ててるっていうことのほうなんだから」

「うーん……」

喫茶店のテーブルに頬杖をついて、亮介は曖昧に黙りこむ。亜衣の言っていることはあまりに的を射ているので、すんなり納得できてしまうのだが。

がつん、と突然、真横でガラス張りの壁が不穏な音を響かせた。ぎょっとして顔をあげると、ガラスの向こう側でひらひらと振られる手が見えた。

「あれ？」

偶然にしては凄い。亮介は目をまるくしたが、ガラスを叩いた当人はいたずらっぽい笑みを

浮かべたまま店の入り口にまわって、ふたりの座った席へと堂々とやってきた。
「じゃーん！　びっくりしてもらえた？　亜衣ちゃんに聞いてたのよ実は！　今日、渋谷でおデートしてるだろうって噂はね。ほほほほほっ」
「それだけの情報でよくみつけたなって気もするけど……」
胸をはる冴子に、半ば呆れながらも亮介は二人掛けの椅子を奥につめて、座る場所を譲った。
日頃の制服姿の反動なのかどうだか、人目をひきつけずにおかない、高価かつ豪華かつ斬新な――怪しげな、という表現もできないではない――二十代といっても充分に通用する、欧州系のデザイナーズブランドで冴子は身をかためている。ただでさえファッションモデル並みの美少女なのだ。飾りたてて悪いわけはないのだが……なにやら尋常でない雰囲気をつくりだしてしまっている。
「いやだなあ冴子さん、高校生が簡単にシャネル着てたら普通はゆるされないのよ」
「綺麗なのはいいけど……いたずらに衆目を集めないでほしいよね」
「あら、めだつから楽しいんじゃない」
苦言を呈する亜衣と亮介に、胸元へとサングラスをさしいれながら冴子はしらっとした答えを返す。
「どうせあたしは亜衣ちゃんみたいに可憐じゃないから亮介ちゃんの趣味にはあいませんけど

ねっ。あ、すいませーん、コーヒーフロートくださーいっ」
「なにも別に趣味にあわないとまでは言ってないけど。あの……かわいいし」
「崎谷君、そのフォローはちょっと違うと思うな、あたしは」
「そうよ全っ然っ違うわよ亮介ちゃん、ほんとに駄目ねえこの男たちは」
「でしょう？　ねえ」
いつの間にか、悪いのは亮介ということになって女ふたりはしみじみと頷きあっている。対抗できるはずもなく、亮介は力なく、はいそうですかと頭をさげた。
「でも……どうしたの？　冴子ちゃん……」
何か、特別な必要があって足を運んできたのだろうか。あらためて、亮介はまじめに彼女に尋ねてみた。
特に問題がなければ、それがいちばんいい。
「大丈夫よ、亮介ちゃん」
亮介の意図は察したうえで、冴子はさらりと言う。
「今のところ、何も困ったことはないわよ」
「……うん。なら、いいんだ」
「あたしはね、要するにあのバカに忍様からの預かりものがあって、それで呼びだしをかけたついでにお邪魔してみましたっていうだけよ」

冴子の口からあのバカの四文字が出た場合、その対象はただひとりに限られる。あれ？　と亮介は眉をひそめた。
「冴子ちゃん、その呼びだしっていつ諒に連絡した？」
「ゆうべ、留守電にだけど」
「……ごめん。今朝、あいつ、俺の部屋で寝てたから置いてきちゃった……」
「嘘でしょ!?」
とたんに冴子はげっそりとテーブルの表面にすがりついている。ごごごめんごめんなさい、と亮介は必死にくりかえした。
「裏切られたわ亮介ちゃんに……」
「いや、だって、俺が起こしても無駄だしあいつの場合……」
「水沢君てば、また夜中に崎谷君のところを襲撃してるの？　交流を深めるのもいいけど、ほどほどにしてくれないと」
亜衣も難しい顔つきで、そう亮介にクギをさしてくる。
「襲撃とかって、別に大騒ぎしてるわけじゃなくて……。よくわからないけど、起きたらいるんだよ、部屋に」
「それってもっと最悪じゃない、冴子さん？」
「そうなのよ、根本的に亮介ちゃんに甘えすぎてるのよあのバカはっ」

「最低ね」
「最低よねっ」
この鉄壁のタッグを前に、どんな弁護をすればいいものか、亮介にはきっかけすらもつかめない。やむをえず、亮介は親友の人望がさらなる奈落におちていくのをただただ見過ごすことにした。
（まあ、一種、自業自得だし……）
目的を聞いてしまうと、冴子のこの着飾りようもまた違った意味にとれて可愛らしいのだ。とてもそこにいる本人に、そのとおりには言えないが。
「俺、うちに電話してみようか？」
「ああいいわよ、ほっとけばそのうち来るわよ、あれも。ひとりで亮介ちゃんの部屋にいたって、どうせ寂しくなるだけよ」
悟りきった発言は、さすがに冴子である。
「それはそうよね。水沢君、寂しがり屋さんだものね」
「そうか……寂しくなるのか……」
「何を感心してるのよ亮介ちゃんはそこで？」
「えええーと……」
「あ、ねえ、冴子さんはどう思う？　崎谷君ってこのまま政治経済の世界に行っていい人じゃ

ないでしょって話を今、してたんだけど」
　コーヒーフロートが冴子のところに運ばれてきたのに合わせて、亜衣が話題を前のものへと戻した。は？　と冴子はぽかんとした顔つきで亮介のほうをふりかえった。
「亮介ちゃんは画家になるんでしょ？」
「……なんでみんなそこで同じことを言うんだろう……」
「だから言ったじゃない、崎谷君。少しでもちゃんと崎谷君を見てる人には、それくらいのことはわかっちゃうのよ」
　複雑な溜め息をつく亮介に、亜衣がだめおしの追いうちをかける。
「でも絵を描くだけだったらどこの大学に行ったってできるわけだし……」
「まあ、崎谷君にどうしても大学でやりたいことがあって、それと両立させたいって話なら全然いいんだけど。なんだかそのあたりが崎谷君の場合はまだはっきりしてないのよね」
「うーん……」
　亮介は再び、歯切れの悪い黙り方をしてしまう。
「なるほどねえ、これは亜衣ちゃんも確かに手を焼くわね」
　早々に、お手上げというように両手の指を広げて冴子が呟いた。亮介の、ここぞというところでの奇妙な頑固さは冴子もよくわかっているのだ。
「ちなみに亮介ちゃん、就職口にだけは困らないわよ。うちの系列の優良企業、よりどりみど

りで選び放題よ」

「あのさ……それってもしかしなくてもすごく不正っぽいんだけど……」

「意外と、水沢君の未来ってそんな感じだったりして」

ぼそりと亜衣が言うのを聞いて、亮介は自分のコーヒーを吹きだしそうになってしまった。

勤勉な企業戦士になっているかもしれない水沢諒というのは……。

（それでも残業時間に妖者退治してそうな気もするけど……）

なんだか。

不似合いで。——将来、の二文字が。

（え？）

一瞬、その自分の考えに亮介はひっかかる。

（どうしてだろう）

刹那的、なのだろうか？

どうしてそんなことを思うのだろう。

「諒が？　そうねえ……」

椅子の背にもたれて脚を組み直し、ゆったりとした口調で冴子が亜衣に答えた。

「そんなこともあるかもだわね」

あるわけない、と冴子ならば頭から笑いとばしていてもおかしくなさそうなのだが。

……冴子にもわからないということなのかも、しれない。

「どういうことがあるかもですって？」

ばさりと、冴子の頭上にLサイズのサマージャケットを遠慮なく落下させておきながら、問題の人間がその場に参入した。

「あああんたねええっ!!　このあたしの素晴らしい髪の毛の上に変なものかぶせないでくれるっ!?」

「普通やるかね、人を呼びだすときに『渋谷のどこかの適当にラブリーな店でコーヒーフロート頼んでる美女が目印』なんつー杜撰な指定を……」

心底から呆れきった態度で、諒はぶつぶつとそんなことをこぼしている。なんでそんな指定をされておきながらきちんとここにたどりついているかのほうが、かえって亮介には謎に思えてくる。

「いやいや申し訳ありませんね御両人方、こちらの迷惑千万なおねーさんのお相手をしていただいて」

わざとらしく合掌してぺこりと頭をさげてから、いそいそと諒は亜衣の隣の空席にすべりこむと特大プリンアラモードをウェイターにオーダーした。ったくしょうがないわねこの男は、と冴子がテーブルの下でヒールを踏みならした。

「……まあ、いいけどさ、別に」

毒気をぬかれた感じで、亮介は力なく口をひらく。
今朝の来訪がいったい何時頃からのものだったのか、その後いつまでいたのかなど、訊きたいことは若干あったのだが、なんだかタイミングを削がれてしまった。
「水沢君、今すごく幸せでしょ」
「あらわかってくださいます？」
「なにしろ、友情を深めるだけ深めて言うことなしだものね」
「いやそれがねえ、やはりひとつ段階をすぎるとまた更に深遠なものがねえ」
「ああやっぱり？　恋愛にもね、そういう側面ってすごくあると思うのよね」
傍観する亮介のことはそっちのけで、亜衣と諒はなにか二人だけでわかりあった会話を展開している。真剣に意気投合しているのか、底のほうで牽制しあっているのか、端からはさっぱり読めないところが怖い。
「忍さんからの預かりものって？」
もう少しおだやかな話題を求めて、亮介は冴子にそう尋ねてみた。
「なんか……この馬鹿者に渡すのはやめたくなってきたけど、仕方ないわね大事なものらしいし！」
「どうしてまたそこで冴子を使うかな、あいつは……」
「ばかね、そんなの当然でしょ、御信頼の証ってやつでしょ」

「んーにゃ、忍さんの俺へのいやがらせですね、きっぱり。とりあえず貰えるものなら貰っときますがね」

「あんたねええ」

この二人を一緒にしておくとはてしなく素直でない方向に話がころがっていくのも、あまりにも相変わらずのパターンである。もうフォローするのやめようかな、とかなり本気で亮介は考えた。

「一応、あたしから渡すだけは渡すけど、それが何なのかは自分でつきとめなさいっていうお話だったわよ」

ショルダーバッグのポケットの底からとりだした、銀色に光る小さな物体を、冴子は諒の掌の上に落としながらそんなことを言う。

「ふうん？」

気のないそぶりで諒が呟いた。

掌にうけとめたのは、ごくありふれたかたちの。

一本の鍵、だ。

「どこぞの部屋の鍵ですかね」

「別に、今は何も仕事のこととかは言われてないんだろ？」

亮介はそう確認せずにはいられない。

何もないのは、さっき冴子に訊いたことでわかっているのに。

「うん。大丈夫」

安心させるような視線を亮介に返して、諒も冴子とよく似た答え方をした。

「おかげさまで水沢君、このところヒマでヒマで寝てばっかりざんす」

「ずーっとそうだといいわよね」

さりげなく、亜衣が真実をついたことを隣から言い添えた。

「それは確かに」

諒からはすんなりとした同意があった。あっけないほど、簡単な。亮介は言葉を口にするかわりに、カップに残ったコーヒーを飲み干した。

嘘ではないのだろうけど。

全部が本当ではないこともわかっている。

こういう静かすぎる時期が、諒の中では、かえってつらいものになってしまうのかもしれないことも。

「お待たせいたしました」

ちょうどデラックス・プリンアラモードが諒の前に運ばれてきたので、亮介はその場の雰囲気から少し救われた。

(考えすぎてるのかな)

暗い顔をするのだけはやめようと思う。ここにいるのは三人とも皆、こちらの心の動きにひどく聡い相手ばかりなのだから。

「あの、ブレンドのおかわり、貰えますか」

「かしこまりました」

お冷やをお取りかえいたします、と若いウェイターは丁重に新しいグラスをテーブルに並べ、伝票をとって厨房に戻っていく。

「ここのウェイターって制服いいわよね」

「でしょでしょー？　あたしもさっきから思ってたのよそれ！」

「希望としては、ウェイトレスのスカートの長さがもう今ひとつ……」

囁きあう亜衣と冴子に、ぼそりと小声で諒が個人的感想をわりこませたとき、だった。

交換されたグラスを手にした亮介が、鋭い異物感を喉の奥で覚えたのは。

（え？）

氷、かと思ったが違った。

「！」

激しい音をたてて真っ先に椅子を立ったのは諒だった。

反射的に強く咳きこんだ口元を覆った自分の手に、なにか赤い色が浮かんだのを亮介は見た。

血液。

「飲みこむな亮介、吐きだしとけ全部!!」

「崎谷君、これ……!」

とっさに、亜衣が自分のハンカチを手渡す。

舌の表面に硬くあたる何かが、どろりとした血の感触と一緒に口のなかから出ていくのを亮介は感じとった。亜衣のハンカチを汚してしまいたくはないけれど……。

「ごめ……」

「いいから余計なこと喋らないでそこで!」

無理に亮介が言いかけた声を、冴子がぴしりと遮った。亮介の喉元と背中の両方に、その掌を触れさせながら。

喉に刺さった痛みより何より、一杯にひろがった生々しい血の味が胸を悪くする。こみあげる不快感のせいで涙までが滲んできた。

(破片?)

ハンカチの上に吐きだしたそれに、亮介は潤んだ目をこらした。

血に塗れた、割れたガラスの……破片、だ。

「ウェイター!」

大きすぎはしないが、容赦もない、厳しい声を諒は店の奥へと放っている。

すでにまわりのテーブルの客も、起きた異変の内容に気づいて眉をひそめだしたところだった。慌てたウェイトレスに呼ばれて、店の責任者とおぼしきスーツ姿の中年男が駆けよってくる。

「あの、いかがなさいましたか」

「ちとすみませんが、氷水のなかにガラスの破片ってのはさすがに洒落にならないので」

「は!?　それは……！　たいへん申し訳ありません！　すぐに救急車を」

「医者についてはこっちで足りてるんで結構。それよりもこの水を用意した人間に会いたいんですがね俺は」

「はあ？　ああ、あのですね……」

「呼んでこい、今すぐ!!」

そこまでの抑えた物言いを一変させて、がしゃんとテーブルの表面を諒の掌が叩いた。

「あまり大きな騒ぎにはしないで」

汗だくになった責任者が厨房へと走っていくのを見送ってから、低く、冴子が諒へとそんな一言を投げた。

冴子のもつ癒しの力について店側に疑問をもたれると、打つ手がなくなるとまではいわないが……フォローの手間が増えることになる。

「わかってる」

「よくわかってないわよ」
「おまえが何も考えてないだけだ」
遠慮のない言葉で諒がそれをはねつけた。少し言いすぎなのではないかと、亮介のほうがどきりとするような切り捨てかただった。
「も、申し訳ありません」
困惑の色をさらにつよめたようすで、先刻のスーツ姿の責任者がこちらのテーブルに戻ってくる。まったく、何が何だかわからないというような顔をしていた。
「実はですね、それが……」

2

どうも今ひとつ調子がすっきりとしない。
何度目かの溜め息を、希沙良は肺の底から吐きだした。
ただの風邪くらいいつもなら、そう長引かせはしないのだが。
「和泉君、今日のミーティングは全員出席だって部長が」
ホームルームが終わり次第、さっさと帰り支度をする希沙良に、同じクラスにいるテニス部のマネージャー、新藤広美が咎めるように声をかけてくる。

「病欠」
不機嫌に答えて希沙良は鞄をとりあげた。
面倒な試験がようやく終わったばかりなのだ。気詰まりするミーティングにわざわざ出席してなおさら気分を悪くするなんて、真っ平な話だった。
「もう、そうやってまじめにやってくれないから問題になっちゃうんだよ」
「まじめにやったってやらなくたって同じだろ」
どっちみち、テニス部の連中から見れば和泉希沙良というのは腹の立つ存在であることに変わりがない。
努力せず、いつでも、ある程度以上には順当な戦績をおさめてしまうあたりが。
そして、ある程度以上の地位にまったく執着がないあたりにも。
「だって！　ミーティング休んだだけで次の代表選手から外れちゃったらばかばかしいよ」
「るせえな、ほんとに熱があんだよ、疑ってんなら触ってみろよ自分で」
「あっ、和泉のカラダ触っていいんだったらあたし触るぜひ触る!!」
真後ろから、呼んでもいないのに賑やかな声が割りこんでマネージャーとの会話を横取りした。希沙良は再び気力の足りない溜め息をついた。
「人のマジな話に口出してくんじゃねえよ、てめーはよ」
「うす。んじゃ早くマジな話終わらしてくれよ、そんで一緒に帰ろうよ」

右手の掌をパーのかたちにひらいて希沙良の目の前にさしだしながら——背の低い彼女なりの挨拶のポーズらしい——安曇陽子はけろりとした言い方をする。ボーイッシュなショートカットの、容姿だけを見ればかなり幼い雰囲気の少女だが、一応、同学年の生徒である。

新藤広美は、陽子があらわれたとたんにひどく不満げなようすで眉をひそめている。女同士の本能的な対抗心というものだろう。

「だからさ」

声の調子を先刻よりは少し落として、希沙良はやや新藤広美への態度をあらためた。

「そのへんうまくあいつらに話しといてくれんのがおまえの役目だろ。今度、適当にうめあわせるからさ」

「……しょうがないな。わかった」

「ごめんな」

しぶしぶながらもひきさがるマネージャーにちらりと片手をあげてみせて、肩に鞄をかけると希沙良はさっさと教室のなかから脱出した。

一瞬置き去りにされた陽子が、ばたばたと上履きを鳴らして追いかけてくる。

「ねえ、一緒に『甘味処むらさき』のおにぎりセット食べていこーよ、ねえ和泉ったらいこーよー」

「帰るっつってんだよ俺は！」



「あう……。和泉さあ、今もしかして広美とつきあってんの？」
「あいつとは一年前にそーゆーのはやめた」
「じゃあ、そしたらあたしのことカノジョにしてくれよー、ねえ、してくれってばよ」
「おまえとも永久にそーゆーのはねえよ」
「うえぇーっ、なんでだよなんでだよーバカ和泉、おおばかものーっ」
地団駄を踏む陽子のことはかまわずにおいて、昇降口にむかう階段を希沙良は下りはじめた。陽子には気の毒だが、今のところ『彼女』の座は校外のほうで先約済みというやつである。対抗試合のときに知りあった都内の共学高の二年生で、ともかく何がありがたいかといえば文系の科目が得意なのでこちらの課題を頼みやすい。もちろん、ちゃんとつきあうと約束した以上は、それだけですむものでもないが。
「だったら五十歩ゆずってコンビニのアイスでいいよー、あたし奢るからさー」
「サーティーワンで奢りだったら寄ってもいいぜ」
「よおし！」
その場でぴょんと跳ねると、実に現金な元気さで陽子は階段をかけおりていく。ガキじゃねえんだからと呟きながら希沙良はその後に続いた。食べることに執念をおいているあたりでは、けっこう気の合う相手だと思っている。
「てめえ男ならよかったのにな」

「冗談じゃねーよー、男だったら和泉のオンナになれないじゃんかよ馬鹿ーっ」
「だーから……」
一階まで十数段を残すところで、不意に足元がわからなくなって希沙良は立ち止まった。
なにか、奇妙な感触がまわりをつつみこんでいた。空間の隙間に墜ちたような。
（エン・エン・エン・エン・エン）
（メイロ・コウセン・マイレ・マイレ）
（ミョウホウ・ゴクシノ・マイギヌノ）
（オドリ・オドラセ）
何の声だ？
「うあ――っ!!　和泉いいいっ」
安曇陽子の甲高い声が鼓膜をふるわせた。はっと息を呑み、希沙良はとっさにすぐ間近にあった手摺を摑んだ。
肩から外れた鞄だけが、階段の下にごろごろところがって落ちた。
（何だ!?）
気味が悪い。
「和泉ばかーっ!!　なにぼーっとしてんだようっ!!」
「……してねーよ」

吐き気が胸に溜まって、それだけ答えるのが精一杯だった。
これは……これはおかしい。
ただの風邪ではすまないように思える。何か、理屈にあわない、別のものが。
（……あいつ）
異変があれば真っ先に十九郎に伝えねばならない。だが、そういえば今日は、彼はどこか遠くまで出向かねばならないと言っていたはずだった……。

3

その日、七瀬傍流の家のひとつ、不破家の三男にあたる不破武人が久しぶりに自らの生家を訪れたのは、肉親同士の交流をふかめるためでも里心がついたからでもない。
埼玉県、所沢
砂利をしきつめた車寄せの一角にホンダ・インテグラを停めて、顔見知りの使用人に奥の駐車場へと車をまわすためのキーを投げてから、武人はやや複雑な顔つきで立ちどまった。
「遅いな」
青葉の繁る大木の下で、明石川耕宇が待ちかねていた。
樹齢百年をこえる楡や欅があたりまえのように立ちならぶ敷地は、涼をとる場所にはことか

かない。

　にしても、何もこの夏日のそれも真昼に、わざわざ屋敷の外で我慢大会をせずにいてもいいはずだ。武人は呆れた気分で呟く。

「どうしたものかな、これは……。怠け者の明石川先生が汗だくになってまで不肖の弟子を出迎えてくださるとはな」

「くだらぬ厭味はよせ」

　不愉快なようすで明石川は鼻を鳴らした。

「うっかりと早く来すぎたのだ。かといって俺ひとりであの能なしどものお守りをするなど真っ平御免な話だからな」

「気の毒至極なことだ」

　つくづくと武人は深く頷く。

「……めずらしく同情的ではないのか？」

「私はいつでも同情的だ。貴君にではなく、主賓の里見にだがな」

「そのようなことと思ったぞ、どうせな！」

「僻まずともよかろう。放りおいても貴君には慈悲の女神殿が力添えをくださるだろう」

「呉葉がか？　世辞にも、そのようなしおらしさはない女だぞ、あれは」

「おやおや、私は呉葉嬢のことなどと一言も口にしたおぼえはないのだが……」

「……！　きさまはっ！」

かっと頭に血をのぼらせて明石川が怒鳴った。絵に描いたようにわかりやすい反応だな、と武人は大仰に肩をすくめた。

道者四人衆筆頭こと咸月陣の実妹、呉葉と、明石川家長男にあたる耕宇とは、両家の意志により今からすでに縁組みがさだめられている。武人はそれをからかったのだが、この同僚が彼女に存外本気でいることも知っているので、節度をこえた言辞は控えた。

「正直なところ、憂鬱な役回りだ」

顎で明石川を先へと促しながら、あらためてそう小声でささやく。明石川も、苦笑いするように声を落とした。

「貴君は余計にか」

「さあな。私が不破の家風になじまぬのは誰も承知だろうからな」

「気楽な三男坊にも悩みは絶えぬと見える」

「三番目だけに、たいした実権がないというのも困りものさ」

「それをいうなら我等みな同じだ」

「そうかな」

飛び石づたいに中門をくぐり、開け放しの引き戸から古い屋敷の内へと入る。沓脱ぎの手前では、不破家にながく仕える執事が低頭して彼らを迎えた。

「もう揃われたのか？　あの方々は」
「はい、おおむね、御参集なされたようでございます」
「われらから挨拶に赴くほどのことはあるまい。しばし、隣室を借りうける」
案内はいいと片手を振りながら武人は屋敷の奥にあがりこんだ。ごゆっくりなされませ、と丁重な礼をもって老執事が答えた。
本日、この屋敷にて催される集まりに、彼ら〈地の者〉、すなわち道者四人衆の占める立場は決して大きなものではない。
ただ形式上、斎伽の血につらなる者が集う親族会議、もしくはそれに準じる会合がもたれるとき、道者は原則としてその場に立ちあう定まりとなっている。議場の管理を担う、のである。
本来それは伽羅王――七瀬忍の意図をつねに正しく一族へゆきわたらせるための措置であるはずだった。道者四人衆が、誤りなく伽羅王の近衛をつとめるものであるならば。
（だがこれでは、我々の立場ももはや道化に等しいというものだ）
内心、武人はそう実感せずにいられない。
伽羅王の意志など、自分たちの、いったいどこに存在するというのだ。
「どうやら最後は遠野だな」
明石川が言う。

用意された部屋の襖を武人がひらくのと、庭園をのぞむ渡り廊下の方角から咸月陣が姿を見せたのがほぼ同時だった。

いつも優男風のポーズをくずさない咸月も、今日はやはりどこかささくれた空気を漂わせている。こんな席につきあわされること自体が不本意であるのは間違いない。

「二人共に定刻通りか。……利口だな」

唇のはしを歪める笑い方をして、咸月は彼らのための部屋へと踏み入る。四人衆の筆頭としては、いやでも出席者の前へ挨拶に出向かざるをえなかったのだろう。

「不破は、御尊父がたと顔はあわせずにおいて良いのか」

「それが互いの為であれば」

短く、武人はそれだけ答えておく。

「異は唱えぬが」

咸月は笑みから皮肉な色を消しさった。彼なりに納得はしているようだった。

七瀬の分家筋、特に、不破家と榊家の両当主が、今回の招集を企図した側にあたっている。本家方の長老たちが乗りださなかっただけ、まだよかったとも言えるが……。

問題は、彼ら腑甲斐ない大人たちの企てが、愚昧に徹していることばかりではない。

一族の有力者どもが申し開きを求めている相手——あからさまには、つるしあげようとしている相手、というほうが早い——が、道者四人衆としても決して弁護にまわるわけにいかぬ、

武人たちにとって複雑な関連をもつ人物であるからだ。
遠野一真が顔を出しづらいのもやむをえないというものだった。なんら個人的なかかわりのない武人ですら、その相手については決して穏やかな心境でありつづけられはしないのだ。
里見十九郎、という、現在の伽羅王に最も近しいとされる者には……。

参会者は十二名。
議場の預かり人として型どおりの声明をのべた咸月陣が退出すると、つづけて不破家当主、慧士と、榊家当主、隆之介が、このたびの催会について空疎な長広舌を披露した。
いわく、ほまれたかき斎伽の血を受け継ぐ一族総勢、万死をつくして長、伽羅王に従うが筋なれど、昨今その定めを乱す暗流の生ずるに憂患を禁じえないと。
（長を長ともしない、悪しき風潮がまかりとおっているのは確かな話だ）
座の末席に膝を揃え、ごく冷ややかに十九郎はそう思考する。
よりによってその悪習をひろめた当人たちから暗流だの憂患だのと立派な口上がとびだすあたり、用意されたシナリオはろくな喜劇でもなさそうだった。
とりあえず集まった顔ぶれを確認するのがここへ招かれた十九郎の第一の目的だったのだが、十二人という規模と、そして参会者ひとりひとりの格からいって、彼らが斎伽忍の足元を

揺るがすまでの勢力になりえぬことはすでに明らかである。

（不破、榊と……他は赤松、能美の兄弟に、神志那からの使いか）

初めから読めたような面子だ。

彼らも、はっきりと、斎伽忍に不信感を抱いていると表明する勇気はもちあわせていない。それができぬかわりにそらぞらしい伽羅王賛美の言葉をくりかえし、誰のものとも知れぬ忠節の乱れを嘆いてみせるのだ。

「もともと武蔵野の管理はウチの役割なわけですよ。あすこの敷地内の経費の四割はウチが独自に負担しておるわけです」

煙草の灰をまきちらかしながら、榊家の女婿にあたる大庭毅が拗ねたような物言いをする。

「その本家の管理をしておるわたしらが、あのお方のですよ、居所も行き場もつかんでおらん、まして滅多な機会もなければお目通りさえかなわぬというのはどういうことですかな」

「武蔵野の電気代くらいでけちけちしなさんな、大庭さんも。あさましく見えますよ」

いやらしい笑い方で、分家のなかでも下流扱いされている能美の次男坊が水をさす。

「からかわんでください、失敬な。あさましいとはなにごとですか」

「何、あたしらとて犠牲は大きい。先日のCBSの一件ですがな、うちの他に誰があれの大口株を持っておりましたか。うちんとこの出血あってのみなさんの安泰じゃないですか」

「民放局ひとつで威張れたものですか。ふん、羨ましいお話だ」

「おふたかたとも、おやめなさい。肝要なのは、われわれがいかに心砕こうとそれがなかなかあのお方へ通じないということですよ」

「不破さんはまだよろしいんですよ、ご子息の力であのお方につながってらっしゃるでしょ。現に貴社では、ＡＡ製薬の買収劇があそこまで成功なされている。影の有難いお力添えあってのことではないかと専らの評判ですよ」

「それがとんでもない。ええ、そんなのはみなさんの、たいへんな誤解ですよ」

脂ぎった話題がしばし続いたところで、不破慧士が場を抑えるように両手をひろげた。

シナリオ発動の合図である。

「だから何がわれわれからあのお方を遠ざけているかといえば、ですよ。初めから、あのお方が御家を出られたときから懸念されていたことではありませんか。つまらぬ妖者退治に、必要以上に深入りされすぎぬようにと」

「術者という特権待遇に趺坐をかいて、ずいぶんとあのお方を煩わせているのではないのかねえ。どうかね、片桐の……いや里見の長男坊だったかね」

本題が巡ってきた。十九郎はあえて当初は、従順ともとれるような無言をもってそれにこたえた。

彼らは、唯一手の届く場所にいる本家方の術者として、里見十九郎を跪かせることを望んでいる。彼らの意のままに操られ、斎伽忍に対する優秀な監視者たることを、なんら疑問を抱き

もせずに、歴然と、求めているのだった。

4

よく晴れた、七月の蒼穹がブラインドの片隅に覗いている。

斎伽忍は絹のスーツの上に漆黒のロングコートを纏ったところだった。……外の気温は、とうに三十度を超えている。季節の力に敢えて抗うように、彼はさらにサイドテーブルから手袋をとりあげる。

「来たな」

気配がある。

彼の忠実なる〈使〉は、現在、室内には控えていない。予定どおりの来訪者の足音を遥か下方に感じとり、格別な興味もあらわさず、斎伽忍は無感情に呟いた。

神谷町の駅から徒歩で数分——六本木のはずれにある大型マンションの、七階。

修築のため九階の部屋を離れて、この七〇七号室へと拠点を移したのが、誤った選択であったとは彼は思わない。

だが……随分と、安逸な時をここで費やしてきたのは確かなことだった。

もとよりこれは空白を生むための舞台だったのだ。斎伽忍は、ブラインドに閉ざされた南向

きの窓を眺めやる。隙間は重要だ。つめたくはりつめた時の流れにも。そして平穏と名づけられたものは、あくまでも隙間に過ぎない。

ただそれだけのことだ。

「話なら手短にすませてくれないか」

盛夏も始まったばかりだというのに、木枯らしのなかへでも出かけるような仰々しいコート姿で斎伽忍は部屋の中央に立っていた。扉をひらいた水沢諒はそのありさまに一瞬ひどく眉をひそめたが、冷ややかに投げられた忍の声に、また別の意味で険しい表情を浮かべることになった。

「お喋りにとれる時間はあまりないんだ。これから人と会う予定になっているんでね」

「……事前の約束なしで来られてあんたが迷惑なのはわかりますがね、こっちの用件も聞かずに切り口上ってのもちと心が狭くありませんか」

「余計な勘繰りをしないでほしいな。僕には本当に予定があるんだよ」

総身を覆うコートと同様に真っ黒な――実際、へたをすると弔装と見誤りそうな黒づくめだ――革手袋に、忍は左手の指をすべりこませる。

本当に、と念をおすあたりがむしろ厭味だ。いや、彼がいくら厭味だろうと極悪に非道だろ

うとそんな当然のことに今更驚く気も諒にはおこらない。

端的な話、今日の斎伽忍には体温というものが足りない。その居心地の違いに諒のほうは気づいている。

「わたくしの用件は先程あんたの留守電に入れたとおりで……忍さんに何か心当たりがあるかしらというつもりで参上したんですが」

「亮介がいわれなき怪我をしなければならないような必然に、僕の心当たりがどうしてあると思う？」

硝子（ガラス）のように無気質な光を乗せた瞳が、さらりと諒を流し見る。

上着の胸ポケットに入れてきた紙片をぬきだしながら、なるほどねと諒は内心に呟（つぶや）く。

知らずにいたふりをする気はないわけだ……。つい先刻、亮介の身にふりかかった一件について。

「怨恨（えんこん）が生じとるからですよ。それこそいわれなきうらみってやつが、そこに」

サイドテーブルの上に諒の指が押しひらいてみせたその紙片に、斎伽忍が関心を向ける気配はなかった。

渋谷にある気取った喫茶店でつかわれている、ありふれた一枚の注文伝票だ。

用紙の中央に書きなぐられたふたつの文字さえなければ。

（――制裁）

亮介たちのテーブルに水の入ったグラスを運んでみせたウェイターは、店で雇っているアルバイトのなかには存在しなかった。正当な店員ではなかったということだ。なにくわぬ顔で店の制服を着こみ、亮介のグラスを取り替えた後は、もうすでに店から姿を消していた。一度も見かけたことのない人物だったとウェイトレスたちは口をそろえた。

見知らぬウェイターがグラスを用意しているのに気づいた店員はいたのだが、アルバイトの回転が早い店であることも手伝って、不審にまでは思われなかったらしい。

そして唯一、犯人の痕跡として残っていたのが……この剣呑な宣告のしるされた、伝票用紙なのだ。

「わざわざ俺でも冴子でもなくて亮介のグラスにだけ仕掛けをしておくあたりが、けっこうこちらの痛いところをついてくださってましてね」

「おまえはそれでも、案外と、生き甲斐の戻ってきたような顔をしているじゃないか」

微笑のかけらを唇に浮かべたと思うと、右の手に填めた手袋の感触をなじませながら、忍はすでに部屋の出口へと歩を踏みだしている。

「っ、誰が……！」

放ちかけた怒声を途中で呑みこみ、諒は足早に彼の後ろ姿を追いかけた。

「……あんたと一緒にせんでいただきたい」

「言うね」

忍はさらに笑ったようだった。扉をひらく背中に表情は読みとれなかったが。立ち止まる気配もなく、エレベーターにつづく通路を彼は一定の歩調で進んでゆく。

部屋を出てもこの建物の内側は、しんとした涼しさに満たされている。外界の高熱から切り離された、奇妙な静けさがひろがっているのだ……。

「怨恨云々と騒ぐのはおまえの勝手だ。好きなだけ走りまわればいい。ただ、今度の話が僕に帰するものだと頭から決めてかかられるのは不本意だな」

「頭から違うと言いきるのもまた勇気のいることじゃないのか。あんたの場合」

「テロリストの狙いが常に僕の方角を向いていると思うのは、短絡というものさ」

「だからって亮介に何の理由がある?」

「理由などいくらでもあるだろう」

あっさりと、忍はつきはなした答え方をする。

憤りに吸いこんだ息を、一拍おいて、諒はゆっくりと吐きだした。

(間違えた)

忍のせいだと言いにきたはずではなかったのだ。

元から殺気立っているところに、さらに神経を逆撫でするような態度をとられたので、本来の目的から話がはずれた。そういう意味では、今のやりとりは忍のほうに筋がとおっている。

とはいえ忍がこうも喧嘩腰でなければ、こちらももう少しは穏健にいられたのだ。仏頂面で

諒はぼそりと口をひらく。
「だからつまり……すみませんでしたよ」
「本題は？」
壁のプレートに手袋の指先をさしのべ、エレベーターを呼ぶボタンに触れながら忍が改めてそう尋ねた。
「本題は……亮介君にちょっと許しがたいちょっかいを出されたので、原因を解明したうえで犯人をお仕置きしたいと考えとるんですが、それについての忍さんの御意向を伺いたいと」
「任せる」
「……それはどうも」
一言で用件を終わらされてしまった。複雑な心境で諒は頷いた。
別段、斎伽忍が積極的に乗りだすほど大きな問題ではないということなのか。妖者方三忌将との休戦状態がつづいている以上、背後に巨大な敵が控えていたりはしないという判断か。
理屈ならそれで整うが……。
「あんたはもう少しくらい亮介を大事にしとると思ってましたが」
「自分の心情を僕に転嫁するのも考えものだな」
「……何も、俺のよーにみっともなく血相を変えろとまでは言ってないだろう。俺も」
苦々しく諒は呟く。

もっと基本的なレベルでの話だ。

「残念ながら、その程度のことに僕は拘っていられない」

硬い音をたてて、エレベーターのドアがひらく。

まっすぐに鋼鉄の箱のなかへ足を運んでから、ふと——斎伽忍は、黒衣の裾をゆるがし、背後に立つ諒のことを見返った。

「同席していながら事故を防げなかったのなら、おまえの責任だ。そう言ってやれば満足なのか？」

「……」

諒は口元をこわばらせる。忍はそれすらもわかりきっていたように醒めた視線を逸すと、閉ざされる扉のむこうで唇を動かした。

「冴子がおまえをあの店に呼びだした甲斐も、なくなってしまったな」

がしゃり、と分厚いドアが互いの間を隔て、諒の目前から彼の姿を消し去った。

「!! おいこら!!」

怒鳴り声とともに諒は閉じたドアを拳で叩いていた。応じる気配のあるわけもなく、階数表示の光はただ下へ移っていく。

（お膳立てか）

もう一度、握った右手を同じ場所に打ちあてる。

（あの店でそれが起きるとわかっていて）
もちろん斎伽忍は現実にそう仕向けたと明言してはいない。いないのだが。
少なくとも……あそこに冴子と自分がいなかったらと考えるよりは。
（……まだマシだ）
痛む拳を眉間に押しつけて、諒はその事実を思い知る。
容赦なく。

＊　＊　＊

気がついたときには、見覚えのある、自分の部屋のベッドのなかだった。
「あれ？」
枕から頭は上げないままで、亮介は視線をめぐらせた。すぐそこにいる亜衣と目がぶつかる。
「崎谷君？　どうかした？」
「……ごめん、俺ちょっとぼんやりしてた」
貧血気味になっているはずだから大人しく休んだほうがいいと冴子に厳命されて、強引に中野の家までタクシーで連れてこられたことまでは憶えている。

「今、ついさっき冴子さんが帰ったところ」
「そうだっけ……なんか全然わかってないな……」
「だから！　やっぱり冴子さんの言ったとおりだったでしょ！　平気なつもりでも身体のほうに意外なショックがあるんだって。特に崎谷君はそんなに大雑把な神経してる人じゃないんだから！」
ぴしりと言いきられてしまった。
例の渋谷の店で、自分はもう大丈夫だから約束どおり亜衣の買い物につきあうと亮介が言いだしたのを、かなり深く根にもっているらしい。
「あのね、別に俺は……」
「一般的にも女よりは男の人のほうが流血に弱いっていうし。だいたい崎谷君にムリしてつきあってもらってあたしが嬉しいわけないじゃない!?」
「……あの……それはそうだけど……」
「崎谷君のお母様いらっしゃらなかったから、勝手に台所とか使わせてもらったけど。とりあえず食べやすそうなものと思って、ここにオレンジ切ってあるの。気が向いたら食べて。ささやかだけど栄養補給。本当は蛋白質とか摂ったほうがいいんだろうけど」
「トマトジュースでも飲もうかな」
気弱そうに亮介が呟いたのを聞いて、いやだな崎谷君、と亜衣が苦笑した。

「吸血鬼の真似して？」
「でもなんか効きそうだよね」
「ほんとに、変なところで肝が据わってるんだから……」
溜め息をつきつつ、亜衣は枕元の床から立ち上がる。傍らに置いてあったバッグをとりあげて。亮介はふと目を瞠った。
「あっ……帰っちゃう、んだ？」
「え？　だって、あたしいたら崎谷君寝られなくて邪魔かと思うし」
「俺、思わないけど……いやあの、なんか予定あるんだったら別に、だけど」
ぎくしゃくと言葉をとぎれさせてから、亮介は気のきいた科白を捜すのはあきらめて、ごくシンプルに頼むことにした。
「もう少し、一緒にいてよ」
「……。あたしは！　何時間でも一緒にいたいけど！　それを、せっかく帰ろうって決心したのに！」
「ご、ごめんなさい」
「謝らなくていいんだけど！」
妙に勢いこんだ答えを返して、亜衣は元の座布団の上にすとんと座りこむ。何を怒られているのか今ひとつ釈然としないまま、亮介はこっそりと小声でつけたした。

「つまり……亜衣ちゃんに、また心配かけちゃったし……」
「心配っていうより、びっくりしたかな」
そろえた膝の上で両手の指を組みあわせて。
横顔を亮介に向けながら、抑えた語調で亜衣はもう一度くりかえす。
「びっくりした。……けど、仕方ないと思ってる。崎谷君と一緒にいるってことは、どんなにびっくりさせられても……それは崎谷君のせいじゃないし。だから、しょうがないのよ」
「……」
亮介は何か答えようとして口をひらいたが、まずベッドの上に身体を起こして、亜衣のほうにむかって座りなおした。もっときちんと近づいてからでないと、うまく伝えられない気がして。
「ごめんね」
こんな風に、急に普通でないことに巻きこまれるのが、亜衣が言うように……自分ひとりのせいではないとしても。
(だけど俺はやめる気がないから)
……彼らと関わること。
それらの世界から離れようとしないのは自分自身だ。偽る余地もない、自分の意志だ。
特殊な力を得てしまったという事実にただ振りまわされて、安全に、何も知らされずにいた

ときとはもう違うのだ。

（終わらせなくてはならないから）

いつか。戦いの裏にひそめられた暗闇も、かなしみも、すべて終わらせなくてはならないから。

始まらなければいい、と——まだ何も起こらないようにと自分が切実に願っていたことを、亮介は苦いような気分で思いだす。そうだ、始まらなければ終わらせることなどできやしないのに。

臆病に、平穏な時を望みつづけている自分も確かに本当の自分なのだけれど。

これが始まりなのかどうかは亮介にはまだわからない。だが、きっとこうやって少しずつ、あらゆるものが動きだしていくのだろう……。

「ひどいな崎谷君。そんな顔されたら許せないなんて言えないし」

ぼそりと亜衣が呟いた。

「どうせいつもあたしが勝てないんだし」

「……そうでもないと思うけど」

「絶対！　そうなんだから！　もうそれくらいあたしが先に覚悟決めてるからいいけど！」

「うん……ありがとう」

結局、最後にはそれしか亮介には言えなくなる。

（この人がいなかったら俺はどうなるんだろう）

こうやって。近くに。

いられなくなることなんて人間にはひどく簡単だから。

「どうしたの？」

俯いた亮介を、不安げに亜衣がのぞきこんだ。ちらりと瞳をあげて亮介は口元で微笑した。

「亜衣ちゃんがそこにいてよかったなあと思ってた」

「……最低」

「だって……」

説明する言葉を途中でやめるつもりはなかった。

左手が自然に動いて、彼女の頬から長い髪をおしのけている間にも。

（あれ？）

このままでいると……。

実際に、唇がふれあってしまってからも、ふたりとも驚いたように相手のことを見つめているだけだった。

「あっ……」

何秒後にそう我にかえったのかもわからない。

「ああっ!!　ごめん!!　ごめんね俺、勝手に!!」



「え？　やだ、別に謝られなくても」
「……ああ、すごくびっくりした」
亮介は胸を掌でおさえて大きく息をついている。
「びっくりしたって、あのね崎谷君……」
「だってびっくりするよ、一瞬自分が消えた感じがして。すごいよそういうのって」
なにもそこで客観的に感嘆しなくてもいいのではないかと亜衣は思うのだが。すごいなあ、と亮介は再びまじめに呟く。
（そんな力があるんだ）
自分の意識がなくなるほどに、人に惹かれる瞬間というものが。
だからこそ、時として、そこに悲しいことも生まれるのかもしれないけれど……。

＊　＊　＊

「そのようすだと収穫なしね」
一階のエレベーターホールで、両腕をくみあわせた冴子が待っていた。諒はそれにちらりと視線を送ったが、そのまま何も答えずに彼女の前を横切ってマンションの出口へと向かった。
「……!!　ちょっと待ちなさいよ大馬鹿者!!」

かっとなって冴子がその背中を追いかける。
「どうしてあんたってそういう人を人とも思わぬろくでなしな行動に平気で走るのよ、ほんとにほんとおおに信じられないっ!!」
「忍には会わなかったのか」
「え？　あたしが？」
「俺の前にここに降りて……」
言いかけて、諒は半ばで口をつぐんだ。
斎伽忍の乗ったエレベーターは一階までまっすぐに降下したはずだった。冴子がホールにいたなら、すれちがわないはずはないのだが。
――あの人物が時空をどんな風に使おうと、今更、いちいち驚くにはあたらない。
「亮介ちゃんはしっかりあたしが責任もって中野のお家に送ってきたわよ。それで少しは満足？」
正面に立ちふさがるかたちで、はっしと諒を睨みつけながら冴子が言葉をつづけた。
「幸いそんなにひどいことにはならなかったんだから、あんたも自分だけ地獄を見たみたいな顔してるのはやめなさいよ、情けない」
「……冴子」
無表情に視線を下方におろしながら、彼らしくもない濁った声を諒は返してくる。どんな暴

言が出てくるのかと冴子は身構える。
「何よ」
「如何ともしがたく、つらい」
「……」
力がぬけて冴子は肩を落とした。
「あんたどんどんだめになるわね」
「当然予測されておったなりゆきなのだが、やはりつらいです。……いやそれだけの話」
ちょっと弱音吐いてみました、とつけたして、諒は再び歩きだす。今度は冴子がついてこられる程度に、ゆっくりと。
「収穫がなかったわけではないのだ。一応」
「そうなの？」
「一応ね」
あきらかなのは、斎伽忍がすでに何かを考えている——意図している、ということだった。
（始めるつもりだろう）
どのように、とは、いまだ知らされはしないが。
さしずめ、そのための覚悟を促されたようなものだ。今回は。
（なんだかいろいろとだめになっておるからな。……我々は）

そして斎伽忍の望んだとおりにすべてが運ぶかどうかも、今はまだわかってなどいないのだ。

5

（……何だ？）

奇妙な焦燥感が胸の低いところにうまれたことに、十九郎は気づいていた。

自分のものではない、かすかにつきあげてくる動悸だ。

（不自然な……）

とりまく状況は数分前と何も変わっていない。老獪な亡者どもが積もりつもった愚痴を順々に吐きだしているだけの、とるにたりない時間の消費。

ただ空疎な時間にならば少しくらい身を委ねておくつもりだった。気がすむまでガス抜きをさせておけば、金と権勢への飢鬼たちもまたしばらくは大人しくなるだろう。それがこの仕組まれた『異端裁判』の、正しい効能というべきだった。

だった、のだが。

「ともかく、里見にはね、おのれ自身が、あのお方と御家との懸け橋となる立場にあることを忘れられては困るといっているんだよ」

榊家の道楽息子がしかつめらしい口調で念を押した。

（懸け橋）

厭わしさに満ち満ちた表現に、十九郎はいっそ笑いだそうかとさえ思う。

彼らはさすがに、伽羅王の実妹にして七瀬本家の純血を身に宿す冴子に対してまで、それを口にする度胸をもたない。

また当然ながら、生まれついて一族から排斥された存在である和泉希沙良には、その栄誉ある重責を帰することなど考え及ぼうともしない。

里見十九郎は彼らにとって、かろうじて本家の論理で呼び立てることのできる、都合のよい対象であったにすぎないのだ。

「忍様の……」

整然と、口をひらいてから。

十九郎は言葉を改める。

「失礼。伽羅王の御心に信服をおかれていらっしゃる皆様に、敢えて私より何事かをお伝えするは不敬にあたるかと思われるのですが」

「どういうことかね」

榊は首をかしげる。理解する聡明さをはじめからもちあわせていない者の、無神経な反問だ。

（それでよくあの人を縛ろうなどと）

そう思うこともまた、自分の個人的な感情でしかないのだが。

「ならば言い方を変えます」

十九郎は早々にこの席から離れようと決めた。当初の予定には背くが、仕方がない。胸騒ぎはおさまるどころか徐々に強くなっている。見過ごせないレベルで。

「あの方を信じているとあなたがたはおっしゃるのでしょう。忠臣を名乗るあなたがたがどうして私からの、伽羅王の御心を覗き見るがごとき報告など欲しがられるのかとお訊きしているのです。――それは不敬ではありませんか」

「貴様――」

やや気色ばんだようすで榊が肩を揺らした。

ざらり、と末席に近い襖が一枚、横にひかれたのがそのときだった。

「火急のことにて、座を乱しませばお詫び申しあげる。君に電話だ、十九郎」

決して礼をつくしているとはいえない割りこみぶりで、遠野一真はそう告げただけだった。

「……承知した」

ゆっくりと、十九郎は座の一同に黙礼しつつ立ちあがり、一真につづいて部屋の外へと退出した。

厳しい表情で一真は襖をもとどおりに閉ざすと、渡り廊下のほうへと進んでゆく。ひろく緑

豊かな庭園のかたすみを横切り、涼しげな離れの棟にたどりつくまで、彼はひとことも口をきこうとしなかった。

「忠臣を名乗る、とはあまりに言葉が過ぎる」

人気のない廊門の前で立ちどまり、ぽつりと苦言を呈する。

「すまない。……どうもありがとう」

「誤解される前に言っておくけれど、君にご実家の母上から電話があったのは本当のことだ。なるべく至急に君と連絡をとりたいという話も事実だ。僕にそれ以上、過剰な期待はかけないでくれ」

「いつなんだ？　電話があったのは」

十九郎の質問に、一真は再び顔つきを尖らせた。

「君という人は、本当に……」

「違う、一真の心を測っているわけじゃない。自分自身に気になることがあるだけだ」

抑えた声で、十九郎は彼の思いこみをとりさった。

あの場を離れるために——すなわち外と連絡をとるために、意図して立ち会い役の遠野一真の力を借りたのは事実だ。結局は、何を言っても皮肉な響きがつきまとうことになってしまう。

「……十五分前、だ」

小型の携帯電話をとりだしながら一真が答える。
「ありがとう」
複数の意味で礼を言い、十九郎はそれを受け取った。
「じゃあ、僕は母屋のほうに戻っている。お歴々をあまり待たせないでくれ」
「ここにいてくれても、俺のほうはかまわないんだよ」
「僕が不愉快だ」
遠慮のない言葉を返して背を向け、一真は足早に元来た経路をひきかえした。十九郎が何を気にして席を外したのか一真には充分に予測がついている。連絡をとってきたのが里見夏江であるということだけでも、いったい誰に問題が生じたのか、もう半ば以上明白ではないか。たとえそれがすべて自分のたわいない邪推だとしても！
（不愉快だ）
十九郎の傍らで、そんな内容の電話を立ち聞いている役回りなど、到底ひきうけられたものではないのだ。
母屋へつづく渡り廊下をゆきすぎる途中で、だが、一真はふとその足を止めていた。
なぜここにいるのか、その理由の用意されていない人物の姿を庭園の奥に見かけたような気がしたのである。
「楷？」

夏江から電話があったと聞かされた時点で、十九郎も大凡の事態をつかみとっていた。今日ここへ来ている十九郎の役割を充分に知りつくした夏江が、それをおしてまで連絡をとりたがるとなれば。

『本当に御苦労様だわね、余計な手間を増やしてごめんなさい』

存外に早く十九郎と連絡がついたことに関しては、夏江は特に問いただすに、ただ的確な労いの言葉を口にしただけだった。

「希沙良に何か?」

短く、十九郎はそう尋ねる。

おそらく、この胸のおちつかない感じは。

『そうよ。あなたあの子がずっと風邪気味だって言ってたことは知ってるわね?』

「聞いていますよ」

『それにしてはおかしいのよ。——あの子、さっきうちに来るなり、血を吐いたの』

借り物の携帯電話を持つ手が一瞬、震えた。

『熱もかなり高くて。今は三十九度ちょうど』

「医者には?」

『往診を頼んだから、もうすぐ来てもらえるはずよ。けど、実はちょっとあたしの勘にはいやなものがひっかかるのよ。あなたに連絡したのはそのせいなんだけど』

夏江の声にはいつにない緊張が含まれている。十九郎は自ずと体温を失っていく唇を、あえて動かした。

「何です？」

『希沙良に、何かの〈呪〉がかかっているかもしれないわ』

「――――」

呪術？

（誰が）

予期すらしない言葉だった。十九郎は掌中の電話機を握りなおす。

『時々、耳の内側でおかしな声が聞こえるって希沙良が言うのよ。それで思ったの』

「〈妖の者〉ではなくて？」

『今のところは断言できないけど、少なくとも希沙良から妖気らしいものは感じられないし』

よほど巧妙な、気配をのこさぬ妖者のしわざか、でなければ……生身の人間の仕掛けたものということになる。

『あとはあたしの勘でしかないんだけど、そこに人の悪意を感じるのよ。これは口では説明できない話になるから、あなたにも見てもらわないと』

「わかった……俺は、なるべく急いで戻るようにするけれど。本当にそれがなんらかの呪術だとしたら俺の手にも多分、負えない」

『こちらで応援は頼んでおくわ。とりあえず、冴子ちゃんに』

場合によっては、斎伽忍に解決を託すということになるのだろうか。

(託せる、のか?)

十九郎は眉をひそめる。彼が関わることなど、ありうるのか? この程度の問題に。

そうだ。この程度の問題だ……。

「……早く戻ります」

それだけ告げて十九郎は通話を終わらせた。今はまず、何をおいても希沙良の元に帰るしかない。実際に様子を確かめなければ。

「里見殿?」

ふと、背後から控え目な声が届いた。

若い男性——年代の近い、少年の。

そして。

「!?」

ふりかえる余地も十九郎には与えられなかった。どっと世界が鳴動するのを十九郎は感知した。爆発?

（違う）

何かが違う、これは……！

身体の内側から、意識のもっとも根底の部分を激しく剝ぎとられるような、横暴な力が働く。五感すべてを断ち切られて倒れる彼の姿を、ごくあっけないといった風情で、沈黙とともにひとりの少年が眺めおろしていた。

第二章　歴史に背くもの

1

（攫われていく）
重い瞼の下で、かすかに考える。
（どこか遠い場所に）
望むとおりについていくと答えたのは自分。
つきはなされても、忌避されても、たとえ本心から嫌悪されたとしてもそれでも。
（俺は俺のやりたいようにする）
（おまえの欲しいものなら）
（全部。叶えてやるから）
『和泉このごろカオが変わったね』
何のはずみで言われたのだろう？　確かそれは陽子が。苺色のかき氷の山の頂上を崩しながら。うわめづかいに。

『今あんましふらふらしてないよ』
『してたのかよ俺が』
『してたのも知らないのかよ』
女たちはいつも奇妙なところで勘を働かせて、ものごとの奥底をみぬいている。
『でもなんか……結局あわれな奴？　和泉ってどこかさ』
『てめーに言われたくねえよ』
『んじゃ誰に言われたらいいんだよ』
誰に。
（攫われる）
ひとつめの安堵を手に入れたら次は。
惧れが始まるだけ。
執着にはかぎりがないから。
（……何も怖くない）
くりかえして、くりかえして。それが本当になるように。いつでも本当のことであるように。永久に、自分のなかでくりかえしつづけている。

死にそうな気分でころがりこんだ七階の部屋に、夏江がいてくれて救われた。
とりあえず周りに人がいる状態で——駅のホームなんかでは——みっともなく倒れたり吐いたりせずに済んだので、ここに来るまでの自分には合格点をやれるとして。
「あたしのほうで十九郎には連絡をとっておくから、あなたは少しおちついてなさい」
額に乗せられた冷たいタオルと一緒に、夏江の声が聞こえる。
本当はそれでは駄目なのだ。
自分に危急のことがあったからではなく、異常な事態だから十九郎を呼ぶのでなければ……。
「……あいつ、おどかさないようにしてよ」
荒れた喉の奥から、やっと出せた言葉はその程度のもので。わかってるわ、と頬に触れた夏江の手には深い慈悲を感じる。それはどこか憐れみに似ている。
「けど、どうせどう控えめに伝えたってあの子には同じよ」
「んなことねえよ……本当に、頼むよ」
「そんなことあるのよ。ばかね」
慰められて。
彼女が部屋を出ていく気配を耳で追うことしかできない。
(夏江さんは)

不意に、それまで一度も思い至らなかった疑問に希沙良はつきあたる。
どんな気持ちだったのだろう？
正式な、万人に祝福されるかたちでの結婚を、のぞめなかったこと。
愛した男に、別の相手がいたこと。
それでも互いに愛しあったのは事実なのだと……そして大切な息子を授かったからいいのだと彼女は言うけれど……。
何も苦痛にならず、平然と、幸福であったなんて嘘だ。そんなものは嘘だ。もっと、人知れず大きな犠牲に身を削ぎながらの——そういうものが必ずあったはずだ。
（毅い力が）
女たちは、いつでも。つよいから。男より……この自分よりもずっと。
（全部）
（叶えてやる）
（今は俺のほうが知っている。おまえが本当にやりたいことなら）
（妨げにならない。縛る足枷にはならない。おまえのためになら何でも）
何にでも——どんな苦しみにも耐えられる。
胸のなかでくりかえしつづけている。その小さな光が、自分の心に生まれたときから。
そうしないと……。

「肉体の不健康なときには、思索の出口も狭まるものだ。たいへんな考えのように見えても実際には些細なことで間違えていたりするのさ」

「――――」

愕然と、希沙良は瞼の上から濡れたタオルをおしのけていた。

すぐ間近、無人だったはずの空間。

部屋の扉はさっき夏江が閉めていったままの状態だ。ドアのノブが微動たりともした気配はなかった。そうではないところから――どう考えても真っ当ではない手段で、この室内に出現したとしか見えなかった。

今の、声の主は。

(斎伽忍)

反射的に希沙良は唇を噛みしめている。

全身を暗黒の色に包まれたその青年は、まるで不吉な使者のように、希沙良の横たわる寝台の傍らに到来していた。

こんな風に前触れのない、無遠慮な訪問をうける筋合いは、希沙良のほうにはない。

もっともここはあくまで里見十九郎の私室であり、このベッド自体が決して自分のものではない。そう認識することがさらに希沙良のいらだちを増してゆく。

「……何の用だよ?」

「名付け親に歓迎の一言もなしとは、味気のない子だな」
呟く彼自身が充分すぎるほどそっけない面持ちをくずさずにいることは棚に上げて、斎伽忍は希沙良の神経を逆撫でするような科白を口にしてみせる。
怒鳴りつけるには体力が足りない。おさまりかけていた吐き気がぶりかえすのを希沙良は感じる。先刻までとは違う意味合いの不快感だ。
「俺が……てめえに何か、迷惑でもかけたかよ」
「それを僕に訊くのかい」
斎伽忍が、わずかに笑みを浮かべたのがわかった。
（!!）
かっと熱い怒りが額の奥に上昇する。一瞬視界がゆらいだのも、決して身体を占めた異状のせいではないはずだ。
個人的なレベルでならば、斎伽忍には借りもあれば貸しもあるのだと希沙良は思っている。だが互いの間に厳然と置かれる因縁の、どこまでを彼は嗤ったのか。
「悔しいと思うのか？」
漆黒の手袋から右の掌をひきぬきながら、平然と忍はそう問いを投げかけた。
「違っ……！」
「不思議なことに、僕は誰かとひとつのものを奪いあう羽目になりやすい。めぐりあわせのよ

うなものかな」

反論の声も思うにまかせない希沙良の様子を顧みもせずに、さらに冷徹な、謎めいた言葉を忍が続けた。

「おまえにはすでに一度、沙良耶という貴重な同朋を僕から奪われている。……これ以上は簡単にゆるすわけにいかないよ」

「……」

いったいどういうつもりで。

希沙良はただ両眼を見開くことしかできなかった。

あまりにも、はっきりとエゴイスティックに、直截に、告げられたものの中身は。

自らが、密かに考えていたとおりの。

(違う)

(あいつは選ばない)

(絶対に選ばない)

はっ、と希沙良は息を呑む。

氷のような、とげとげしく冷たい感触が眉間にあてられる。

斎伽忍の指先がそこに触れたのだ。黒革の手袋を外された、右手の二本の指。

「やめ……ろよ、この畜生っ……!」

「自分がどれほど無防備に〈呪〉の波動を受けているか、知っているのか？」
ふりはらおうとした希沙良の腕を、手袋に収めたままの左手でたやすく留めると、忍は急に話題を転じる。希沙良の動きが止まった。
「……呪？」
「おまえ自身の〈護り〉を少しばかり強化する。〈呪返し〉も不可能ではないが僕がそれをすると仕掛けた相手を完全に滅ぼしてしまうからね……やめておく。誰が元凶となっているのかは自分で捜すといい」
何を意図しているのか、まったく悟らせない、超然とした物言いで……。
すっと静かに彼は希沙良から右手を退ける。
「！」
同時に、それまでの重苦しい波が明らかに全身からひいていくのを希沙良は自覚する。
すべてが回復したとまではいえない。ちょうど、緩和、された感じだった。かなりましなところまで。
「すぐに……」
ぽつりと忍が呟く。
瞬間、時の流れが急に弛んだような錯覚が、なぜか希沙良のなかの不安を呼びおこした。
ここはどこで斎伽忍は何を語っていたのか。

どうして自分はこの化生とふたりきりでここに置かれているのか。

「すぐに、そのしらせは届くだろう。おまえに与えられる、次の課題だ」

神の託宣？

寒気が背中を走っていく。

斎伽忍の双眸にうつる、蒼の、光を見るだけで。

端正すぎる——造り物すぎるその貌が、否応もない気味の悪さを希沙良に与えるのだ。

まるで人外境のもの。プラスチックや蠟でかたどられた無機のものにも似て。

非凡な存在をうけいれるための、初めからそれに寄生されるための〈器〉であるからか。彼が。

「ただし僕には、おまえたちに力を貸している余裕がない。こちらにはこちらで、別に、片付けなければならない用件があるものでね」

黒い手袋をもとどおりに填めなおし、斎伽忍は無駄のない口調をとりもどす。

「希沙良、僕の話がわかっているかな。どんな事態もおまえたちの力でもちこたえてみせろと言っているんだ、できるか？」

「最初からっ……!!」

氷枕の上から勢いよく頭を起こして希沙良はかためた拳をベッドのスプリングに叩きつけた。

「てめえの力なんて借りずにいられれば!!　俺にはそれがっ……!!」
「その様子ならば安心だ」
皮肉にしかとれない答えを返すと、来たときとは異なり、斎伽忍はまともに部屋の扉へと足を運びノブに指をかける。
「幸運を祈る、と言っておこうか、希沙良？　せめてもの親愛の情をこめて」
「もう一回死んでこいよてめえは!!」
「それは嫌だな」
扉がひらかれる。忍は真顔で、そう呟いたようだった。
「嫌だ、と僕が思うのでね、死なずに済む途を択ることにしたのさ」

＊　＊　＊

（触れる膚の）
規則的な震動と音は、一定の速度で走る車両のタイヤとエンジンから伝わるもの。
一度も停まらない。
高速道路。
（膚の熱）

指先に。

つながれた、誰かの熱を感じる。

それ以外、今はまだなにもわからない。

暗黒の意識を置き去りにして、表層の神経だけが遠く運ばれていく。滑るようにかけぬけていく。のびる、アスファルトの先へと。

攫われて……。

「うふふ」

狩りとった獲物の左手に自分の指を絡ませて、少女は笑う。

広いリムジンの車内。運転席との境を遮断した、ふたりきりの空間で。

力を失ってなげだされた片方の掌に——その指にだけ、彼女自身の右手の指先を重ね、やがて試すように互いの指を繋ぎあわせて我が身のほうにひきよせてみる。

「わかるのよ。あたしのこと、きらいじゃないっていってるでしょう。この指」

ほんとうは強欲なひと。

満足げに、彼女は微笑する。

「そんなこと知ってるのよ。それだけでうまくいくのよ」

＊＊＊

――天を堕する者の、闇衣裳。

訪れた彼の気配を先に知り、扉がひらくのを待ちうけていた里見夏江は、そこに姿を見せた斎伽忍の装いに一瞬、瞳を瞠らずにいられなかった。

強い、明らかな意図があっての選択であることは、すぐにわかる。

彼は光宿す者。大空を統べる王。

どれほどの暗黒に封じようと、もはやその本質の揺るぐことはない。

「何処かへ？　伽羅王」

「そう……すませなければならない仕事が、この先にまだ、残っているので」

夏江の問いに、返される忍の言葉には柔らかな輝きが寄り添っている。

歩み出るために必要な。

「ただ、貴女に挨拶を欠いて行くわけにもいかないと思えた」

「うれしいわ。私を忘れずにいてくださって。それにあなたが希沙良を、一人の相手として扱ってくださるなんて、これまでには滅多になかったこと」

「まるで僕が彼を軽んじてきたようですよ。貴女にかかると」

苦笑まじりに斎伽忍は夏江の決めつけを否定してみせる。
「いや。それは今まで僕の役目ではなかったのだと、弁明させていただきたいな」
「おかしいわね、あたしは単に、あなたに素直な喜びを伝えているつもりなのよ。どうして素直にうけとめていただけないのかしら？」
夏江は意地悪く彼をからかうが、半分は本当の気分だった。
斎伽忍が自ら希沙良という相手を——嘗ては里見十九郎ひとりに預けつづけてきたものを——独立した存在として認めようとするのなら、その事実だけで充分に夏江には嬉しいのだ。
「賛辞には慣れていないものでね」
七瀬本家の当主としてはもっともそぐわない言い訳を彼は口にする。それもまた、実際にはずいぶんと本心に近い発言であったのかもしれなかった。
「……そして僕がそうするには理由もある。貴女にもいずれわかる。だが貴女には『観る者』でいてもらいたい」
「……」
突然に、場の空気には変化が起こった。
傍観者であること。
はっきりと、斎伽忍はそれを求めて夏江を訪れたらしかった。
従わぬわけにはいかない。伽羅王、斎伽忍の命が下されているのなら。

「承りましたわ。たしかに」
夏江は静かに首肯する。
「どうもありがとう」
微笑とともに斎伽忍は漆黒の右腕をもちあげ、たった今閉ざしたばかりの扉に触れた。その扉に接した彼の掌から手首までが、するり、と音もなく別の次元にのみこまれていく。
「伽羅王。何を選ぶことになさったの？」
ふと、夏江がそう問いかけた。
新たに択るのなら。いかなる途を。
冥い誘惑から——死という結末から遠ざかるために。
「自由を」
信じがたいほどに明確なその一言が、斎伽忍からの回答だった。夏江が思わず声を失ったとき、すでに彼の影は忽然と、扉の奥の異空へと滑りこんでいた。

2

同刻——。
所沢、不破家本邸にて。

控えの間に座する道者筆頭、咸月陣のもとへ、動かしえない異変を伝えたのは遠野一真だった。

「何？」

隣室へ届かぬよう極力、声音を落とした一真の報告に、咸月は厳しく眉をひそめる。

「事実か」

「誤りなく、と存じますが……」

答える一真の顔つきにも、硬質な衝撃が漂っている。

肩を並べる明石川耕宇にめくばせを送り、気配を殺しながら不破武人は席を立った。呼吸を読み、明石川がそれにつづく。

「検分を、われらが」

「預ける」

武人の囁きに短く応じ、そして咸月はいらだたしげに腰をあげる。このような事態の生じることも、彼にとってまったく本意ではないのだった。

了承の意を頷きをもって示しながら、武人は明石川をともなって部屋を退出し、一真の先導によって屋敷の離れへ向かった。咸月は逆の方向へ——広間にあつまった参会者たちの前へと、その足を運んでゆく。もっとも、判明した異常事をそのまま彼ら外部の野次馬どもに披瀝するほど、『親衛隊長』としての咸月陣は愚かではない。空者伽羅王の威を借りることしかで

きずとも、この場は穏便にかたづけておかねばならなかった。道者四人衆があくまで議場の管理者である以上。

望むと望まざるとにかかわらず。

「こちらに……」

渡り廊下をこえた離れの入り口にたどりついたところで、遠野一真が濡れ縁の表面を指す。つややかに磨かれた板の一部に、細く狭く、灼け焦げたような穴が穿たれている。

「これは」

そこに貼りついた異常な気の存在は、ある程度の——少なくとも、道者と呼ばれるものたちの——感覚をもってすれば容易にとらえられるものだった。不愉快に、武人はおしころした声で呟く。

「外法ではないのか」

「うむ」

顔をしかめて明石川が同意した。

「〈三角法〉であろう……信じられぬ」

明石川にしてはものわかりがよい、と好意的なからかいを挟むのが武人の常なのだが、この事実に対してはそれもむなしい。なんともいえぬ腹立ちが武人のなかにはわきおこっていた。

『三角』は、彼らの間での符丁、暗号として用いられている呼称である。正しき意は降伏——

敵に災厄をもたらす凶呪の法。

しかし原則としてあらゆる呪法は斎伽の一党の監視下にあり、実際にそれらに触れることが叶うのも、一族のうち特に位貴き者のみであるはずだった。その効力があまりに甚大であるためである。斎伽の血がつたえる神力、すなわち術力の究極までをも抑えこみかねぬ危険性が、そこにひそんでいるがゆえに。

今、ごく例外的にその降伏法のひとつ〈禁呪の縛〉をゆるされているのは一族郎党多しといえども道者四人衆のみ。そしてここに感じとられるのは、それ以上に悪質な……危険な、分をわきまえぬ法なのだ。武人が外法と呼び捨てたのには、そこまでのわけがある。

「この霊気の灼かれようでは里見といえどもひとたまりもあるまい」

冷静な観察を明石川が口にする。武人はすばやく一真へと視線をうつした。

「見たのか？　遠野は」

「いえ。私が戻りましたときには既に」

唇をひき結んで一真はかぶりを振った。

「私の不備にて……。兄者方にいくらお詫びしようとも」

「遠野の悔やむことにはない。これは紛うことなくわれらへの、なにものか、埒なき輩よりの嘲りではないのか」

「そう熱りたつな、明石川」

確かにこの呪法をつかいこなすものが相手では、たとえ一真がその場を離れずにいたとしても結果は大差なかったであろう。そう考えれば一真に責を負わせるつもりは武人にもおこらない。

ただ……。

「容易な敵ではあるまい」

にがにがしく武人は呟く。

（一族内部の者ではないか）

特異な呪法と、不破家本邸という現場。

大きな可能性はそこに歴然としている。あえてこの場で言葉にするには危ういものがあるのだが。

「ともかく現実に、われらは里見を奪われたのだ……」

状況をきわめてクールにとらえなおし、武人は目前の仕事に意識をかたむけた。

「一門の名に疵をつけず、これをいかに取り捌くかが、まずは火急の命題というわけだな」

＊　＊　＊

それは、怖いほどに晴れわたった大空の一辺に、夕暮れの気配がようやくしのびよりはじめ

た頃のことだった。

太陽が沈むまでには長い時間を要する季節だ。亜衣を帰した後……冴子に命じられたとおり横になって休むだけのつもりだったのに、いつのまにか、けっこう本格的に眠りこんでいたらしい。窓から入りこむ光線の加減が先刻とははっきりと違っている。いったい何時間たったのだろうかと亮介は時計のほうへ向きなおった。

（え？）

視線の先。

「あいかわらず、勘のするどいお方ですね」

わずかにひらいた窓の下には、その言葉を告げた人物自体の姿はなかった。

ただ、掌にのるくらいの、一羽の鳥がたたずんでいただけだ。碧色の翼をつやめかせて。

「牙……？」

「しばしのお暇にまいりました」

低い、淡々とした声で空者伽羅王の〈使〉はそう応じた。亮介はまずそれがまちがいなく牙であることを認識し、やがて彼の告げた言葉の意味に瞳を見開いた。

「……どこか遠くに？」

「広島へ」

即座に返された答えは、ある意味、亮介を安堵させるものだった。

あまりかしこまって別れを口にされると、一瞬に最悪のパターンまで想像してしまう。
「只今あなたがたに降りかかっている難事の矛先が、広島にいらっしゃるあの方まで――彩様へまで向かわぬようにとの忍様のご采配です。事態の終結が見られるまでは、私はこの地へ戻りえません。あなたがたに力添えできませぬこと、おゆるしいただきたく思っています」
東京を離れるわけを、ゆらぎのない、ごく静かな調子で牙は説明した。
さらりと聞き逃せばそれで終わるような。
だが。
（降りかかっている難事）
……まさか。そんな。
「ちょっと待っ……！」
息を呑み、亮介はベッドの上から跳ねおりると窓際の小鳥へ身を近づけた。膝をついてかがみこむ亮介のことを碧の鳥は無表情に仰ぎみた。
「やはりご存じありませんでしたか」
「俺……が、知ってなくちゃならないようなことが、何かもう始まって……」
「始まっています。あなたに報らされぬところで」
おちついた肯定。
何をどう問えばいいのか。亮介は唇をかみしめる。急に胸の中で言葉が出口を失ったようだ

った。

（どうして）

（どこで、誰に）

「忍さんが……忍さんに、何か……？」

「いえ。忍様もすでにこの件より離れていらっしゃいます。あのお方には別にお役目がありますす」

では、牙の助けを得られないだけでなく、斎伽忍をあてにすることも初めからできないのだ。

「おそらくあなたはこの事態において、護られる側のお方なのでしょう。私がお伝えせずにおけば、難事に踏みこむこともありますまい。あなたが平穏のほうを望まれるのであれば私もこれ以上を明らかにはいたしません。いかが、なさいますか」

「え……？」

思わず、亮介は絶句してしまう。

恐れから、ではない。

「俺がっ……！　何も知らないでいてそれですむなんて、そんなのはっ……!!」

それは憤りだ。

「そんなのは俺は!!　今までにだって何度もそういうことがあったけど、どうしてそれで俺が



……!!」

怒鳴りかけた声が喉でつまる。

（諒が）

情報を止めるのは諒だ。

きっと。

「あなたが皆様から大切にされているのは、あなたが不要であるということとは違いますよ」

ふと、いつもなら覗かせない彼の優しさを含ませて、牙が語りかけた。

「そして私は、今の状況があなたこそを必要としていると、独断で、言わせていただきたく思います」

「……ありがとう」

亮介は小さく息をつく。

（どうして俺がそれで平気かなんて）

そんなことも、もう何度も口にしてきたことのように思える。

「ならば、お伝えいたしましょう」

あらたまって嘴を下へと向け、亮介の心情を気遣うようにゆっくりと、牙はその事実を告白した。

「里見十九郎様の行方が断たれました。なにものか――邪な呪術を用いる者に、身柄を拘束

されたと見られます」

3

自由ケ丘にあるマンションの七階、里見夏江と彼女の一人息子が住まう静かな空間は、水沢諒にとってもすでに馴染みのふかすぎる場所である。

夏江から冴子経由の緊急な連絡を耳にしてかけつけてきたのは、つい先程だ。

よく考えると、自分がここへころがりこんだのは、えらく情けなく叩きのめされているときばかりだった気がする。複雑な気分で諒は足元へと睫を伏せた。床に置き去られたままの真新しいスエードの鞄に、乾いた血痕。

和泉希沙良のものだろう。

（今回は少し違う）

いままでに、斎伽忍の意図が読めぬとき……上からの明確な指示を得ることがかなわぬ場合、代わって指令塔の位置に立ちうる人物が必ずいた。それが里見十九郎だ。彼自身がそう望んだかどうかはともかくとして、否応もなく。

その彼が。

（攫われた、のか？）

本当に？

行方不明という言葉ほど曖昧で残酷なものはない。実際には、十九郎がいなくなり禁断の術をつかった跡が見られるとの報告があっただけだ。……生命の無事すら確認されてはいないのだ。

亮介に『制裁』とやらを下したのを含めて自分たちに陰謀を仕掛けた相手がいるのだとしたら、狙いどころは間違っていない。もちろん、今はまだ何もそれらの関連をあきらかにしてはいないのだが。

極端な話、斎伽忍の役回りには代わりがいても、十九郎に代わる者はいない。自分たち、斎伽忍の私兵――伽羅王私属の陣として扱われている術者の顔ぶれのなかには。

（俺ですかね）

まさか。

自分はつねに使われる側の、走らされる側の人間だ。諒はそのことを、経験上、ひどくよく知っている。

感情が強すぎて。

大局を眺めるには向かない。

（イレギュラーの存在）

結局、自分は斎伽忍ひとりの兵でしかないのだ。それはもう、スタート地点から決まってし

まっていることなのだ……。

「何よ」

諒の視線を感じて隣の冴子が喧嘩ごしの目つきを返してくる。

「いえ別に」

気のないそぶりで答えつつ、諒は溜め息をつく。今のところ、かろうじて適任といえるのはこれだけか。

「何なのよ、一体？」

「いや。頼りにしておるので、よろしくね」

「……何言ってんのよ？」

まるきり話が通じないといったようすで冴子が眉をしかめた。

「来たわね」

キッチンの奥で、夏江がふと呟いた。

「お茶とコーヒーと、どっちがいいかしらね。上等なアッサムの葉もあるのよ」

「あら、あたし手伝いますから」

慌てて冴子が立ちあがりキッチンへぱたぱたとかけこんでいく。

「えーと、どかっと濃いコーヒーをひとつお願いいたします」

その背中にリクエストを投げつつ、諒はリビングルームのテーブルを素早く離れて玄関へと

足を向けた。夏江の勘に間違いはなく、諒の手が扉をひらいた瞬間にはちょうど、予告された来客たちがエレベーターを出てこちらを見返ったところだった。

……奇妙なセッティングの顔合わせになったものだ。

広く扉を押しひらき、歓迎的とも否定的ともならぬような無表情でもって諒は彼らに目礼をおくった。

「どうも。水沢諒、と申しますが」

「御身の名前だけはうかがっている。道者方総代として参った、不破武人です」

背はそれほど高くないが年長であることははっきりわかる、いかにも武家育ちという雰囲気の人物がそう応える。そして彼の後につづき、線の細い、若めの人物のほうは敵意にも似た鋭いまなざしをごく短く投げてよこしたが、表向きだけは平静に抑えた声で自己紹介を告げた。

「不破殿に同じく……遠野一真、です」

客人の来訪にあわせて十九郎の部屋から歩み出てきた和泉希沙良は、あらかじめ斎伽忍の手で呪術の影響を軽減されているとはとても信じられない憔悴ぶりだった。無理もなかろうが、誰かが支えればどうにかなるものでもない。彼は彼自身によって回復しなければならないのだ。あらためてテーブルの椅子に手をかけながら諒はそのように考える。に、しても。

（手をぬいとるだろうあれは）

苦しい境地へ救いにあらわれて恩を売っておきながら、意図的に手控えるくらいのことは平気でやるのが斎伽忍という極悪人である。

ほかでもない忍のことだ。わざわざ自ら足を運んだからには、充分な元を取って帰ったにちがいない。ちょっと待てこっちの話をいい加減にかわしておいて人と会う予定ってのがそれか、という恨みも個人的にはあるのだが。希沙良に同情する気分を惜しむつもりはないのだった。

「顔色がよろしくない」

「知ってる」

がたりと諒の隣の椅子を手前にひきよせ、嗄れた声で希沙良が答えた。

「話し合いができないコンディションの人間は、ここには要らんですよ」

「……！」

ぎっと怒りの感情を露にして希沙良が見返った。

諒もまたわざと正面からそれをうけとめた。

挑発ではない。

彼ら道者たち——本家側に近いものたちと対等にわたりあうことができないなら、最初からここに座らないほうが幸福だ。

「だから出てきてんだろ……」

押し殺した一言とともに、音をたてずに希沙良は椅子の上へ身体をすべりこませる。

「ならいいんですけどね」

あきらめてテーブルに頬杖をつき、諒は小さく呟いた。殴るどころか怒鳴りもしない和泉希沙良というのも、なぜか淋しい。

「まさかこのように貴君らと語ることになるとは……」

型どおりに切りだしかけた不破武人が、そこで急に目をまるくした。彼と遠野一真との前に冴子が玉露を運んできたためである。ほかでもない伽羅王の妹から平然と茶を出されてしまったことに、なんとも処理しかねる動揺がうまれたらしい。

「これは……ご無礼を……」

「お気になさらずに。それよりも不破殿、この連中にはもっとくだけたお話し方をしてくださって結構よ。いまさら礼など尽くされなくとも、もとから馬の骨な人たちですから」

「……お言葉の厳しいことに……」

きまじめな苦渋をにじませて武人は唇を結ぶ。いじめてどうするのだと諒は冴子に視線で問いかけたが、知ったことではないという態度で冴子は希沙良の前に薄い紅茶を、自分と諒の前にコーヒーを置くとお盆を抱えたまま席に加わった。

「夏江さんは？」

重苦しい頭をもちあげて希沙良が尋ねる。
「われらの用件は」
きりつけるように、その声へ遠野一真が鋭い言葉を返した。
「君たちの、術者としての立場を最大限に尊重したものだ。そうでない里見殿をこの場に加えたとていったい何になる？」
「――何にって……」
希沙良は息をのむ。
あまりに納得のいかない意味合いの反問と、不条理な反発のされように。
「いや、表現をあらためてもよろしいか。まだそこまでの段階ではないと。今の時点では、これは私たち道者のみの問題だ。少なくともここで里見殿からいただける言葉など、われらは求めていない」
穏健に、武人が一真の語気をおさえて口をひらいた。
「私たちの抱えているものがつまらぬ矜持にまつわることはご承知と思う。だがわれらは現に、責任をもって管理すべき場において大きな不祥事をおこしてしまった。われらの隙を奪うかたちで、なにものかに里見の身柄を消し去られたのだ」
「危険なことに、一族内でも有力なあなたのご実家で」
冴子が冷静な注釈を添える。武人は無言で頷いた。

「そのとおり……」
それゆえに、と武人は声を落とす。
「……敵は一族の内に、と」
誰の敵、と武人は言わない。
だが道者四人衆の敵ではない。術者たちに対するものでもない。それは――。
（伽羅王の）
忍の力を削ごうとするものが。
七瀬本家の内部に。
だからこそ『不祥事』と武人は告げるのだ。
「この一件、一族傍流のすみずみへ知れたならどうなると思われるか」
試すように武人が問うた。
「二重の意味で疑いがむかうわね。忍様に」
すっぱりと、正しすぎる解答を冴子が出した。
公式な近衛機関である道者四人衆の能力と、私的な戦力である術者の布陣とが、同時に脆い傷口をさらけだすことになる。それはとりもなおさず斎伽忍自身の立場にとってマイナスとなるだろう。
「そういうことです。であるがこそ、われらとしては表沙汰にせず敵の本体を探りたい。つい

ては貴君らに、この事態に関してわれらと結託する意があるかどうかうかがいたい」

「……」

簡潔に武人は本題へとたどりつき、その口をとざした。

沈黙が生じた。

冴子は諒を見やり、諒は希沙良へと視線を投げていた。

はじめからとるべき選択肢は定まっている。

きつく、神経質に爪を握りこんだ拳を希沙良はテーブルの角に押しつけて俯いていた。

おさえても、おさえても震える、爪の先。

（斎伽忍の）

（立場に、マイナスとなるから）

唇が動かない。

（不祥事）

……ならば。

ならば今、生存の保証さえもなく消し去られているのは。

ここから。

傍若無人に奪い攫われたのは。

誰のことで。

（――誰で）

心臓に低く、煮えたつ熱源。

一瞬でこの心の真実をすくいあげることができるのは誰だ。誰だったというのだ。今すぐに子供めいた獰猛な叫びで、ただ呼ぶだけで得られるものなら。闇雲に、目茶苦茶になるだけですむのなら!!

「！」

襲いくる酷い胸の不快感に希沙良は身体をふたつに折り曲げてしまう。死んだほうがましな痛み。痛み。

「触るんじゃねえ、畜生!!」

のばされた腕を渾身の力ではねのけた。冴子に触れられてもどうせこんなものは治らない。癒されはしないのだ。

「畜生……!!」

「……きみは、ぼくらが十九郎を心配しないことが不満なのか？」

ふと、静かな……これまでとやや調子の異なる問いかけが発された。

遠野一真から。

希沙良は答えない。

「ひとを案じる精神と利害を考える理知が同時にあることもゆるせないのか。だとしたら君に

は荷が重すぎる。すぐにでも十九郎とは離れたほうがいい」
「一真」
やんわりと武人がそこへブレーキをかけた。
「私も、話を急いだふしがある」
「不破殿のお話には筋が通ってたと思うわ。基本的にはあたしは賛成よ」
基本的には、と念をおしながら。
場をまとめる意味で、冴子がそう端的な結論を出した。それで充分というように武人は頷いた。
「時間の惜しいところです、今すぐにも動きだせるなら有難い」
「どのように？」
「現在、すでに咸月と明石川は一族内部の動きをさぐっています。まずは隠密裡に――われらの行動を気取られず、疑わしき影すべてを洗ってゆくほか策はないかと」
「その手の仕事ならできないでもない人材がこっちにもあるわね。わかりました、お貸しすることにするわ」
身も蓋もなくレンタル荷物扱いをされて諒が恨めしげな顔をつくったが、冴子はもとから頓着などしない。
「それと、あたしの名前でしょう。あなたがたに必要なものは」

「……恐縮です」

神妙に武人が呟く。

「かまわないわ。あんまり効きめのある名前じゃないけど、ないよりはましだから」

「いいえ。率直な事情を申し上げれば、集めうる総力を尽くさねば勝てぬ相手とわれらにも思えるので。使える後ろ盾がひとつ増えるとするだけでも心強い」

状況の厳しさが、彼の言葉には滲んでいる。

「ともかく、跡をのこさず当家の屋敷に侵入し里見の身柄をなんらかの方法で運び去るとするは、物理的にも、そう容易にできたことではないはず。となれば一族のうち関わった勢力のどこかに必ず不自然な流れが見受けられると信じて、調査をおこなうのみだ。それがいずれは里見の探索にもつながる。……他に解決への足がかりはない」

面を伏せたきりの希沙良のほうに瞳を向けて、武人は静かに、諭すような物言いをした。

「仕掛けられた呪の源をも、つきとめねばならぬのは勿論のこと……。よろしいですか、冴子殿」

「いいわね？」

ここまでの話で初めて、冴子が諒を見返って了承を求めた。

「まあね」

上等な結果だろう。傾けたコーヒーカップに唇を近づけつつ諒はさらっと同意する。やはり

以後は冴子を立てて動くのが正解らしい。
「あなたが交渉役で助かったわ」
「いえ、そのようなことは仰らないでいただきたい」
賛辞を述べた冴子に、ふっと硬い表情を浮かべ武人はそう告げた。
「ここへ参じたものが誰であろうとわれら四人衆の意図はひとつ。私も最後にはあなたがたと正義を異にすることは変わりはない。私たちは本来、違いすぎるものだ。それをお忘れなく願いたい」
冴子の言をはねつけるのは不本意なのだが、どうしても境界を明確にしておかねばならないとする心のほうが勝ったらしかった。なるほどまじめな人なのねというのが、諒の内心における感想だった。
「では」
すぐさま仕事にかかるべく、武人が腰をあげる。思いきった、険しさを秘めた面持ちで遠野一真が彼をふりあおいだのがそのときだった。
「不破殿。私よりお願い申しあげることは……この遠野に我が儘勝手をゆるしていただけることはありませぬか」
「なにごとか」
訊きかえす武人のほうも、一真の要求はある程度、先に察知していたふしがある。

同い年という誼みもあり十九郎と私的な交流をもつこの人物が、隠しがたく拭い去りえない複雑なこだわりを胸の底においていることは冴子にもわかっていた。

（僕は、あんな風に傲慢に生きている人物は）

（嫌いです）

その心持ちを哀れと評したことも冴子にはある。

だがおそらくそれはもう彼の意志や抑制などで覆いおくのが不可能なまで、一真の内に膨らんでしまっているのだ。

「今しばらく、話のできる時間をいただきたく思います。彼と」

一真の言葉はまっすぐにひとりだけの対象へ向いている。

和泉希沙良という、特権者へ。

「病人に鞭打つ真似はどうかと見るが」

控え目に武人はそう懸念を示したが、だからといって一真を制止し希沙良を擁護する理由も彼にはないのだ。

「病人なのか？　君は？」

挑みかかるロぶりで、一真が尋ねた。

震える唇をおさえつけながら、じわりと希沙良が肩を動かし一真へと視線を返した。

意志の力を奮うように。

……答える。

「違う」

＊　＊　＊

まわりを包む音の種類は、いつの間にか変わっていた。高速でかけぬける規則正しいタイヤの振動は消え、ゆっくりとした、不安定な揺れがそれに代わった。

人工的な空調（エアコン）が効きつづけているせいで外気のようすはまったく伝わらない。そこが街中なのか郊外なのか……今が日中なのか、すでに夜になっているのかすら。

移動の過程は永く、はてのないものに思えたが、体内の時間感覚が狂っているだけなのかもしれなかった。曖昧（あいまい）で希薄な、遠いところでしか物事をとらえられなくなっている。まるで何か、非合法な薬物を用いたような。

さまざまな心掛かりが、思いだされぬまま胸の底に溜まって澱（よど）む。危急の問題も、めざしていたものも……。

危急の問題？

（希沙良）

脳裏をよこぎった名前とともに十九郎は瞳を見開いた。

膚の熱。

自由にならない左腕の先。五本の指の間に侵入して絡みついた誰かの。

広い車室のソファシートに横たえられた彼のすぐ傍らに跪き、しごく冷静にその少女は十九郎の覚醒を見守っていた。

大人びた口元。情熱的な、芯のとおった顔だち。

肩よりも長くのばした髪の、薄く光に透ける色は誰かのものに似ている。眩しさに目を慣らしながら十九郎は徐々にそのことを認識する。あの年下の従弟。うまれついて色素の少ない、明るい髪。

傾向として、斎伽の血が特に濃いもののなかには、ときおりそのような偏りがあらわれる。何代にもわたってひとつの血統を凝縮し、保持しようとしている以上、それくらいのことはなければおかしいのだが。

「さすがに、力のある人だわ。あなた」

おちついた声で、彼女が呟いた。

わずかずつ、どこか心が残るようなそぶりで、十九郎の手からその指先を離して。

「普通の人なら一昼夜は気がつかないって話だったのに」

「君は」

痺れの残る舌を動かし、十九郎はそこでふと声を切った。

見覚えがある――。

（咸月家の）

言葉を交わしたことなどはない。幾度か、七瀬親族の揃う席上ですれちがったくらいの、ただそれだけの。

「もうすぐ乗り換えになるのよ。それまではもうしばらく、目を閉ざしていて」

胸元からヴェルサーチのスカーフをひきぬき、彼女はそれを十九郎の目隠しへとつくりかえた。非物理的な作用で、十九郎の動きはすべて封じられている。するりと、頬から耳元へ触れるスカーフで視界を塞がれる前に、十九郎はおしころした声で問いかけた。

「咸月殿は、ご存じのないことか」

「兄上と私は別のもの！　あんな方々にはもはや任せておけないわ」

鋭い声が返った。

……厄介な展開になった。十九郎は唇を噛みしめた。まさか、こんなところに見落とされた陥穽があったとは。

（隙になる）

その危険性を彼女自身が知っているかどうかも、今はまだわからない。

明らかになっていることはひとつ。

そこにいるのは、咸月呉葉。

咸月家、長女。十八歳。道者四人衆筆頭、咸月陣の、紛う方なき妹、である。

4

薄紫にたそがれた大空が、水面の先と溶けあうように映る。
勢いのある潮風に長い髪をあおられながら、呉葉はリムジンの車内から桟橋の手前へ降りた。
臨海都市をかたちづくるシルエットに、うつくしい光の群れが生まれだす時間帯だ。
(最初の読みより早く動いている)
幸運が味方している。何の不手際もなく、すべてがスムーズに運んでいる。
(正義はわれらにあり)
うまくいくということには、意味があるのだ。呉葉はそう信じている。偶然ではなく、それは必然。天の気まぐれではなく、導きなのだと。
そのように思うのは、心強く、なにより気持ちのいいことではないか。
「爽快だわ」
呉葉は微笑する。
「波は穏やかね。クルーズには絶好の夜になるわ」

「呉葉の一念、岩をも通すってやつだ」

リムジンの助手席から遅れて出てきた少年が、背後から呟いた。

呉葉とは異なり、彼のほうはこの吉兆とも見える順調なりゆきに、別段たいした興味を抱いていないようすだった。彼はいつでもそうなのだ。身体が重いわけでもないのに、大儀そうな、面倒くさげな歩き方で近づいてくる。

「そうよ」

独善的にはっきりと、呉葉は首を縦にふる。

「岩を通すのなんて簡単よ」

「ねえ、これどうしようか呉葉？　あいつの携帯、とりあえずここまで持ってきちゃったけど」

「あんたって子は……!!」

とたんにかっとなって見返ると、呉葉は彼の手のなかから小型の携帯電話を乱暴に奪いとった。

所沢の不破邸で、遠野一真が里見十九郎に手渡したものだ。

「本当に馬鹿ね!!　こんな追跡されやすいものを持ち歩いてどうするのよ!!　馬鹿!!　馬鹿!!」

「だって呉葉がなんにも……」

「言われなくてもそれくらい頭で考えなさい!!　あんた頭あるんでしょ、馬鹿、無能!!」
呉葉は容赦のない責め言葉を吐き、力まかせに電話機を足元にたたきつけた。がしゃんと硬い金属音があがる。
「壊して海に捨てるのよ。早く!!」
「……」
不満げに唇をつぐみながら、少年はのろのろと足元のコンクリートから電話機を拾いあげて命じられたとおりに桟橋の奥へ向かっていく。
「楷!!　返事は!?」
「……わー……ましたー……」
「聞こえないわ、ちゃんと!」
「わかりましたあーっ」
投げだすような、その態度がわかっていないというのだ。いらいらと呉葉は親指の爪を前歯にあてた。せっかくの好調なサイクルを乱されて、腹が立つ。
「ここで気がついたのですから、よろしいじゃありませんか」
なだめる声を投げたのは、濃紺のスーツに身を包んだ高浪葵である。
二十九歳の女性――。
呉葉たちの家庭教師を務めている。貴重な協力者のひとりだ。

「どうせ彼らには探知などできませんよ」
「それがよくても、あの子が他にどんなへまをしてるかと思うと呑気にしていられなくなるのよ!!」
「大丈夫ですよ。わたしが見ております」
おちつきはらった一言で呉葉の憤りをうけとめると、葵は桟橋の方角を視線でさし示してみせる。
「積み荷を運びこむ用意ができました」
「いいわ。急いで」
たかぶった感情はそのままで、呉葉は靴音を響かせて歩きだす。楷への怒りを忘れてはいないが、今はもう、さらに逼迫した目的のほうが頭を占めていた。
（正義は我にあり）
そして正しいものは必ず成功を得なければならぬのだ。

＊　＊　＊

和泉希沙良が、自らの意志で、あえて踏みとどまろうというのならば仕方がない。
遠野一真の希望を容れて、やむなく不破武人は彼をその場に残しひとり先行することにし

た。本来は監督者としてすべてを見届けたい場面だが、動く時間が惜しい。ここは一真にまかせるしかなかった。

「すみません」

七階から降りるエレベーターに同乗し、ドアを閉めるボタンに触れながら一真が詫びた。

「一真には考えあってのことと思うが、あまり自分を苦しめるほうには動かぬようにするべきだ」

「……僕はそのようなつもりではありません」

「そうか？」

武人は短く問う。

心外というようにそっと視線を返し、一真は頷く。

「僕はもっと、穢い人間です」

「青少年の懺悔に耳を貸す暇はないぞ」

「……」

厳しい、武人の表現に一真は沈黙する。

「明石川ならばそう言うところだ。俺はもう少し、別のことを言う。一真が里見に肩入れしたいのはわかるが、まちがえるな。正統な術者である里見を我々と同等の位置において考えることだけは、すべきでない」

「僕は彼に肩入れなどしていません」
はねつける語調で一真は切りかえし、すぐに後悔して面を伏せた。
「……申し訳ありません」
「やむをえないな。頭でわかっていてもどうしようもないこととというものもある」
しかし、と口をひらきかけて一真はためらう。その間に、エレベーターは一階にたどりついてしまう。
（しかし僕は本当に）
自分の、里見十九郎へ抱いているこだわりは、違う。違うのだと一真は思う。不破武人は自分という人間を誤って評価しているとしかとれないのだ。
肩入れ、などではなく。
それはもっと卑劣で愚昧なもの。
（でなかったら僕はこんなことはしないだろう）
武人にはまだそのことが、この自分の些細な企みが、知らされていないだけだ——。
「では私は先行するが……遠野にも、ここは手短にきりあげて調査に合流してほしい。よろしく頼む」
「わかりました」
従順に一真は答え、彼を送りだした。その態度の外側に、罪の意識が浮きでることのないよ

うにと心がけながら。

（何だ？）

遠野一真が胸の内に、明かせぬ部分をつくっているのは武人にも感じられていた。言いかけた、重要なことを中途で止めたのはわかっている。なにゆえの躊躇いか。ひっかからないといえば嘘になる。だがどこまで青少年の内面にかかずらっていていいものか。この危急のときに。

「本当に、俺は向いていないな」

困った性格、だ。

いちいち甘すぎて役目がはたされない。自嘲する気分で彼はマンション横の駐車場に停めたインテグラに乗りこんだ。

七瀬の一族、と一言でかたづけても、関わるものの枝をひろげていけば大変な範囲になる。効率よく、無駄なくポイントを絞って調査をすすめる必要がある。もとより一族内部の動向にはつねに目を光らせている立場だが、各分家の内情を表沙汰にならず探りきるのは〈道者〉の呼び名をいただいていても骨の折れる話だ。

「明石川か。こちらの交渉はかたづいた。以後、われらの情報の基点は冴子殿に置くとする。



連絡先は自由ヶ丘の里見家だ。番号はわかるな」

武人はまず車内電話を用いて同僚の明石川を呼びだし、決定事項を簡潔につたえる。一真をのこした件には、特に言及する必要もないだろう。

『やつらと組むのはどうかと俺は思うのだが……致し方ないな』

明石川の声は今ひとつ晴れない。成果は芳しくないようだ。

『まずは咸月と手分けして、本日の参会者を優先的にあたっている。だが俺の調べたかぎりでは、不破の屋敷内に手引きのあった気配はない。慧士叔父にも怪しげな動きは見られぬ。ともかくは安堵しておくのだな』

「優しいな、明石川は」

武人は本心より呟く。

一族の長、空者伽羅王を衛護する立場にある者なら誰でも、自分の身内がこのようなくわだてに乗っているとは思いたくないものだ。

『何だ、その気弱な言いようは！　俺は状況に沿っているだけだ』

「まったく、私もそうであるべく努力したいところだ。……武蔵野の方面には切りこめそうなのか」

『咸月がなんとかするだろう。しかし気になるのは、どうやら伊都子殿が……』

「伊都子殿が？」

声量を落とした明石川に、武人も眉をひそめた。いちばん厄介な、最も懸念すべき人物である。それは。

『先日より、静養のため武蔵野を離れていらっしゃるとのことだ。どこに滞在されているかはこれから調べる』

「静養？」

そらぞらしい名目に聞こえてならない。

タイミングが悪すぎる……。

『今はそんな具合だ。俺は実家にまわってみる』

「承知した。のちほどまた連絡する」

車内のフックに電話機を戻し、武人は難しい面持ちで考えこんだ。七瀬伊都子が——七瀬忍と冴子の母が、よりによって身の置きどころを移している。偶然と思いたいが。

（動かずに悩んでもしようのないことか）

結局、釈然としない気分のまま彼はインテグラを発進させる。

七瀬伊都子の微妙なポジションが疑惑の種であるのはいつものことだが、絵に描いたがごとく怪しすぎる動きというのもまた、別の意味で疑わしく感じられるのだ。

＊＊＊

所属している婦人団体の集まりとかで、母親はまだ帰宅していなかった。父親が遅いのは毎日のことだ。夕食はいらないと書き置きを残して、亮介は慌ただしく家をとびだすと中野の駅に向かった。

（友達の家で勉強会をするから）

いつまで通用するかわからない口実だが、いきなり正直に全部を明かしてもきっと理解してもらえない。

理解してもらいたいと、思う気持ちのほうも少ないのかもしれないけれど……。

（あまり考えたくない）

両親への対応を自分が避けたがっていることに、亮介は気づく。いや、ずっと気づいてはいることだ。いつか——いつかはなんとかしなければならなくなるのだろう。そうやって、無意識に、先延ばしに遠ざけている。

（里見さんの家みたいならよかった）

夏江のような母親なら、説明がいらない。どんな事情も理解して、すべてを柔軟にうけいれてくれる。

あんな風に、対等に、子供を信用してフォローしてくれる人なら。

（何考えてんだ俺は！）

自分の無神経さに亮介は情けなくなる。だからこそ今、里見十九郎の行方が失われていちばん心を痛めているのは母親の夏江のはずなのに。

羨まれて嬉しいわけがない。

それも自分のような、目の前の現実から逃れるための羨望なんて。

「俺だけじゃないんだから……」

自分自身に言いきかせて、呟く。誰もがそれぞれに、こういうことくらい——越えなければならない問題なんて、持っているのだ。ひそかに。きっと必ず。

いつまでも、ひとりだけ甘えた気分ではいられない……。

確かにこんな調子では、いざという事態で頭数から外されても文句は言えない。そう思うとさすがにどっと落ちこんでしまった。いけないいけないと頭上の暗雲をふりはらいながら、渋谷駅で東横線に乗り換える。希沙良と渋谷で待ちあわせるときに使う改札前の広場は、こちらがわの『難事』になどおかまいなしで、いつもどおりに人の流れで賑わっている。周囲の空気と自分の心境のギャップに亮介は溜め息をついた。

降りかかった、難事。邪な呪術。牙からもたらされた情報は、それほど豊富なものではない。

何ができるだろう。自分に。

報らされなかったことに、一方的に憤っていても仕方がない。なんらかの異常な状況におかれたとき、自分が彼らより……諒や冴子や希沙良より、圧倒的に役に立たないのは本当のことだ。つねに保護される対象となりやすいのも、生まれつき与えられたものが特殊な『中和』の能力である以上、予期できるなりゆきだ。信用や信頼や意地やプライドの話は、それよりも後についてくるもので、第一の問題ではない。

ない、と思えなければならない。今は。

(偉いな)

それを実際になしとげている人物のことを、亮介はそう深く思い知る。

中心の輪から除外される位置でも、充分に力強い支えにはなれるはずだ。

亜衣のように。

(要らないってことじゃない)

かかわらせないのは。

(大切にしてるから)

自分は男だから。だからますます、どうしても、彼らに追いつけない焦りが先走るけれど。

そうだ、簡単には消せない、ひとすじなわではいかない焦りが。

……本当のつよさを身につけられるのは、いったいいつになるのだろう。

（大丈夫）

はっと亮介は顔をあげた。

がくんと肩を押す揺れとともに東横線の車両はプラットホームを滑りだす。窓の外に流れる夕暮れの光景に亮介は目をこらした。

忘れていた。

今、彼らから——いや、自分たちから失われているのは、里見十九郎の戦略眼や知識や術力だけではない。

不安な闇に沈みこもうとする心を励ましてひきあげる、その腕も。

十九郎の責任と役割として、いつも。

（大丈夫だよ）

肯定と。頑なまでの自律心。

気づかなければならなかったのは。

（それだ）

道が見えた瞬間に、胸の中心からぐんと力が起きあがってきたようだった。できることがある。それだけで。

たったそれだけでも。

自由ヶ丘につくまでの時間がひどくながい、つらいものに感じられた。何度かの停止を経

て、ようやく眼前に迫ってくる、見慣れた駅の姿。風のぬける音とともに自動扉が左右にひらかれる。待ちきれぬ勢いで亮介はホームに降りたつと、そのまま立ちどまらずに出口へと走りだした。

5

まさか、ドアをあけた瞬間に亮介と鉢あわせする羽目になるとは思わなかった。

一族内の調査のため不破武人がここを離れたのは、つい先刻のことだ。門外漢のレベルでも探りを入れられる類の、一族関連企業についての情報を冴子と夏江からざっとレクチャーされて、善は急げと出動した——その矢先だったのだが。

七〇三号室を急ぎ足で一歩、踏みだしたままの姿勢で、諒は次のアクションを失ってしまう。ノブにかけた指までが不意に行方を忘れてしまったようだった。

大きく呼吸を乱しながら亮介もその前で立ち止まる。ぜいぜいと肺一杯に空気を出し入れして、少しせきこむ。ずっと休まずに走りとおしてきたのだ。いきなり止まるほうがかえってつらい。前髪の下から、いやおうもなく汗が流れおちてくる。

「……勝った」

苦しい咳を何度かくりかえしてから、前に傾けていた上体を起こし、ぽつりと亮介が口火を

切った。え？　と諒が目を瞠った。
「おまえのほうが、『悪い』って顔をした」
「……」
「だろ？」
亮介は真顔で念を押す。
「……」
何も答える言葉のないままに、諒はただしばし沈黙する。他にまったく、なすすべのない状況だった。
「……すみません」
「もう慣れた」
「ごめんなさい」
「だから、俺も一応わかってるから。だいたい、こういうときのおまえの考え方は」
「ゆるしてほしいんですけど」
「怒らないけど、おまえが俺にうしろめたいとかすまないって気持ちになるようなことを笑ってゆるしてたら俺もただのばかだと思う。思うだろ、おまえだって」
「……」
反論する気もおこらず、足元を見つめて諒は力ない唸りを漏らした。

なぜ知らせないのかと責められるより、もっとずっと的確に弱点をつかれている。

はじめから確信的なよりどころがあって正々堂々と亮介を除外したなら、こんな疚しさも生まれていないのだから。

「誰に聞いた？」

「牙が、教えてくれた。里見さんが行方不明で、忍さんも牙も今は別の役目があって動けないって」

「具合は？」

「傷は治ったし……休んだし、もう普通になってると思う」

「なるほど」

ぎこちなく口をつぐみ、諒は深呼吸しながら、そこから先への科白をさがした。しかし何も浮かばない。

（信じていないつもりじゃない）

同じことのくりかえし。

何度も。

だがそのたびに互いのいる位置は変わっている。相手はいつしか手の届かぬ先に進んでいるのに、こちらでは自縄自縛が深化するだけで。こんなところに拘泥していたらどんどんだめな人間になってゆくことくらいわかっている。冴子に言われなくても。

「いや……申し訳ない。俺が止めました。そっちに情報をまわすのは。……まあ、いずれどこかから話が通じるとは思いましたが」

あらためて、そう白状する。

若干、ほんのわずか、妙なプレッシャーをかけておいて雲隠れした斎伽忍に責任転嫁したい気分もあるのだが……。

仕方がない。

「俺が、怖かったので」

言葉にできる、それが精一杯の本音。

あっけなく十九郎の足跡を消しさるほどの厄介な敵を、前にして。現実に、卑怯な手口で傷つけられた亮介を見ていて。

気楽に構えていられたら嘘だ。

「でも俺だんだんわかってきたんだけど、おまえがそういうことを考えるのって、自分に自信をなくしてるときなんだよ。なんでそんな気持ちになってるんだよ?」

「なんでって……」

決まっている。

（忍の野郎にいじめられて）

なんだそれはと諒は無言で眉をしかめる。

理由としては、あまりになさけない。
せめて何かもう少し、言い訳の立つ表現が出てこないものか。
「……あのさ」
二の句に詰まったまま立ちつくしている諒のことを仰ぎ見て、ふうっと亮介が、困ったような、複雑な顔つきで呼びかけた。
「俺も別に、諒と同じ仕事をしようと思って来たわけじゃないんだ。そういうことじゃないんだ。今の俺にはそういう力とか、やり方がないのはわかってる。里見さんのために動く、必要な方法はきっと諒のなかにあると思ったんだ。でも俺が励ましたほうが諒はうまく走れるだろ」
「……」
「それをやりにきたんだ」
現在の、ちっぽけな自分の力量でできる範囲で。
せめてもの……。
欠けた穴を埋めるものとして。
「諒もそうだし、それから希沙良にも、そういう役目が要ると思ったんだ」
凍りついたように諒からの反応は返ってこない。胸のなかの勇気がわずかに揺らぐのを持ち堪えて、亮介は言葉をつづける。

「勿論、そんなのは俺が思いあがってるだけかもしれないけど……でも今は、そうしたいと思うんだ。俺の、気持ちとして」

「――素晴らしい」

すばらしいっ、と口走り諒はその場にはたと平伏してしまう。今度は亮介がたじろぐ番だった。

「ええっ!?」

「いやまったくそうでしょう、それが大正解でしょう!!」

あとずさる亮介の片脚をがしりと腕ずくでおしとどめて、諒はいきなり力説を爆発させている。ちょっと待てという亮介の声も届かない。

「亮介君はどんどこ素晴らしさを増していくですよ!!　俺はもう心の底からひっくりかえってしまうです!!」

「あのね……」

足元にすがりつかれて体勢がひっくりかえりそうなのはこちらのほうだと亮介は言いたいのだが。

「参ってしまったなあ、それですよ。まさに」

亮介の膝の上に、かるく額を……前髪を触れさせるようにしながら、ふと諒が語調を変化させた。

低い、抑えた声に。
「そうだろう。多分、今は亮介が助けてやるしかないと思う。和泉君はちょっと、逃げ場のないことになるから」
「……希沙良が？」
「逃げたらいかんことなんて世の中いくらでもあるけど、そのひとつでしょう。きっとね」
それ以上は説明せずに諒は足元から身体を起こし、いつもどおりの位置から亮介のことを見おろした。
いつもどおりの、角度。
「とりあえず俺は出ます。水沢は水沢の仕事をかたづけるのが先決、なので」
「わかった」
亮介も何も訊かずに頷いた。
「気をつけて」
「亮介君も」
ぽんと亮介の後ろ頭に掌を乗せてから、行ってきまうす、と気楽な声をのこして諒は階段へ足を向ける。こういうときはエレベーターよりこちらのほうが早いのだ。
（あとは、和泉君次第か）
貴重な亮介を預けるのだから、挫けてばかりいられては困る。

（でなきゃ恰好悪いだろう）

他人のことなら冷静に見えるものだ。実情が自分と五分五分でも。そう気づくとひどく納得しがたい気分になり、諒は渋面をつくりながら階段の手すりをのりこえ、下の踊り場へと跳びおりた。

＊　＊　＊

目隠しのスカーフを外されたのは、船が出航して十五分ほど経った頃だった。

伝わってくる音と揺れと、そしてなにより空気の芳りで、咸月呉葉の言う『乗り換え』が海上への移動であることは既にわかっていた。しばらく光を遮断されていた瞳をひらいても、予期したほどには眩しさを感じない。船室の照明の量を、呉葉が意図的に抑えているようだった。

個人所有のクルーザーか。

視界に入ってくる室内の設備をざっと見てとり、十九郎はそう推測する。上質を追求したというよりは、成金趣味のほうがやや先走った内装だ。

相変わらず身体のほうの自由はきかない。ゆったりとした革張りのソファに、右側の肩を下にして横たえられている。

「ふふ」

その手でほどいたスカーフを指の間に玩びながら、呉葉が笑う。

他に、彼女に協力しているであろう者たちの姿は、船室の中には見られない。

ふたりきりで閉じこめられている……。

「驚いた？　ここはもう、あの人たちの追いかけてこられない所なのよ」

「追われて困ることを……」

かろうじて声の自由がのこされているのは、幸いというべきだった。それもまた単に、今、ゆるされているだけなのかもしれないが。

「咸月家の呉葉殿が敢えて、何の為に、おこなわねばならない？」

「何の為に？」

気にさわったように片方の眉を動かし、呉葉はぴしゃりと言い捨てる。

「愚かな男」

「……胸のすく言われようには、御礼申し上げたいと思うよ。個人的にはね」

語調を少し改め、十九郎は独白まじりに呟いた。

愚かと呼ばれることに異存はない。こうも不用意に、しかも明らかな素人のしわざによって囚われの立場に陥っている以上。

「あなたって生意気ね」

ふと真顔に戻って呉葉がそう答える。
「そういうのも別にきらいじゃないわ。あたし、知ってるのよ。なんでも思いどおりになる男よりは、多少は反逆心のある男のほうが使い物になるのよ」
ひとつひとつの表現がもはや、同い年の男に対して用いるものからは遠くかけはなれている。
「知ってるのよ」
くりかえす。十九郎の間近に身を寄せ、床に腰をおろして。
「あのばかな裏切者たちのなかでは、あなたがいちばん罪深い」
「裏切者？」
「ごまかしても無駄。あなたたちの正体なんてわかってるのよ。冒瀆者。他でもない――〈空者〉伽羅王に背く者！」
滾る、容赦のない蔑みの視線でまっすぐに十九郎を射ぬき、呉葉は歴然と言い放った。
（背く）
十九郎は黙したまま、厳しく両眼を見開いていた。
（どこからか洩れている）
一族の、ごく中枢において伏せられているはずの。
――伽羅王の死。

斎伽忍の意に背き、自分たちの独断によって彼を現界へとりもどしたこと。
「一族の誰も頼りにならない。あたしがやるしかないのよ」
冷ややかに、そうするのが当然といわんばかりに呉葉は決めつける。
「あなたたちに制裁を下したわ。あなたはそれを知っている。あたしが制裁を下せるのを知っているわね。そうでしょう?」
やがて誇りたかい愉しみの表情が、呉葉の笑みのなかにはあらわれる。
(制裁)
確かに十九郎はそれを知らされている。既に。はっきりと、わかりやすく。
禁断の、〈呪〉の術。
希沙良の身を襲った、悪質な力の源。
「だからあなたはあたしに逆らうことはできないのよ」
そうして呉葉は正義を成すのだ。
里見十九郎を我が意のままに操って。
「……短絡に、こちらの出方を定められても、君の期待に添えるとは思えないな」
用心深く、十九郎は彼女の論理を否定してみせる。きっ、と鋭い怒りの色を覗かせ、激しく髪をゆらして呉葉が見返った。
「嘘よ。あなたはあたしのものになるのよ」

あらゆる反駁をゆるさない、断定的な調子で。
動きを奪われた十九郎の胸元に、右手の指先を乱暴につきつける。
「あなた女抱いたことないの。あるんでしょ。理屈を並べて逃げたって駄目よ。必ずあなたはあたしの駒になるのよ」

第三章　瀆されるもの

1

午後七時。
都内、水道橋。
地下鉄の、地上出口への階段を大股でのぼり、涼しさを増した夜風に我が身を晒して歩みを止めたのは、都会的なイタリアンカジュアルを着こなしたひとりの青年。
一見したところどこにでもいそうな二十代前半の、やや『業界』にかぶれた傾向の若い男、だ。
だが夜空の気配を仰ぎ見る彼の顔つきは、いわゆる尋常な現代青年のものとはあきらかに一線を画している。
地上出口のすぐ傍らからはファミリー向けの遊園地が敷地を広げ、この時間になってもコースターの疾走する音が聞こえてくる。美しい光飾が夜空に浮かびあがり、闇の色を薄めている。

今夜、この地へ集っている人間の数は、かるく見積もっても五万人。お膳立てに不足はない。

ない、というのに。

「不粋だな」

険しい気分を面によぎらせて彼は呟いた。

二十二歳のカメラマン助手、鷹木文彦として、ではない。

妖者方三忌将の旗頭――〈雷将〉勝呂の名をもつものとして。

「どういう料簡だ、提灯持ちは無用と俺は言い置いたはずだが？」

「はっ……。申し訳ありませぬ、我が独断にてお供つかまつり……」

虚空へ問いかけた勝呂の声を契機に、彼の間近のアスファルト上には幻のごとく若い男の影があらわれる。移動の経過を感じさせない、高速をきわめた出現ぶりだった。

「雷王のお気にさわりますれば、伏してお詫び申しあげまする」

「あのな。きさまはばかものか。俺のお気にさわっておいて伏してお詫びで片付けるか」

「申し訳ありませぬ」

うやうやしく歩道に跪いた姿勢で、きまじめに頭を垂れる。しかしそれは単に謝っているだけという風にもとれる。十九から二十歳程度の外見を有する、型を崩した古着の似あう若者である。色の褪せた茶色い長髪と、二連のピアス。流行りのストリートファッションというやつ

を研究した成果らしい。

「今一歩で俺は笑いものになるところだ。俺の名を辱めてそんなに楽しいか、ささまは」

「埒外な仰せにございまする。我はただ雷王の御身が、心懸かりにて」

「くだらぬ弁解など要らぬわ!!」

突然に、たたきつけるように勝呂が一喝する。びくりと古着の背中を震わせて若者のほうはさらに低頭した。

「申し……申し訳ございませぬ」

「その鬱陶しい喋り口もやめろと言ったな、俺は？　俺は下された命の聞けぬ腰巾着など欲しくもなければ要りもしないんだがな」

「は……」

内心傷ついた様手を隠せずに若者はアスファルトに視線をさまよわせ、勝呂の満足を得る途を探している。文彦は不愉快に眉をしかめつつ、怒りの矛先をおさめ、語調を元へと戻した。

「鴉来よ、とりあえず供はここまでだ。俺の目を欺いても無駄だ。よかろうな？」

「されど……い、いえ、しかし雷王おひとりでは」

鴉来、と呼ばれた相手は気遣わしげに顔を上げ、慣れない種類の言葉を操って反論した。

「心配に、ございます」

「ふん」

文彦は鼻で笑っただけだった。
「きさまの案ずるようなことはまずありえんだろうさ。初めからそういう舞台を選んであるのだからな」
「ですが雷王は随分と、これに臨み、昂ってなさるとお見受けいたしました」
叱責をくらった直後にしては思いきった指摘を、鴉来が口にする。
ふと、文彦は応じる声を途絶えさせる。
無礼に感じたのではない。
おもしろい、と、わずかながら納得したのだ。
（それはそうだろうさ）
興奮など。あるに決まっている。
「俺はきさまのそういう遠慮なしなところはきらいじゃないぞ」
「言葉が過ぎましたでしょうか」
年若い者の不器用さをおもてに出して鴉来は呟く。文彦は人差し指を仰向かせ、立ちあがれと彼に合図する。恐縮の意を示したまま、鴉来はそれに従った。
「いや、気に入った。俺の側近にあるからには、その目を忘れるな」
「恭悦至極に……は、いえ、ありがとうございます」
永い、永い九百年の時を経て——。

妖者方最強の将、勝呂の元へと還り至ったばかりの欣びと畏れとが、この新参の近臣のうちには今もって巡りまわっている。

愈のその刻の近づきに、たとえられぬほどの逸り気もまた、鴉来の身に満ちている。気炎、である。

大総帥、九那妃の神威を頭上に掲げ。

雷吼を統べる偉大なる主君が、いずれ現界すべてを平定し、宿敵伽羅王を討ちはたす。

九百年の間にはあまりに多くの同朋が失われ、雷将側近の位につくものも次から次へ滅び去っていった。もとをただせば鴉来はその末席に名を列ねるにすぎぬ立場である。今世において、こうも間近に、雷将に仕えることが叶うなどとは……犠牲を悼む気分こそ確かにあれども、鴉来にとっては思いもよらず幸いなりゆきだった。

「不慣れなうちは目溢しもしてやるがな。俺のやりかたを早く呑みこんでおけ。俺はいつでも先陣に立つ者だ、余計な盾は要らぬ」

「御意」

「かたくるしい小僧だ、まったく」

「は……気をつけます」

粛然とうつむいて鴉来は睫を伏せる。ちらりとそれへ視線を送ると、文彦は少々呆れた表情で口の端をもちあげた。

「貰うぞ」
唐突な一声とともに文彦は鴉来に近づく。
虚をつかれた様相で、鴉来のほうは充分な返答をしている間がなかった。
造作なく鴉来の顎を左の指で支えると、喉元から下——あらわになった彼の首筋に文彦は自らの唇を触れさせる。立ち尽くした若者の背中が急にふるえ、強制的にその動きがこわばる。
身じろぎする自由も奪われて。
熱く、触れたところから気の流れを操られている。
——摂られていく。
人間どもから得た生命力。
妖力の源が。
「は……、っ……」
苦しげな呼吸を抑え、鴉来は忘我の心境で、捉えられた顎の先をのけぞらせてゆく。
鎖骨の近くからゆっくりと上向きに唇の位置を移し、耳朶の裏にまでたどりついたところで、なぶるように甘く文彦が問いかけた。
「おそろしいか、小僧？」
「す、勝呂、様……」
「きさまひとりの妖気まるごと、俺が喰らうのなどたやすいことだ。おそろしければ俺に無用

なものとされぬよう精励するのだな。この雷将、つまらぬ愚か者にはお仕置きを惜しまぬ主義だ」

「……わかりまして……に、ございます」

「俺の用心棒をかってでる暇があれば、その一千倍熱心に九那妃様をお護りしろ。わずかでも、俺の留守、幻将や炎将につけいられぬようにな」

「はっ……。あ、……あ」

それ以上堪えがたく、掠れた吐息を洩らして鴉来はがくりと地上に膝を崩した。

「承知、つかまつり……。皆、仰せのとおりに……」

「お利口だ」

あっさりと、なにごともなかったような態度で彼の傍らに立ち、文彦はそう言い捨てる。が——。

新たな精気を採りこんだ文彦の姿には、先刻よりもさらなる猛々しさがまとわれたかに見えた。

壮とした、戦神の風格である。

「雷王」

くずおれた先の地面にひれふし、その鋭い波動に酔いしれる心持ちで、鴉来は陶然と呼びかける。

「おうつくしく、あらせられます」
「懲りないやつだな」
文彦は再び微笑した。しかし今度のそれは不機嫌な嘲りではなく、まぎれもない威信に満ちた、純粋なる王者の笑みだった。
「こいつは邪魔になる。きさまが持って帰れ」
派手な色合いの上着を鴉来の腕に拋りやると、彼はあとを顧みることなく、目的の場所へむかって歩みだす。鴉来は深く、真摯な礼をもって誇りたかき雷将の背を見送った。
文彦のめざすものは、遊園地の光影のむこうに生白い肌を浮きあがらせる、巨大な風船。
たった今、セ・リーグの人気球団同士の首位争いに熱狂する観衆で一杯になっている、スタジアム。
東京ドーム、だ。

2

永遠につづく平穏なんて、ありえない。
あるとしたら、それは既に終末。
澱むこと。

崇まることも育つこともなく。安堵の沼に浸り、なにもかも萎えさせ曖昧にしてゆくだけ。

（なあ。逃げちまおうぜ。どこかに）

どこに？

無茶な、我が儘な、理屈にあわない乱暴な提案をしても、今の彼ならば——あのつらく激しい波をこえて獲得された、現在の十九郎なら、きっとそのまま首肯するにちがいない。

いいよ、つれていくよ……どこに？

（行き先は）

わかっている。

今はもう、それを自分で選ばなければならないのだと。

……だから嵐は何度でも来る。ひとつ過ぎても、必ず次は来る。知っている。そんなこと身体中でとうに感じとられている。

やすらぐ場所など、捜すすべはない。

「！」

ばさりと水滴を払い、希沙良は濡れた貌を洗面台のうえに持ちあげる。冷たい水の刺激が、少しでも毅然と立つ柱になればいいと思う。

（俺は忘れてなんかいない）

鏡のなか。

瞳を濁らせずに。
（忘れてない）
どれほど遠くても。おそろしく、つらくても。彼が苦境にあるのなら。嵐の底に陥れられ、自由を失っているのなら。
救いださなければならない。

「君が僕のことをどの程度知っているか、僕にはわからない」
さらりと頬を撫でてゆく涼風を正面から受けつつ、遠野一真はそう切りだした。
あかるさを残す夜空を、間近にして……。
わずかでも息苦しさを減じるために、マンションの屋上へと和泉希沙良をいざなったのは一真のほうだ。里見家のなかはつねに清浄な気を保たれているが、不在でありながら定着する十九郎の波動がつよすぎて一真には重い。気疲れが増すのだ。
「以前に鎌倉で出会ったときは、君は僕らのことになど頭を振り向けている余裕がなかっただろう。だからもう一度、説明する。われわれ道者は〈地の者〉と呼ばれるもの。生まれついては君たちと同じような術力をもっていたものが、君たちのような完成をみることなく半ばで衰えた、そういった種類の人間だ」

事務的に、そこまで話してから一真は相手の面持ちをうかがった。
唇を閉ざし、無言のまま希沙良はそれを聞いている。
漠然とした言いまわしでは決して、不完全な術者という——この意味を和泉希沙良が理解することはあるまい。彼のたたずまいを目にしただけで一真は確信する。
光浴びるものの優越。
その位置を当然のこととして疑わない、絶対的な、清明さ。
闇にふれるものの心理など、醜くけがれた卑しさなど、はっきりと眼前につきつけられぬかぎり感じとれはしない。
ずっとそうして今まで生きてきたのだ。
陰い汚濁から遠ざけ自らを盾にして、そういう人間にしかしなかったのだ。里見十九郎が！
「——僕も生まれたときは君と似た力をもっていた。六歳でそれを失くした」
感情を殺した声音で、ゆっくりと、一真は刃を入れることにした。
和泉希沙良の想像力。
彼自身のこととして切迫する実感のなかに、だ。
「考えてみてほしい。もしも術力を失くしたのが僕ではなく、君だったなら」
ふと、希沙良の瞳が見開かれたようだった。
狙いどおりに。



それがまた新たな苛立ちを一真に起こさせる。だが後に続く言葉を、おしとどめる気にもならなかった。

「そのときは、空者伽羅王の配下、あの方の命をうける術者として十九郎の隣にいたのは君ではなくて、僕だったということだ。君の優越性はただそれだけだ」

「！　俺は――」

「十九郎にはそれくらいわかっている。斎伽の一端をなす家に生まれて、術者であることにどれほどの意味があるか知らない者はいない。君以外は。空者沙良耶の一件のせいで一族から離れた位置にあった君を、十九郎が保護して管轄下においたのは何故だか本当にわかっているのか。十九郎が君を制御する立場にあるなら伽羅王にとっては好都合だ。だから君はそこにいるんじゃないのか」

希沙良の反駁をおさえこむ勢いで一真はさらに奥底へと斬りこんでいく。手加減も容赦も、今はすでに無用だった。

傷ついた顔などさせない。

そんな傲慢なもの。

「君が僕らの考え方を忌みきらうのならまず第一に十九郎を責めるべきだ。いつまでも甘えた幻想に浸っていないでくれ。十九郎が君に執着するのは君が彼に有効な力だからだ。十九郎がもつ『静』の能力を補う要素が、君にしかないからだ。それが現実だ」

「――――」

動かしかけた唇を、希沙良はそのまま凍りつかせる。

感情的に怒鳴りかえすことは、もうできない。

いつものやりかたではねつけることは。

（大好きだよ）

……大好きだよ、希沙良。何があってもきらいにならないよ。

はっきりと示された、最初の、約束。

憶えている。それは自分が九歳のとき。ひとつ上の十九郎はちょうど本家の集まりに出入りしはじめる齢になっていた。

もしも一対をなす術力の持ち主が、別の場所にいたのなら？

（違う）

揺さぶられるな。敗けるな。希沙良は胸の内でくりかえす。信じられなくなったら敗北する。すべてが嘘になる。

「君だって同罪だ」

血の気を失って隠しがたく蒼ざめた希沙良のことを視線で射抜き、一真は語調をつよめる。

告発する。

暴きたてる、陪審の声。

「十九郎にそのすぐれた術力があったからこそ、君は十九郎を求めるんだろう」
「ちがうっ……！」
振り払うように希沙良は叫んでいる。
「絶対に、違う!!」
力があるから『一対』なのか。人格も過去も葛藤も約束もなにもかも別にして。
互いに術者であるというだけの理由で、近くにいるのか。
なぜそんなことを問われなければならない。
（どうだっていい）
くだらない理屈だ。現実ばなれして、ばかげていて、ひどく深く——心を刺す。
痛みになる。
「俺にはっ……!!　どうだっていい、関係ない!!　俺が俺の信じたいものを信じる、それだけのことだろ、てめえの考え方がどうだって……俺には関係ない」
「なら君は永久に十九郎を理解できない」
冷徹に、一真は決めつける。
「だから君はいつまでも十九郎の重荷になる。僕にはそれが腹立たしくてたまらない」
「……」
じわりと長い時間をかけ、希沙良の表情に、驚愕に似た色が広がる。

かたちにならぬ棘を含んだ、疑問。
「……おまえは十九郎の何なんだよ？」
今度は、それに対して一真が短く沈黙する番だった。
自嘲するように、一真はふと笑みを浮かべる。
希沙良の他に聞く者のない、暗く、つめたいコンクリートのひろがる屋上。
「僕は彼の賛美者だ」
世界中へのあらゆる皮肉をこめて一真は呟き、そして酷薄につけくわえた。
「だがそれこそ、君になど関係のないことだ」
立ち入る権利なんて認めない。
歪んだ期待感と、代償行為の憎しみ。誰にも覗かせはしない。殊に彼には。
「僕の心の内を君に一から説明している義理もない。……僕からの話は別に、ある」
本題は、この先だ。
鋭い瞳をそらさずに、息を整え、一真はここまで秘めてきた要求を具現のものとする。
「まだ他に誰も――僕以外に気がついていないことだ。十九郎を拘束した人物についての材料を僕はつかんでいる。十九郎が消し去られる時点で誰がかかわっていたのかを、知っているんだ」
「……」

半瞬の空白。
愕然と、希沙良が顔を上げた。
（手がかりを）
得ていながら……。
「黙っ……て」
問いただす声さえもが、どうしようもなく震えた。
「貴、様……そんなこと平気で隠して……」
「そうだ。僕が黙っていた」
一真が頷く。
「!!」
かっと灼熱した絶大な怒りが希沙良の全身をはじくように動かした。考えるより先に足元のコンクリートを蹴りつけ疾っていた。
「希沙良!!」
背後からとびこんできたその叫びが、希沙良の勢いを寸前で、制止した。
遠野一真はほんのわずかも、身をかわそうとはしていなかった。
「――っ!」
がつり、と固めた拳をコンクリートの地面に……一真の立つ位置の、すぐ傍らに、力任せに

叩きつけて。
不格好に膝をついた姿のまま、希沙良は乱した呼吸に肩を上下させる。暴発しかけた力の作用で、拳をおろした先は、クレーターのようにコンクリートが穿たれてしまっている。
（殺す気か）
自分自身の無軌道さに茫然とする思いで希沙良はそれを見つめる。
遠野一真は、今までこの手刀を使って倒してきた〈妖の者〉とは違う。
自分に対抗する術力ももたない。
……生身の人間だ。
（俺は狂ってる）
狂わされている。残酷な、不可解な、現実のすべてに。
「希沙良……」
近づく、声の主はふりかえらなくてもわかった。
今はもう全部を放りだして、現れた味方に後のことを委ねてしまいたい。
縋れるものなら。
けれど。
（まだ終わってない）
一真の話は結論にはたどりついていない。

「……いいから、ちょっと待ってろよ……崎谷は、そこで」
無表情に呟きながら、小刻みにふるえつづける指をほどき、上体を揺らして希沙良は立ちあがる。
怒りや憤りは保存しておけばいい。
忘れてはならない、最大の目的は、十九郎を救うこと。
救えるように、すること。
「手がかりがあるんだろ……言えよ」
潰れかかった喉から。
促す。
一真を。
「……僕に、期待させてはくれないのか」
たった今示された攻撃的な力の発現には動揺を覚えた気配もなく、硬い口ぶりで一真が呟いた。
「十九郎の居所をつかむための情報を僕はもっている。僕は君に、僕にそれを言わせるだけのことをしてほしいんだ」
卑劣な沈黙の末の——。
自らの目的が、そんなものであると認めること自体、一真には可笑しい。低俗すぎてつきあ

っていられない。めめしく醜い企み。

事実を伏せている時間がたてばたつほど、里見十九郎の身は危険にさらされるだろう。だが彼らは術者であり、あきらかにすぐれたものなのだ。その証を期待することは罪なのだろうか？　本当に罪悪なのか？

「……言わせるだけのこと……？」

希沙良は眉をひそめる。この相手の話運びは、ひとつひとつがどれも希沙良の発想とあいいれない。

すぐにでも解答が欲しいのに。

重苦しい疲労感ばかりが増してゆく。

「何をすればいい……」

「君次第だ」

尋ねた希沙良を、一真はあっさりつきはなした。

「どんな方法だってあるだろう。僕を、心変わりさせるだけでいいんだ。もちろん君の得意な力ずくの脅迫でも……それが叶うならね」

一真は本気で言っている。

どれほど非道な手段でもかまわない。

肉体的な苛みをおそれるような、生半可に怯懦な感情は、一真にはない。

和泉希沙良が卑劣な道に染まるならそれもいい。
（言わせてみせればいい）
（そこまで彼を望むのなら）
きつく唇を結び、返す声をなくして希沙良は立ち尽くす。
後方から彼らのやりとりを見守ることしかゆるされず、亮介はただ希沙良の選択を待っていた。遠野一真は徹底して亮介の存在から意識をそらし、そして希沙良はこの問題に彼自身以外の介入を拒んでいる。
何を選ぶべきなのかは亮介にもわからない。
ただ目の前に立っている人物ひとりの心を動かすのに、どうすればいいか浮かびもしないなんて。同じ人間同士なのに。それは闇に心を占められた妖者などでない、対等の人間なのに。
（……何だってできる）
大切な呪文をくりかえすように、希沙良は両眼を閉ざす。
（何でもしてやれる）
無力で、どこまでも無力で、弱くて——。
ひとりだけでは、信じる心だけではおまえを救えない。
想うだけで何もできない。
それが現実。

「！」

はっと亮介は息を呑んでいた。その光景をとらえた瞳が、衝撃に震えた。

（希沙良）

遠野一真の視線は冷静なものだった。

予測されたケースのうちのひとつとして、彼は足元の——希沙良のことを眺めおろしていた。

地面に直接ひざまずき、掌をついて、低く顔をうつむかせる和泉希沙良の姿というものを。

恭順の礼。

さからわず己の劣位を認め、懇願する態度だ。

「俺には……」

厳しく、こわばった声で希沙良が口をひらいた。

「できることが、これしかない……あんたに、頼む、だけだ」

自尊心も誇りもかなぐりすてて。

唯一、この現実に対して立ちむかう方法。

どれほど貶められ、傷つけられても。

「確かに、傲慢な君が土下座までしてくれていると思うと僕も少しは驚く」

ゆっくりと一真が呟いた。

「ならば徹底してくれ。どうせ茶番なんだ。三流芝居は三流芝居なりに、僕を満足させてくれないか」

まだ足りないと彼は言っているのだ。面を伏せたまま希沙良は奥歯をかみしめる。頭の内側が熱くなり、血液の流れがめちゃくちゃになっていく。

「……お願いですから……」

死んでも言うはずのない科白。

このような、相手に。

口が裂けても。どうせなら——いっそ裂けてしまったほうがいい。

「教えて、ください……お願いします」

「……」

淡々とした表情でそれを見やり、一真は数秒間、考えをめぐらすように沈黙した。

(充分だ)

ぶつけられない憤りが亮介のなかで渦巻く。

限界だと思えた。

(もう充分だ)

そのまま、互いの間に割りこんで怒鳴りつけていたかもしれない。あと一秒でも、遠野一真の応答が遅れていたら。

「わかったよ。あまり意表をついてもらえなかったのが残念だけれど……教えよう、この件には咸月殿の御身内が絡んでいる」

ごく冷ややかにそう明かして、一真は希沙良の前から歩を踏みだす。屋上から階下に戻る出口へと向かって。

「僕は今からそれを冴子殿に報告しようと思う……。すぐに、十九郎が運ばれた先の見当はついてくるはずだ」

「……外道かっ……」

コンクリートの表面についた掌を、激しく、強く、真っ白になるほどに握りしめながら希沙良が吐きだした。

「君に言われたくない」

深い怒りをこめて切りかえし、一真は出口の扉を音をたてて閉めると屋上から姿を消した。

結局、彼は終始、亮介には目を向けもしなかった。徹頭徹尾の無視というのも、かなり気分のよくないものだ。

それは勿論……希沙良のようにぎりぎりまで責めたてられるよりは、ずっと楽な立場だとしても……。

不意に静まりかえった屋上にたたずみ、こぼれてくる溜め息を抑えずに、亮介は希沙良のほうを見返った。

「希沙良……」

膝をついた地面から、彼の影が動く気配はない。

一瞬ためらって、そして亮介は急がずに、そっと彼の隣まで自分の足を運んだ。

「希沙良」

屈辱に、見開かれたきりの双眸。

心の中枢に護った、侵されてならない、大切なものをすべてずたずたに砕かれた。

輝きの宝石が。根こそぎ、泥まみれの腕で掻きまわされて。

とりかえしのつかないところまで……。

(壊された)

——支える力を急に失って希沙良はコンクリートの上に肩から崩れおちる。自分は泣いているのか？　それすらわからない。

「希沙良……！」

傍らに座りこみ、呼びかける声を高めて、亮介はその背中に片腕をさしのべた。

「偉い……よ、頑張ったよ希沙良……」

「……駄目だ……」

拳に押しつけた瞼の下から涙が溢れだしてゆく。

冷えきった涙。他人のもののよう。

「駄目だ……駄目にしちまった……戻れなくなっちまった」
「何言ってんだよ馬鹿!!」
亮介が叱りつける。摑んだ希沙良の肩を、自分のほうにひきよせて。
「何言ってんだよ……何が駄目になったんだよ、希沙良は負けてないだろ。ちゃんと、立派に、頑張ってたじゃないかっ……」
「……変わっちまう……俺が……」
耐えられない。
元のままの、胸に悪意の楔をうちこまれる前の、何もなかったときの自分には戻れない。
「それでも希沙良は希沙良だろ、あたりまえだろ、そんなこと?」
「あいつが……帰ってきても、俺がっ……」
濡れた右手の指で自分の顔を覆い隠して。
子供のようにただひとつの不安をくりかえす。
「俺が……!」
「大丈夫だよ、絶対に大丈夫だから……!!」
言い聞かせている亮介のほうが哀しくなってくるほど。
「大丈夫だから頑張るんだ、希沙良が頑張るんだ……希沙良は頑張らなくちゃいけないんだ」
苦しくても。涙がとまらなくても。死んでしまいそうにつらくても。

現実の動きはまだ、何も決着を見ていない。

だから希沙良は立ちあがり、戦わなくてはならないのだ。その代わりには亮介はなれない。誰も。

（頑張るんだ）

立ち向かう、と決めてから先が更に苦しいように思えるのはなぜだろう……。

失えない幸福ほど、簡単に消え去りそうに思えるのは。

運命なのか。

（そうじゃない）

つよく、亮介は信じようとする。諦めを近づけまいとする。自分で信じるしかない。信じて超えるしかない。

（克つんだ）

透明な涙を落として身体をふるわせる希沙良を、精一杯の力で支えながら、亮介は彼に語りかけつづけた。それがせめてもの、今まで何度も彼からうけてきた励ましの返礼になればいいと、願っていた……。

3

青山通りの交差点を、強引なハンドルさばきで不破武人はまわりこむ。
外苑前で急停止したインテグラの助手席に、明石川耕宇が大柄な身体をとびこませてくる。
ドアが完全に閉まるのも待たずにインテグラは再び高速で車線の先へとすべりだす。
「どういうことだ」
険しく眉をひそめた明石川が、言わずにいられないといった風情で一声を発した。
「わからんな」
武人が答える。
七瀬冴子からの、その通達が入ったのはつい先刻のことだ。すぐには頭の整理がつかないというのが本音だった。
信号の変わりめで減速する先行車に鋭いクラクションを叩きつけ、脅しをかけるような傍若無人な態度で真横をぬきさる。いつになくやくざな彼の運転ぶりに、助手席の明石川は気難しい顔をつくりながらシートベルトを装着した。
「まだ生命は惜しいぞ俺は」
睨みつけるが、武人からの返事はない。

かわりに、独白めいた呟きが洩らされた。
「……俺が甘すぎたようだ」
苦い、己そのものへの怒りが武人の内にはある。
「甘すぎた」

「咸月、楷？」
公衆電話の機体にひじをつきつつ、諒はその名前をくりかえす。
いきなり、新たに浮上してきた名前だ。
咸月家次男――咸月陣の弟ということになる。
里見十九郎が所沢の不破邸から失踪した折に、その直前、何の必然性もなくそこに姿を見せていた不審な人物。……重要参考人扱いか。さしずめ。
「あのねえ冴子さん……どうしてそういう肝心な話が真っ先に出てこないんですかね」
『ちょっといろいろあるのよ』
回線の向こうからは冴子が不機嫌な声を返してくる。
『……いろいろあったのよ』
「あ、そう」

『……。詮索されたくないけど、一言で納得されても腹が立つわね』
ひどく複雑に冴子が呟いた。
「俺に聴いてほしいの冴子さんは？」
『いやな言い方しないでほしいわねっ。説明なんかしてほしいのあんたは？』
「いや、冴子の『いろいろ』でおおむねわかっちゃったけどね」
『……。あんたこの件が片付いたらしばらく絶交ね』
「しばらくねえ」
諒はかすかに溜め息をつく。溜め息の八割は、冴子の語らない、希沙良たちの側の事情についてだ。遠野一真が居残り発言をした結果がその情報ということは、やはりなんらかの避けがたい修羅場があったと考えていいだろう……。
「……まあ、亮介がいるから大丈夫だと思っておるですが……」
そこまで言ってしまってから、途中の経過をすっとばした科白になったことに気がついた。まずい。
「いや!!　そっちに亮介君がいてよかったでしょという話よ、絶交がどーのではなくてよ」
『あ、そう』
冴子からは、ごく、ごく冷ややかな反応しか戻ってこない。
『よおくわかったわ』

「もしもし？」
『とりあえず、あんたみたいに浅墓な人間をきっちり懐柔できるようになった亮介ちゃんはとっても偉いとあたしも思うのよ』
「……はあ。そうですね」
『この際そういう貴重な人材はあたしたちに譲りわたして、あんたは海の底にでも潜っててくれるかしら』
「冴子さんが一緒でなくては俺はいやですよ」
とたんに、なんともいえない沈黙が生まれてしまった。早く何かつっこんでくれと諒は受話器の先に願っていたのだが。
『ばっ……ばかねっいつオチが出るのかと思って待っちゃったじゃないのっ!!』
「……俺のせいにしますかねえそこで」
嘆かわしく電話機のかどに額を打ちあてて呟き、そして諒はよいしょと立ち直る。
「んで咸月楷の動きと足取りは」
『咸月殿が大騒ぎでつきとめると思うわ。現在進行形で、それはもう咸月家の名誉にかけて探らせているところだから』
「なるほど」
ともかく、ひとりの人物をとっかかりにするだけでも。

絞りこむ対象は見えてくる。
そうやって探索の輪を狭めていけるのは、ありがたいことだ。一応は。
（ただし安心はできない）
里見十九郎の、あらゆることへの対処能力を諒は高く評価している。
が、へたに威月陣たちがここで焦りをあらわしてしまうと、かえって危険な方に話が向く可能性はある。
（隙を作る……）
どんな危惧も、現実にならず笑い話で終わりさえすればいい。容易に解決がつきさえすれば、それがいちばんいいのだけれど。
「俺はちょっと俺なりのスタンスで動いてみたいんですが、どうでしょうね冴子さん？」
『あんたって放っといてもいつもそうだと思うんだけど』
「人間、得意わざで勝負かけるのが大切。すーごく大切なことなのよこれは」
『なんとかのひとつおぼえって真理もあるし。闇雲につっぱしって返り討ちにさえならなければあたしは文句ないのよ』
「冴子さんに許可をとってる時点で闇雲じゃないと思うですよ。俺はね」
まじめに、諒はそう囁きかける。いまひとつ不本意なようすで冴子は黙りこむ。
『……どっちみち、こうなってくるとあの四人組にも自分たちの内情さぐられたくない気分が

あるだろうし、こっちも藪から蛇は出したくないし、あたしの判断で諒はちょっと別枠に遠ざけるわ。それでいいでしょ？』

「結構」

短く、諒は頷いた。頼もしい女神様で助かる。なぜかそこで実際に褒め言葉が出てこないあたりが、困った間柄だ……本当に。

「最後にひとつ」

きりだしながら、そうかこういう質問が出てくるのがいかんのだなと諒はひとりで納得する。

「冴子さん、忍の居所、知らない？」

『……悪かったわね!!　あの人に相談ができてたら苦労しないでしょ誰も!!』

「まあね、あいつにしては律儀に不在宣告をふりまいてから消えたからね……」

忍のほうに、別件でぬきさしならぬ役目があるというのは、全面的に事実かどうかはさておき出鱈目でもなかろうと思える。少なくとも六本木のマンションでわずかに接触したときの彼の発言と、黒装束の姿からは、決して呑気な想像はできない。

斎伽忍は斎伽忍なりに、なにか神経を尖らさずにおけないような、面倒な問題を抱えている。これまでの彼の行動を総合すると、自分はそれで頭が痛いから十九郎の件はそちらで頑張れと言い置いて去ったことになる。身内に対してあまりに冷たいしうちと見るべきか、腹心の



人物の危機にさえかかわれぬほど重大な事態に面していると見るべきか……。

（忍サマ極悪人説に三万点）

言いきれたら楽なのだが、昨今の斎伽忍にはどうも油断のならないところがある。

『今回のことは、あたしは何も伺ってなんかいないわよ。……ほんとよ』

「ええと俺がばかなことを訊きました。わかってました。すみません」

率直に謝罪して、諒はその話題からひきさがった。

「俺が悪かった」

冴子のせいにしてはいけない。忍と彼女のつながりかたや、自分と忍の関係などの……そういったものを。

『少なくとも忍様はあたしたちを、放り出してはいないと思うわ』

慎重な、考え深げな口調で、冴子がぽつりと言った。

『……信じてくださっていると思うわ』

「わかってるよ」

穏やかに、諒はシンプルな一言だけを告げると、ではまたねと会話をきりあげて電話のフックを指でおろした。

（わかってる）

諒にわかっているのは、斎伽忍が自分の陣営を信じたがっているということだ。

「苦労、するねえ……」

どこへともなくひとりごちる。公衆電話から吐きだされたテレホンカードを前歯にくわえ、諒は夏の夜の雑踏へと歩を踏みだした。

なにげなくジーンズのポケットにつっこんだ指に、ふと、冷たい感触がみつかる。

無言のまま、その一瞬に諒は顔つきを尖鋭なものへ改めていた。立ち止まり、ポケットの奥からひきずりだす——ちっぽけな、銀の色。

一本の鍵。

斎伽忍が冴子を経由して届けた……。

（あの大馬鹿者）

思いきり歯軋りをしたい衝動に諒はかられる。なんという遠回しなことを。こんな鍵ひとつきりでこの状況に何を悟れというのだ、いったい？

（甘えてるんじゃありませんよまったく）

自分のために動いてほしいなら、そうしてほしいとお願いするくらいの謙虚さを見せられぬものか。ええい忍様のばかばかばか、と唸りながら諒はぐんと身体の速度を切り換え、人込みをくぐりぬけるステップで街のなかを走りだす。

斎伽忍は待っている——。

彼の元に、諒がたどりつくことを。

4

一族のなかで流通している、咸月呉葉に関する公的な情報は、それほど多くない。

巨大な重工企業を掌握し七瀬分家のうちでも有力な立場を築いた咸月家の次期実権は、長男の陣がもつものであると、すでに一族合意のもとに定められている。咸月陣が充分に統率能力を認められ、すぐれた人物として将来を嘱望されているだけに、彼の下にひかえる弟妹たちはことさら脚光を浴びる必然をもたなかったわけだ。

長女、呉葉について了解されていることは、明石川耕宇との縁組話くらいだ。だがその婚姻も、実現を見るのはお互いが成人してからという約束ごとになっていたはずだった。彼女が一族の表舞台に出てくるのは、少なくともそれ以降——明石川家の令室となってからのことだろう。本来は。

そう、本来は、その程度で語りつくされてしまう立場の人物だ……。

自分の頬へ落ちかかってくる彼女の……見慣れた明色の、その長い髪には気をとめず、十九郎はまっすぐに、真上から射抜いてくる呉葉の視線と対峙する。

鋭い、誇りたかい女獣のような瞳をしている。

愚かな人物ではない。きまぐれな思いつきに流される不用心さは、その瞳のなかにはうかが

えない。大義を知る者の、理知を重んじる者の貌をもっている。……そして、論理だけでかたづかない、激しさを。

美しく感じないといえば、嘘になる。

「あたしのことをきらいじゃないでしょう、あなた」

念を押すように呉葉が言った。

「きらいじゃないわ。きらいな人との間には、きたない電気が走るのよ。あたしはそういうマイナスの思念に触れるのがいや。気持ちが悪くなるから。あなたはあたしと触れあえるひとだわ。あたしにはそういうことがわかるのよ」

「嫌悪感をもたないのと陰謀に加担することが、同じ意味にとられては困る」

抑えた声で十九郎はそう答える。きっ、と心外そうな怒りが呉葉のまなざしをさらに鋭くする。

「謀略者はあなたたちよ。あたしは間違っていないのよ」

「一族総意の決定でもないことを正義と言い張るだけなら、ただのテロリズムだ」

「ちがうわ。他に立ちあがる人がいなかったのよ。だれもが斎伽の使命を忘れて自己本位に走っている。どんな手段を使っても正されなくてはならないことよ」

「誰のために？」

「決まってるわ。一族総体のためよ」

迷わずに呉葉が言いきった。

彼女と十九郎の正義があいいれぬのは、当然のことといえるかもしれない。斎伽忍のために、とは呉葉は決して口にしないのだから。

できない……のだ。おそらく彼女は忍自身と言葉を交わしたことすらない。彼女の信奉するものは斎伽の血と因習であり、一族の宗主たる伽羅王への畏敬もその延長線上にしかないのだろう。

一族のすべての人間が、里見十九郎と同じく特権的な立場を得ているわけではない。

「君の信念が、真摯なものであることは評価する」

呉葉のプライドを尊重するように十九郎は静かに呟き、だが明らかにせずにはおけない問題を、それにつづけて問いかけた。

「ただ、思想的な手がかりを含めて、こちらがわの情報を君に流したのは……」

誰なのか、と。

言い終わる前に、船室の扉が突然ノックされた。びくりと十九郎の間近から身を離し、いらだった調子で呉葉が声を投げる。

「誰？」

「わたしです、呉葉さん」

ゆるやかに扉をひらき、足を踏み入れてきたのは高浪葵だった。

「驚かせないで」
「すみません」
動じずに葵はかるく謝罪してみせる。この家庭教師は、いつでもゆとりのある態度をくずさない。理性的でおちついた判断がくだせるのは美点だが、ことの重要さが伝わらないような煮えきらなさが、呉葉にはえてして不愉快に思える。
「お薬の用意ができましたので」
傍らに近づく葵は、片手に銀製のポットを携えている。呉葉はそっけなく頷いた。
「いいわ」
葵の告げた『薬』の一語に十九郎は厳しい目を上げる。おそらく、そこにあるのは穏当な意図ではないだろう――。
「気になりますか？」
何を問われもせぬうちに、自分の膝元に横たえられた十九郎と目を合わせ、葵がうっすらと微笑した。
「媚薬です。まずこれを服んでいただいて、それから呪法をおこないます」
剣呑な発言を、あっさりとしてのける。
（これか）
十九郎は胸中に呟いた。呉葉よりも、本質的に危険なのはこちらのほうだ。希沙良に呪を仕

向けたのもこの女のしわざなのか？

正体は、まだつかめない。

「門外の人間が呪をあやつるとはどういうことか……」

「不義をただすためです。それにわたしは門外の徒ではありませんし、道にはずれてもいませんよ」

堂々とした返事を葵は口にした。

苦しまぎれの言い訳には聞こえない。

「七瀬本家に古来から、なぜ数々の呪具が秘蔵されていたと思いますか。使いもしないのに揃えておく必要なんてないでしょう。いいですか、もとへ遡れば、地位に奢る術者の専横をおさえるためにそれはあるのですよ。対抗する術力を得られぬわたしたちの、切り札としてね」

あくまで教え諭す、何も知らぬ子供のように十九郎を扱う語調で葵はそんな説明をする。

「違う」

即座にはっきりと、彼女の言を十九郎は否定した。

「少なくとも今は違う。確かに歴史上、術者の力が強大にすぎて抑えがきかなかったことはあるだろう。だがそれは空者光臨がなされずにいた時代の理屈だ。現在その制圧力は空者伽羅王にある……おまえたちは伽羅王の権を侵している」

「その伽羅王の眼力をくもらせている張本人が何を言われる」

強い、嘲りに似た色が葵の声には宿る。
それはあきらかな、本家方の人間の反応だ。
しかし七瀬の一族のなかに彼女の姿を見た記憶が十九郎にはない。これほどに一族の中枢に近い発想をする人物が、十九郎とただ一度も出会わぬほど末端の位置にいるとするのは奇妙なことだ。いったいどういう相手なのか。
「眼力をくもらせるとは、ずいぶんと空者伽羅王を貶める発言ではないのか」
低く、十九郎は反問する。
だんだんと、そうして口をきくこと自体が困難になってきたように感じられる。再び、何か、特殊な作用によって身体の動きを縛る力が高まっている。
かすかな芳香。
白檀か。
「そちらこそ増上慢の詭弁というもの」
意にも介さず葵は十九郎の指摘をはねつけ、呉葉のほうをふりかえった。
「呉葉さん、どうぞ」
「わかってるわ。高浪はさがって」
「いいえ。お見届けしなければなりませんよ」
命令をうけいれられず、呉葉は神経質に眉をひそめる。

ポットの蓋に伏せてあった小ぶりな銀のタンブラーを葵は掌にとり、呉葉に手渡した。さからうことはできない手際だ。快くはないままに呉葉はタンブラーを受けとると、赤色の液体がそれに注がれるのを見守った。

〈赤蓮〉の法。

否が応もなく、めざした獲物を愛欲の虜にする。

どんな男でも呉葉の意のままに動くだろう。

一族の本道をはなれた術者たちが、あるべき姿をとりもどし、空者伽羅王の考えを誤った方角から転針させるには、ここにいる里見十九郎を自らに隷属させ改心を施すのが最善の策なのだ。

最善の。

「呉葉さん?」

「わかってると言ったわ」

厳しく、ぴしゃりと葵に言い返して。

震える指のなかの、銀の器を呉葉は握りなおす。

いや、身体の震えなどは意志の力で止められる。

そうだ、おそれてなどはいない。ためらってなどはいないのだ。

(正義は)

成されなければならない。
何を捧げても。
決意の念を奮いたたせ、呉葉は手中の杯からその秘薬を――唇に触れさせた。
くらりと、眩暈のよぎるような心持ち。
杯のすべてを飲みほさなくても良いきまりになっている。一口で充分に効力は生ずるはず。
そして、そのままの状態で互いの唇を重ねれば。
（ひとつめは成就する）
獲物の供えられた長椅子の上に、毅然として呉葉は片方の膝を乗せ、長い髪が流れ落ちるのをおしのけることなく自分の身体を傾けた。
そうやって間近に接する呉葉の姿から瞳を背けずに――抗う動きなどは初めから封じられている――十九郎は彼女のしぐさを注視しているようだった。ひとつひとつを。その視線を認識するだけで、かっと熱い感覚が呉葉のなかをさまよう。不条理な、緊迫。
（どうせ何もできない）
どんな自由も奪った後だ。
逆らうことはゆるされない。
呉葉にはそれが唯一の保証だった。一部始終を監視する高浪葵にとっても、それはゆるぎのない優位だった。

ゆったりと両腕を組みあわせて見守る葵の前で、呉葉の髪が生贄の貌を包みこんだ……そう見えた、直後のことだった。

「!!」

あっ、と呉葉が悲鳴をあげたときにはすでに形勢の変化が完了していた。冷静な葵が一瞬、双眸をみひらいて声をなくした。

身動きひとつできないはずの里見十九郎は、いかなるすべによってか長椅子にその上体を起こし、背後から腕をまわすかたちで呉葉の身を拘束していた。彼女の喉元を右手の指で覆うようにとらえ、いつでもそれ以上の危害を加えられる状態で。

呉葉は一言も発することができない。ふりほどく隙もない。とらえられた喉元が息苦しい。茫然と、相手の腕の力に身を委ねるしかなかった。

「これだから若い術者というものは……」

独白まじりに、苦々しく、葵が呟いた。

「愚かな真似はおやめなさい。気の力に任せていたずらに呪にさからうのは、あなたの生命を削ることですよ」

「お心遣いは遠慮したい」

十九郎が答える。

意志の支えで無理を通すことには慣れてしまっている。直接的な負の磁性が身体の芯にかか

り、呪を一手にうけた心臓が抗議の痛みを訴えているのは確かに事実だった。だがこの時だけのチャンスを、手をこまねいて逃すわけにはいかない。

「人質はこちらにある。船を、港に戻してもらいたい」

「利口な交渉ではありませんね」

葵は静かに表情をおもつかせる。驚愕の感情は、すでに彼女から遠く飛び去っていた。

「いずれにせよ、あなたはそこまで持ちこたえはしないはず。不幸な結果になりますよ」

「高浪っ……」

かすれた声で、呉葉が呼びかけた。

（どうすれば）

いざとなると葵に縋る以外の気持ちが出てこない。まさかこうも見事な逆転が待ちうけているなどと、考えてもみなかったのだ。

「……」

ふ、と葵は薄い笑みを口元にのぞかせた。

「わたしは、あまり、予定外の手間は好かないのです」

なめらかに空を流れた彼女の右手は、持ちあげられたときにはいつの間にか一挺の拳銃を握っている。膝上のホルスターからひきぬいたものだ。

ワルサーPPK。

優秀でスタンダードな、ドイツ製オートマチックである。
「お離しなさい。早々にあきらめればわたしも手荒なことはせずにすみますよ」
撃てば人質の呉葉をも傷つけるであろうという論理は、葵にとってさして意味をもたない。
「即答しなさい。わたしは待ちません」
さらりと宣告する。
短い空白が、それにつづいた。
(……そうか)
全身を占める鉛のごとき重さに耐えながら、十九郎は悪い想像のほうが的中したことを確認しただけだった。
(初めから、そういうことか)
そして葵は本当に、必要以上に待ちはしなかった。
「ならば、しかたありません」
「え?」
愕然と、呉葉がその銃口を見つめた。
「高浪?」
信じられぬ気持ちで、尋ねる。
「嘘でしょう?」

「呉葉さんの望みが通ればそれがなによりですが、わたしはそうでなくても困らないんですよ」

にわかには理解しづらい答えが葵からは返された。

「嘘」

どういう意味なのか、わからない——。

充分に考える余裕も与えられず。

現実感をとりもどせぬまま呉葉はすぐ目の前で発砲される、鈍く激しい音を聴いた。その寸前の一瞬に、呉葉の身はとっさに里見十九郎の腕によって、弾丸の軌道上からつきはなされていたようだった。では誰が撃たれたのだろう？　鼓膜の痛む耳を塞ぎたい気分で、だが何もできず、呉葉はぼんやりと後ろをふりかえる。

……ふりかえる。

5

わあん、と群衆のどよめきが、軽い空気をゆるがす振動となって伝わってきた。

報道関係者のパスを使って、鷹木文彦は誰にも咎められることなく巨大なスタジアムの内部へと踏みこんだ。試合は白熱の展開を重ねているようだ。本来なら缶ビールの一本でも片手に

観戦を愉しみたいところだが、それはさておき。

一般の観客が決して出入りできない、東京ドームの真下に向かって文彦は歩みを進めていく。

人工的に温度と気圧を調整されるドームのなかは、どこか外部とズレた雰囲気をもっている。いわゆる空気膜構造のせいばかりではあるまい。膨大な量の人間を日々のみこんでは吐きだすという……歓喜や興奮や怒りや憂さといったものたちを、一杯に湛えては流しだす、癒されぬ場となっているからだ。情緒の部分だけが肥大した人格にありがちな、ぽかんとした表情が空間に漂っている。

これは少なくとも奴の好みには合うまい。

あくまで皮肉に、文彦はそう考える。

(身につまされるであろうからな)

数多の声をのみこみいずれ吐きだす、掃除機のような役割を負わされているのはまさに〈天〉の代理人を自称する、彼の王と変わりない。

ここが会見の場に選ばれたのは、ひとえに、五万人の人質をお手軽に確保し得るためだった。間違いなく、それだけだ。しかし五万をこす生身の人間が頭上にあると知りながら、なお身震いが走るような、どうにも抑えがたい心の騒ぎが文彦の、〈雷将〉勝呂の魂から今もってわきあがる。

逸り、猛る、蛮性の震えだ。
（こうもきさまに焦がれるとは、我ながら嗤えるありさまだ）
我が身を討ち滅ぼしに攻め至る――。
強大無法の現神、聖帝にして残虐な裁定者に対し、おそれよりも、おののきよりも先に昂りが来るものとは。
「……ふん」
口元に、微妙な歪みをまとわせると。
冷たく暗い灰色の通路に、彼はふと立ちどまった。
異様なほどに人気を断たれた、四方の静寂。
スタジアムを埋める喚声までがなぜか、異界の遥かへ遠ざかっているようだ。
「待ちわびたぞ」
まるで旧友と対するがごとき気安さで、文彦はそう呼びかける。
雷将勝呂の瞳にうつるものは漆黒の化生。
（闇衣裳とは）
おもしろい。
玲として、さらに透明高逸の境を増す、白き美貌の輝きはもはや妖幻にならびたつきらかさ。それを知り自らを無涯の暗黒色にて護り籠めたつもりか。

（……ばけものめ）

かぎりない偏愛の念をこめ、彼はその異形の神を、己の前に迎えいれた。

宿業あるかぎり、永久不変の――怨敵。

空者総帥、伽羅王。すなわち斎伽忍という名の、いまわしくもなつかしき、ひとりの青年を。

――つづく――

あとがき

で、あとがきです。

本文の内容はおいといて強制的にあとがきに入らせていただきます。いや、このページのうしろを捜しても別に後編は載ってませんので、とりあえず穏健に、さわやかなお心持ちであとがきを読んでいただければと。ほほほ。（いつの間にか態度が強くなったぞこいつ……。やっぱし齢とると図太くなるのか）

お久しぶりでございます——もしくは、初めまして。

ハイスクール・オーラバスター第二期一冊目をお届けいたします。

永らくお休みをおいての、ようやくのシリーズ再開（再会って感じだねえ。なんだか）ということになります。

お元気でしたか？

私も亮介君たちも元気でした。とても。

平和に眠っていたわけじゃなかったけど、頑張って、めざすところに向かって走りつづけていたんだなと……今回の物語を書きだした瞬間、それから書いているときも、ずっと思ってました。

あんまり速く自力で彼らが進んでいくので、お休みの間はずっとその背中を眺めて、大丈夫か？　これはほんとにオーラバスターか？　と確認してたんだけど。

大丈夫でした。ははは。

昔と変わらないわけないけど、いやむしろ変わらなかったらおそろしいと思うんだが、でも大丈夫でした！　こんなに愛しい大事な人たちだもん、何年待たせたってかっこわるくなってるわけないじゃん、へへへんっ。（おいそりゃちょっと図に乗りすぎ）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。

御心配をかけてしまった皆さんには、本当に本当にごめんなさいでした!!

たくさんの励ましのお言葉と、じっと見守っててくださった方々のおかげで、ちゃんと書きたくて書きたくてしょうがないものを書けました！

逃げも隠れもなしで。

これが、わしの、１９９５年モード、最新型オーラバスターであります。

（つっても完結していないのでまだ「これ！」と言いきるには心苦しいものがありますが）

後編はすぐさま出す予定（うえー。きっと誰も信じてないよこれー）ですので、今しばらく

お待ちくださいませ。

まずは……やはりこれを言わぬとおちつかんので毎度のお願いを少々。

ご意見ご感想、ご叱責ご質問、その他もろもろおいこら懲りねえやつだな若木どーしてくれるんだ責任とりやがれ（↑誰のセリフかわかるぞ。へっ誰が希沙良の手助けなんかするか自分でなんとかしろ。ああ本当に図太くなったなー私。笑）、などなどの、皆様の感じたとおりのお手紙をお待ちしております。凄く凄く!!　心より、お待ち申し上げております。

えーと『天冥の剣』完結が一昨年の秋だったわけですがー……うああっそう考えるとあのシリーズとかこのシリーズはもっとひどいことになっているぞ!!　じゃなーくーて、いやそれは若木の自業自得なのでおいといてですね（泣）その間に、『天冥』の後日談としては、番外編的な話を文庫以外の場所で書いてました。昨年十二月に刊行したハードカバー単行本『天使／来撃』収録の「シグナレス―合図―」「風待月」と、今年の雑誌コバルト4月号（なんとハイスクール・オーラバスター大特集だったのだ）に掲載した「荊姫」の三本です。

物語のなかの季節は『天冥』が五月の後半で、今回の本では七月前半まで飛んでます。天冥の直後からしばらくは、忍さんたちも番外編ができるくらいにはけっこう余裕のある状況だった（いや病人とか怪我人とか地方出張者とかもいたけど）というわけですね。

途中の話がなくても今回の本は『天冥』のつづきとして読んでいただけるんですが、三本の

番外編を知っていればさらに見えてくるものがあるかと思いますので、よろしければそちらもチェックしてみてくださいまし。『天使／来撃』はハードカバーでちと高いのが申し訳ないがっ、すーごく頑張ってつくりました。絶賛発売中です!!　コバルト4月号は……うおー、友達に貸してもらうんだっ。

ちなみにシグナレスとゆータイトルの元ネタは宮沢賢治でした。気がついて手紙を書いてくださった人がいたので嬉しかったです。私、宮沢賢治さんの小説で好きなものを三つあげたら「猫の事務所」と「シグナルとシグナレス」ともうひとつ、かな。もうひとつは「いやっあの話も好きだしこれもっ……」と迷うので、秘密なのだ。（笑）

『天使／来撃』は歴然と、一冊まるまるはっきりと忍様のための本だった（らしい）んですが、実は、蓋をあけてみたらもうひとりこっそりと得をしている奴がいたのだった。里見十九郎という人です。くそう、そんなはずはそんなはずは……。第二期の一冊目では里見を優遇すると公言しておいてまんまとこんなことになってる私もそりゃー悪いといえば悪いですが。唸っていても仕方がないので、さっさと発表してしまうのだ。

今年のバレンタインにも、全国の心暖かい皆様から、若木のマネージメントしておりますキャラクター一同に、チョコレートを初めとしてさまざまな贈りものを戴きました。本当に本当にありがとうございました。

これまでと同じく、キャラクターごとに、プレゼントの数を集計させていただきました。一応ですね、公正に、きちんと集計したはずなんですが！……（未練がましいぞ）。

一位　里見十九郎　（一〇〇）
二位　和泉希沙良　（八〇）
三位　水沢諒　（六三）
四位　若木未生　（二六）
五位　斎伽忍　（二四）
六位　崎谷亮介　（二二）
七位　七瀬冴子　（九）
八位　叶省吾　（八）
同点九位　牙　（四）
　　早水京平　（四）

以下、十一位　鷹木文彦、里見夏江、イズミ、藤谷直季、高岡尚（三）
十六位　神原亜衣、不破武人（二）
十八位　大月雄二、峰岸克也、遠野一真、剣司、片桐龍太郎、妙子、西城敦、麻生和浩、鏡の妖者、渡辺拓己、香ケ沢静、西条朱音、坂本一至、ザザ、早水真砂、浅見優亜、江口秋史、来生あきら、来生閃、アスヴァル、エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトン（一）

というような結果となりました。ほ、ほんとに百票も入りやがったんですよ。ひとりの人が百個も送ってきたのかとまで疑ってしまったが（ひどい作者だ）そうではないんだ！　なぜか数えたら百票だったんだ（泣）。いえその……素直によろこべばいーんだが……。ど、どうもありがとうございました。でもなんかどんでんがえしがありそうで怖い……。

あとはですね、「みんなへ」というチョコを送ってくださった方がふたりいらしたのと、それから誰宛てか書いていなかったチョコレートが二つありました。とりあえず、お手紙で後から「あれは十九郎のです！」とか自己申告してくださったものはちゃんと数えられたと思うので、ご心配なく。とにかく、くりかえしてばかりだけど、どうもありがとうございました。それとね、チョコレート以外にもいろんな趣向の贈り物があって、ひとつひとつ中身を見るのがとても楽しかったです。でも、いつも言ってるけどお気持ちだけで充分嬉しいんだよ。

あっ、がーん師隊長の名前がないーっ……私があげればよかったのか！（いや違う気もする）

ところで現在の私は、本田恭之氏のできたてほやほやの新曲を聴きながらこのあとがきを書いているのでした！　新しいオーラバスターのアルバムに収録される曲なのだ!!

実はですね、一昨年、去年と、一年に一枚ずつ創ってきた「オリジナルアルバム」ですが、

なんとたった今、新作を制作しております。発売がこの本から約一ヶ月後かな？　もうすぐ出ます!!　発売元はいつものパイオニアＬＤＣさんです!!

私、前の二枚が完成した時点で手持ちのオーラバスターの要素は全部出したなという気がしていて、あとは原作がもっと進行しないと新しいアルバムはつくれないのでは？　と言っていたんですね。最初は。

しかし、前の二枚に収められた曲を、元々とは違うシチュエーションで聴いたらどうなるだろう？　ということを考えまして。

んで創ることにしたのが、

「ハイスクール・オーラバスター　オリジナルアルバムＤ－Ｘ『天冥の剣』」

という、とんでもない代物なのだった。これはっ、これはもおおお、普通こんな面倒なことやらんよってゆーとんでもないものなんです!!

何がどうとんでもないって『天冥の剣』の物語を一枚のＣＤで表現しようとするコンセプトアルバムってところが、もう命知らずなんですがー……。

オリジナルアルバムの曲を既にあるサウンドトラックとみなして、まず楽曲を中心に立てて、そのうえで『天冥の剣』のヴォイスドラマを構成したのだ。通常のＣＤドラマと全然、逆のほうから作業してるわけです。

ＣＤドラマというものは、普通だったら一枚聴いたら原作を知らない人にもストーリーが伝

わるように、独立したドラマとしての完成度を追求して作ってあるんですが、今回のは違う。ドラマとしては邪道だし未完成なものでしかない、そういうものを、最初で最後というつもりであえてやってみた。若木がこだわれるところまでこだわって、セリフの一語一句も変えずに、小説とまったく同じ表現の、はっきりいって原作を読んでいる人のためだけの「イメージアルバム」を創りました。……なんて嫌な原作者なんだ。（泣）

バラバラなシーンを原作通りに演じなきゃならない声優さん方の苦労がどれほどすさまじかったかは、きっと聴けばわかる……本当に本当に凄い、普通やりたくないことをやりとげていただいてます。しかもキャスト総勢十七人という贅沢さだ。どうすればいいんだ。

で、さらにそれに、オリジナルアルバムの曲を再利用するだけじゃなくて、本田さんにアレンジをお願いしたり新曲を書いていただいたりしているんだよー!!　絶対、普通こんな各方面に苦労の爆弾を落としまくるよーな真似はしないんだってば!!　ただの迷惑野郎だってば。私もこんなもの創るのはほんとに、最初で最後でしょう。天冥だからやれたんだよ……。

だけど、本田さんのかきおろしてくださった壮絶に美しい曲に包まれて、天冥の剣を顕して雷将勝呂と対決する斎伽忍とか。

鎌倉の本家で、希沙良を制裁する十九郎とか。

桜舞う回想のなかの冴子と諒とか。

『サイレント・アイズ』をバックに「信じるしかないんだ」と呟く亮介とか。

「だから今はおまえが勝て！」を言う諒とか。
聴いてみたくない？
聴きたいよね？
私は絶対それを聴いてみたかったのでした。……ものっすごく沢山の人に無理をお願いして頑張っていただいて、大変なことだったけど、実現して、とても、とても嬉しいです。

オーラバスターと私のつきあいはどこまで行くのかなあ……。
なんてことをつらつら考えると、けっこう怖い。もう六年めなのになー、書きたいこと、書かなくちゃ終われないこと、自然に湧きだして増えてゆくもの、いつの間にかのりこえて変わっているもの、いろいろありすぎていつ片付くのかもわからない。
つい先日も友達と、
「そのうち諒がこんなになって希沙良がこういうことする予定があるんだー」
「えっ、ほんとに？　いつ読めるのよ？」
「再来年かな」
「さらいねんだああ!?」
などとゆー、たいへん悲しいやりとりをしてしまったのだった。いや、どう急いでもその話

の順番がまわってくるのは再来年だろう……というつもりだったのだが……もっと先かもしれんし。

いつまでも書き続ければいいとは全然思わないのだけど（いやまじで早く決着をつけてあげたいと思うんだ）、それでもずっと、一生、この物語は私から離れないだろうなという気がちょっとする……のでやはり怖い。

終わりはいつかきっと、それはもう容赦なく来るので、どうか最後にはうんと高いところまでたどりつけますようにと今は願ってます。

まだまだ足りてないです。

素晴らしいものを、本当に素晴らしい偉大なものを書ける人になりたいなあ……。

（ああーっ何をあたりまえのことを言っているのだーっ!!）

まずはこの作品の後編を無事にお届けするのが、真っ先の目標なのでした。

八月後半からは、漫画版のオーラバスターでも新作の連載がスタートする予定です。すごいな我ながら（笑）。

杜真琴さまにはまたもや、つづけざまに漫画と文庫の両方でものすごくお世話になってしまいます。あう……杜さん、第二期に入ってものっけから原稿の上がりが遅くて……本当に、申

し訳ありませんでした。それでもって、もう、これでもかと美しい里見十九郎の表紙をどうもありがとうございました。この男のことを美しいというのはくやしいんですがっ（笑。すでに我々の天敵となっている）しかし……しかしかっこいいです。ちくしょー。

漫画のほうは、もはやおなじみの、白泉社ララに掲載されます。タイトルは『アーケイディア』ということになっている。その昔デュランデュランというバンドのメンバーが二つにわかれて、それぞれ企画ユニット的なバンドを組んで、それがパワーステーションとアーケイディアで……なんて話ではなくて（く、くだらねーっ）アルカディア、理想郷、という意味です。メインには冴子さんを考えております。あとは里見とか希沙良とか水沢とか亮介とか……（笑）。

……んでもって、パワーステーションのドラムは文句なしにかっこいいぞ。（笑）

さて。そろそろ今回はおひらきです。

次のあとがきでは、ずーっと宙に浮いてた牙の名前の由来とかお人形のイズミちゃんの話とか（いつのネタだーいつのー）してみましょうか？　もお、いい？（苦笑）

後編は、さらに七瀬さんの家の事情に踏みこむことになります。

頑張ってくれ亮介。

最後に、今回も、いろいろな面でサポートしてくださった大勢の方々に、お礼を申し上げます。

特にコバルト編集部、川野様。大嘘つきになってしまって、本当に申し訳ありませんでした。甚大なご迷惑をおかけいたしました。深く、深く反省しております。

そしてここまで読んでくださった方。

どうもありがとうございました。

後編のほうも、どうぞよろしく覗いてやってくださいまし。

それではこのあたりで。可及的すみやかに、またお会いできれば幸いです。

若木未生

《追記》『天冥の剣』四巻のあとがきで「若木未生黙認FCプラーミア」の連絡先を掲載しましたが、時々、こちらへ若木宛てのお手紙を送られる方がいらっしゃいます。

若木へのお手紙はプラーミアでは受けつけていないので、必ずコバルト編集部気付でお送りください。天冥四巻ではFCについて詳しくご説明しなかったので、誤解が生じてしまったようです。プラーミアでは、活動内容や入会方法についての問いあわせだけを受けつけています（八十円切手貼付の返信用封筒同封の上でお問いあわせください）。よろしくお願いいたします。

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ッ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月2日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽と猫。最近はネスカフェ・マイルドタイムとNEC98マルチが孤独な仕事場の友である。趣味は引越し。(早く引越したいぞ！)コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)(後編)』『天冥の剣1～4』『エクサール騎士団1～3』『XAZSA Ver. 1～2』『グラスハート』『薔薇とダイナマイト』などが、また単行本に『天使／来撃』がある。



星を堕(おと)すもの(前編)

COBALT-SERIES

1995年6月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268(編集)
電話　東京 (3230) 6393(販売)
(3230) 6080(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1995　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-614077-2 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

熱いハード・ビート小説！

若木未生 〈グラスハート〉シリーズ

イラスト／橋本みつる

グラスハート

深夜、朱音のもとに奇妙な電話が。「大至急、あんたのドラムが欲しい」それは天才音楽家・藤谷からの誘いの電話で…！



ステージを終えた直後、尚と藤谷先生が絶交宣言!?理由が分からず、朱音と一至はボーゼン。そんな時、ようやくCDデビューの話が…。

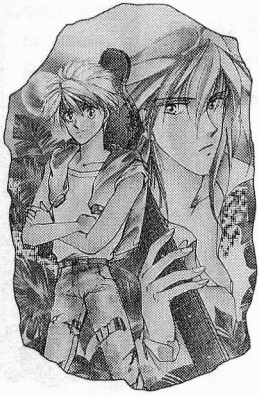
薔薇とダイナマイト

〈好評発売中〉 コバルト文庫

機械人間（マシノイド）ザザと少年たちの人気
シティサイバー・ファンタジー。

XAZSA（ザザ）
Ver.1 Ver.2

若木未生
イラスト／田村純子



夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト・京平が偶然出会った少年ザザ。彼は、天才少女の優亜につくられた国家機密級（トップシークレット）の機械人間（マシノイド）だったのだ…！

コバルト文庫

〈好評発売中〉

命にかえても、巫女（エクサール）を守る！

エクサール騎士団（ライエノーツ）1〜3

若木未生

イラスト／羽音こうき



多元体の因果力（エール）を制御する者、その名はレア…。不思議ファンタジー！

十歳のとき事故で両親を失った少女・あきらは来生芳秋（きすぎよしあき）の養子になった。そこにはあきらと同じ境遇の衛（えい）・閃（せん）・貢（みつぐ）がおり、４人は兄妹として育った。一見、ごく普通の家庭…に見えるが、実は３人の兄たちは、あきらを守るための異界からの使者で…。



コバルト文庫
〈好評発売中〉



術者VS妖者の凄絶な戦いが、今…！
大人気のアクション・ファンタジー。

若木未生の本

〈ハイスクール・オーラバスター〉シリーズ

イラスト／杜 真琴

天使はうまく踊れない

フツウの高校生・亮介の周りに、妙になれなれしいヤツらが。

セイレーンの聖母

とてつもない妖気を持つ敵が、〈術者〉たちを次々に襲う!!

十字架の少女

かたくなに心を閉ざす少女・彩をめぐって〈術者〉たちは。

迷える羊に愛の手を

希沙良と十九郎の生活など、オムニバス形式でおくる番外編！

炎獄のディアーナ(前編)(後編)

女の子を狙う髪切り事件が！　妖の者の仕業らしいのだが…。

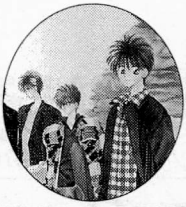
天冥の剣 1〜4

『吸血鬼殺人』事件が発生。どうやら背後には妖者の総帥(そうすい)が!?



好評発売中 **単行本** 〈A5判・ハードカバー〉

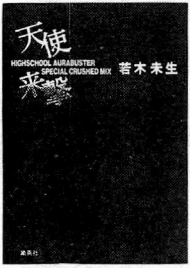
あのオーラバスターの最新作が、
単行本でついに登場!!



若木未生

天使／来撃

HIGHSCHOOL AURABUSTER
SPECIAL CRUSHED MIX



第一部完結から一年、ついにオーラバスター最新作が登場。デビュー作や対談、エッセイなど、スペシャル企画満載の特別短編集！
杜　真琴の描きおろしイラストつき。